



14.5  
27



始



14  
27

働  
調  
査  
報  
告  
No.16.

常  
傭  
勞  
働  
者  
の  
生  
活

大  
阪  
市  
役  
所  
社  
會  
部  
調  
査  
課



寄贈

序

寄贈本

14.5-27



労働者の内部的精神的生活の方面を調査する一方法としてモノグラフィ法によること、モノグラフィ法は一には市立共同宿泊所の宿泊人、一には「家計の棗」一ヶ年繼續記入者とその対象とすることは、第十一輯に既に述べておいたところであり、これを明にせんとするにありまして、本篇はこの後者に属するものである。第十輯の續篇と見るべきものです。

さうした最初の計畫でありましたが、「家計の棗」一ヶ年繼續記入者を總て調査することの不可能な事情もあり、かねて成るべく多くの業態に従事する人々に觸れたい希望や、又一人でも多く調査したいやうな欲求も起つたので、當初の計畫を多少變更して、機械、染織、化學、特種等の工業労働者の外に、労働団体関係者や官公署の被備人をもあはせて調査することに致しました。

かうして出來たモノグラフィが合せて五十四になりましたが、これを業態別に分けますと、機械、染織、化學、特種工業労働者はそれぞれ十二人、五人、九人であつて、労働団体関係者五人、官公署被備人十八人であり、そしてこれらの中現に労働団体に加入して居る組合員が二十人あります。

正  
大  
11.4.8  
寄贈

この調査を實施したについて申上げたいことが多々ありますが、兎に角仕事自身が至つて困難なる上に、今回は相當教養があり、充分の思慮のある人ばかりで前回に比し一層の困難を感じました。それで記述の方法をかへて見ましたが、直話を直截に認めんとすれば文字の洗練を缺ぐの嫌があり、筆者の頭で整理せんとすれば實情を傳へ難いといふやうな恐があつて、その孰れをどるべきかについても相當の考慮を拂ひましたが、遂に敢て前者によることにしました。従つて讀み苦しい點は幾重にも御容赦を乞ふ次第であります。

最後にかうしたモノグラフィを總括して結論様のものをつくつて見たいやうな氣もせぬでもありませんでしたが、徒に概念的のものをつくることをさげまして、専ら讀者の直觀に訴へることにして、さうした企はこれを中止したことを附言して置きます。

目次

- 其一 機械工業労働者
- 其二 染織工業労働者
- 其三 化學工業労働者
- 其四 特種工業労働者
- 其五 労働団体関係者
- 其六 官公署被傭人

其一	總論工業發展
其二	農業工業發展
其三	林業工業發展
其四	礦業工業發展
其五	機械工業發展
其六	電力工業發展

目次

其一 機械工業勞動者

（The text in this section is extremely faint and illegible due to the quality of the scan. It appears to be the beginning of a chapter or section discussing mechanical industry laborers.)

一番 伸銅所銅管部職工

三十五歳 家族四人

西野田の〇〇町と云へば北大阪の工場地で附近には鐵工、製革、鋼管製造等雜多な種類の工場がある。彼の家はこの町のある鐵工場前を左に折れた行き止りの路次で兩側が平家の廿軒長屋。路次は赤煉瓦で敷きつめられて居る。玄關も勝手も共に路次に向つて居り、大部分の家は玄關と勝手とが共通になつて居るので、随分汚い。右手の長屋が二、三軒で行き止まらうと云ふ處に軒燈はないが門札は立派に、入口の邊極めて感じよく整頓せられた彼の家がある。

玄關が二疊、奥が六疊と廊下、玄關の横に勝手と云ふ間取の東向きで、床下は割合に高く通氣もよい様である。土地は非常に濕氣が多いと云ふ事であるが健康に害のある程度のものではないらしい。實際此家に住んでから既に五年になるが家族中誰も病氣をした事も無く、一家四人共―主人と妻君と子供二人健康らしい面持ちをして居るに見ても別段に住居の不完全が健康を害する程度のものではないらしい、西の方には庭があつて夕風が自由に入つて來る。彼は伸銅所の銅管部に勤めて居る銅管を焼いては引き伸す其伸し方をしてゐるので夏の日は熱を扱ふ仕事は困難だと云つて不平を云ひ、同じ人間が高熱の處で働く時も然らざる場所で働く場合も賃銀



が全然違はないのは会社のやり方が合理的でない云ふて考へ込み、然し伸銅所全部の職工が團結する事は出来ませんと云ふて一服つけて又つゞける。伸銅所の賃銀は他に比較して大變割合がよく、賃銀問題では職工側から爭議を持ち出す何等の理由はない。先月職工側が警告書と稱するものを出した原因は何處にあつたかと云ふと、賃銀問題について動搖したのではなく全く團體交渉權を得んが爲めの動搖であつた。我々は賃銀其他報酬問題では別に無理を願ふ氣はない。只此團體交渉權の問題で、あるが故に我々と雖ども時に及んでは立つ事があるかも知れんから、一應警告して置くぞと云ふ文字通りの警告書に過ぎなかつた。

事實伸銅所の賃銀は云ひ分のある筈はなく、彼の賃銀について之を見るも常備の變化は最初四年前は五十二錢、次ぎが五十五錢、折々三、四錢宛あがつて今日では一圓三十八錢になつてゐる。實収入は最初から月平均六十圓を下つた事は無く現在では八十圓を下る事は稀れである。

これと云ふのは官の仕事が多いため期限がきれ、ば伸銅所が罰金を出さねばならぬから澤山に報酬を出して期日に遅れぬやうにせねばならぬ故でせうと彼は云ふ。

彼の故郷は滋賀縣東淺井郡〇〇村で農家である。母は十年前、父は昨年二月亡くなつてゐる。この父と云ふのが極めて無頓着な人で七人の兄弟中、學校に通はせたのは最後の女の兒のみで、それも尋常四年迄通はせた丈である。兄妹は勉強こそし

ないが悉く立派に成長し、男五人の中四人は皆兵隊に行つて夫々位を持って歸つて居る。五人目が今年検査を受けたが以前工場で膝關節を痛めた事があつたので不合格になつた。彼とても五尺六寸餘の大男で一人前以上の働きのある人である。學校に行つたことのある末の女の子が國でまだ嫁入りもせず家事の手傳をして居るが長兄は兵から歸つて來た儘何處へ行つたか未だに行衛不明になつてゐる。

彼は十六年前大阪に出て來た。其後數回會社を變り伸銅所に出る迄は難波の新田製革に居た。家族四人で、家賃は十圓四十錢である。

妻君は別に内職を持たない。内職の無い理由は是等の子供を抱えて少しも暇がない爲である。主人は白縞の裕衣を着て骨格が極めてよい。妻君は小柄で萬事つづましやかに出來てゐる。髪は束髪で前の處を少し分けてゐる。客と見て寢てゐた子供が蚊帳から一人出て來る。次ぎのが又出てお父さんの膝の横に大人しくして居る。

家中の様子が實に整然としてゐる。主人の工夫で出來た天井の棚には種々の品物が正しく置かれ、神棚も小さな箱ではあるが、主人の座席に對して立派に出來て居る。主人の家族に對する態度は、親切を極め、妻君も忠實に働くらしい。子女の教育に關する意見は高等迄は是非とも云ふ考へである。それと云ふのも彼が只の一年も學校に通つた事がないので世の中に出て不自由でならないため、學問の必要を痛感してゐるがためである。彼の座席に對した神棚に因んで一つの物語りがある。

それは昨年八月妻君が朝四時に起き髪を結ふて居ると箆筒の中で、パチパチと云ふ異様な音がして、煙が出て來るので不思議と思ふて箆筒を開けて見ると中が一杯の火になつて居た。主人も驚いて飛び起き、水をかけて消し止めたが、その爲め箆筒の中にあつた價額に見積れば三十圓程のものが皆焼失してしまつた。何故に火が出たかと云ふことについては、翌日お稻荷様にお願ひして聞いて見たら、その原因が分明した、此稻荷様は今も玉川町四丁目の處を少し行つた處に店を出して居られる。主人はそれ迄はこのお稻荷様は少しも知らなかつた。今でも其稻荷様を信じて居もせず、巫女の名も記憶して居ないが、小火の原因については「西洋マッチに乾燥綿ぞよ」と云ふお知らせであつた。何故に早く見附けたかについては「箆筒の上の天照皇大神が御自身焼けたくなかつたが爲めお前の妻に知らせたぞ」とあつた。宜なる哉、彼はそれ迄は單に棚の上にお祭りしてあつた大神なりしを、其後は立派な箱を新調してお遷して一層の熱心を以つて朝夕禮拜するのである。

是等の信仰上の問題については未だ充分なる研究が出来て居ない爲め之に對して科學的の批判を下す事は出來ない。唯彼が巫女の言葉が「西洋マッチに乾燥綿ぞよ」とあつたので歸宅後取調べて見ると、弟から預かつてゐた品物の中に西洋マッチがあり、妻君が前日炎天に綿を乾して其下の引出しに入れてあつた事が明瞭になつた。天照皇大神も亦其箆筒の眞上にお祭りしてあつたのを見ても、巫女の事象に對する

原因探究術が如何に理想的なるかと云ふ點については彼は勿論、予も亦深く感心する次第である。

昨年八月此奇異なる小火があつたのみで彼には最近二十年が程は云ふべき程の事件もなかつた。彼の顔面筋の働き方が頗るよく調和せられて居るし、それに調査者を敬遠した風も無く馬鹿にした態度も見せないで、話するには極めて樂であつた、彼は實に生れた儘の人である。氣分や身體に何等の造作をして居ない點が彼の美點である。粧身術として認む可きものは何もなく、清潔な着物を着て髪をシャンと刈り込んで居る。淡白でよく努力するのだから模範的人と云はねばならぬ。

思想家ではない。全然學校に行かなかつた爲め文字もよくは讀み得ないのであるから新思想も舊思想も持たない。世間一般のする事を見真似て、正しき分別により似合はしい家具を購入し、サツパリした着物を着て妻子をいたわり平和に世を渡る人である。現在の職業については充分に自信を持ち居るものゝ如く是非とも十年丈だけは伸銅所に働きたいと云ふて居り、其後は此地で商賣をする考へである。商賣を始めても確實な人物だからやりぬくものと見られる。

娛樂としては何も無く魚釣りのみは幼少の頃から好きで今も休日には必ず築港に釣りに出て行く。岸から試みて居るのみで船に乗つて沖に出る事が無いので何時も三十内外の沙魚を獲る位の處である。運動と云つて特別にした事は無い。相撲のみ



は絶対に嫌ひで見る事さへも堪へ得ない。其れは彼が九歳の年、八月廿五日には毎年村に大阪で云ふなら天神祭の様なお祭があるが其奉納相撲の土俵の上で二人重なつて落ち、下の者がウンと云つて氣絶したのを見た事がある。そのため現在でも相撲が嫌ひである件の男は一度息をふき反したものの、其夜死んだと傳へられ、彼の全神経は相撲と云ふと水の刃に觸れたらん様に縮みあがつてしまつたので其後は土俵さへ見る氣になれず、軍隊に居る時には二度も大相撲の見物につれて行かれたけれども義務故行くには行つたが土俵は見ずに絶えず横の方を見て居り、そして隙を見て隊に逃げ歸つた事であつた。全く感じ易い少年の頭に一度強く感じた事は此様にして彼を卅五歳の今日迄支配して居るのである。

煙草は好きで喫ふて居る、酒は一滴も飲まない。彼の説によると随分と苦心して飲酒の術を學んだけれど遂に飲む事が出來ずに終つた。皆はよくもあの様なものを飲むものだと云ふのである。國家、社會の組織なり政界財界、要路の人物なりについては何等の智識もなく社會の制度等については未だあまり考へて居ないらしい。勞働問題等に關する智識も皆無である。(七、三)

## 二番 伸銅所銅管部職工

三十六歳 家族四人

彼の家は伸銅所の裏に當る〇〇町の一丁目にある。〇〇町の通りは東西に走つて

ある。之に沿ふた極端に細い通りで長さも極めて短い。云はゞ地主が家を建て、人に貸す都合から長屋の前に路をつけた迄の路次であり、其入口はどある貸家の二階下を通らねばならぬ様に出來て居る。長屋は二階建であるから此種の平家長屋に比すれば數等上の部に屬する。家主が西野田切つての大家主でもあり、徳望もある人故貸家に對し充分に手入をして呉れる。狭い路次に建てられてはあるが全く靜かで氣持がよい。

玄關の土間を入つた右側は翠帳を下して臺所と仕切つてある。土地は乾燥して居るとは云へないがさなきだに干上らうとする今日此頃は此位が適當である。敷金は出して居ない。彼は此處に住んでから六年程になる。家は二階四疊に六疊、階下は六疊に三疊、至つて心掛のよい家主で家賃も一回値上げしたのみで現在は十一圓である。彼は四疊に六疊の二階を間貸して七圓宛取つて居る。それで結局六疊、三疊勝手の家に四圓の家賃で生活して居る結果になる。彼は頭のよい人と見える。伸銅所の解職手當十年勤績者には六百五十何日分の日給と云ふ事を別段考へる風も無く算出する。現在は第二交代と云ふ事になつて居るのであるが、第二交代は夜勤で、夜勤の手當は一割二分五厘であるから一圓の者は十二錢五厘の手當を貰ふ事になり二圓の者は二十五錢を得る事になる。第二交代は午後四時から十二時迄である、夜勤と云ふても樂なもので半夜勤と稱すべき筈のものに、斯くも澤山の手當を出して

居るについては伸銅所は今八八艦隊の材料を製造して居り、検査部等は此限でも無いが、製造の方になると納期もある事故、休まして置く事が出来ないものである。それに月々の仕上高も一つの部内で何噸と云ふ事になつて居り、其以上仕上た時には多分の奨励金を出す。此奨励金が多い爲めに伸銅所の職工は助かる。彼の常備賃銀は現在一圓三十八錢になつて居り、之に奨励金、夜勤手当等を加へて平均三圓二、三十錢にはなる。彼は勤めて四年にしかならぬが之れである。若しそれ伸銅所に十年を勤めて帽子を被り伍長等と云ふ様な役付職工になれば日に六圓を下る様な事は無く、解職される時は二年分から三年分の手當を得る事が出来るのであつて、早い話は〇〇と云ふ一軒の家の仕事をして居る様な事になつて居る。

近頃は亦団体交渉権を認め、親友會以外の他の横断組合に加入する事をも公認したので我々は何も不足を云ふ餘地はないと云ふ。意見は意見であるが事實上、彼は伸銅工新進會に入會して多少は〇〇の行り方を悪く云ふ事も研究しつゝあるので、何も御無理御尤と云ふ考へではない。但爭議が起きた場合は意見が違ふと云ふ理由で新進會を脱會し、罷業でもすると云ふ時は之に加盟しないと云ふ決心だけはして居る。彼のこの行り方は極めて時機に投じた行り方で兩股を掛けて居る譯である。現に〇〇伸銅三千三百の職工中三分の二は新進會伸銅工組合に入つて居るが半は彼と同じ兩股主義であるらしい。

彼は幼少の時は丹波から現在の家に貰はれて來た。若い時に一時京都に行つて酒と酔との小賣業を營んで居た事がある。それは要するに失敗に歸して其後船乗に代つた。商船會社臺灣航路の臺中丸に乗り込んで四、五年した、歸つては父の商賣である骨董商の手傳もして居た。結婚問題には波瀾の多い方で「之で三度も四度も結婚して居ります」と云ふ。傍の養母も「本當にね!」と和して笑ふ。

現在の妻君とは大正八年四月に結婚したもので既に今年二つになる女兒がある。前齒二三枚が生えた顔を笑はせたりべそかゝしたりし乍ら其邊を這ひ廻はつて居る。〇〇伸銅所に入つてから今年で七年になる。至つて勤勉な性質で熱心に勤めて居る。月収は百二、三十圓である事は叙上の通りである。幾回も結婚した中で此前の妻君は現在の人の妹さんに當る人であつたが、大正七年の春お産をして其翌日貧血で亡くなつた、子供のみが生き残つて十一月迄六箇月餘も生きて居たけれどつひに後を追つて死んだのであつた。大正六年には養父が亡くなつてゐる。病氣は腦病であつた、要するに彼の過去は波瀾の多い一向に落ちつきのない生活であつたのであるが、現在では報酬も多く、妻君が落ちついた虚榮心も至つて少ない人なので、熱心に働いて平和な生活をして居る次第である。

彼の性質は急がしい性質で、其青長い顔に善人らしい皺を表はしつゝ、急行列車の様に語り續けるので、相對して居る者は追ひ立てられる様な感じがする。「病氣で

すか」「そんな事はありません、父が亡くなつたについて四日。妻が亡くなつて四日子供が死んだので一日。伸銅所を休んだのはそれだけです。大体此様な調査をなさるとしても家風と云ふものがありました、主人の好みによつては酒等ばかり飲んで居るものが居たり、田舎から出て来て居りますと又田舎の親戚の者等澤山來まして其方で費用が要る様な事になります。幸此點につきましては私は大阪の者ですから一時に金が要る事はありません。これは本當の御参考に迄申すのですが」等と調査者が何を考へてゐるかど巧に推量をしそれからそれへと話し續けるのである。如才なさ過ぎる感じがある、然し人物は全く好い人物であつて人をそらすまいと思ふて餘計に云ふのみの事で、折から庭先の柱に止つた油蟬なんかの様に其程に騒々しいのではない。「讀み物、室内の遊戯等其様なものは何も駄目で碁や將棋が好きですのやモウ友達が來て居ます。將棋一番しやうと云ふてやつて來ました」と云ふ。其友達に向ひ「良さんこの額はどうです」と云ふて壁間一幅の繪を指した。

大きな山水畫の額であるが近景も遠景も細密に模寫せられ、谷川の流が深山から靜かに流れ出る處である。月並に墮するものであるが飛瀑も至つて謙遜に畫かれて居り、附近に見えて居る家々も支那流の大夏高樓ではなく日本風の茅屋それが僅に樹々の間から屋根を出して居るのであるから趣きの至つて高い景色である。用ひた繪具も色彩が強過ぎもせず、秋爛にして水落ち、紅葉錦の如く金風渡ると云ふ處で

ある、只惜しい事には古來山水の名畫は狭い畫面を非常に廣く見せてゐるものであるがこの繪は廣い畫面を狭く使つて居るのである。狭くせぬ迄も充分に廣く見せる事が出来なかつた様だ、其故未だ以つて名人の作となすことが出来ない「ごなたの作でせうか」ときけば雪溪の作と答へる。雪溪は大阪で第六番目の畫家である云ふ何番目と云ふ事は首肯出来ぬけれども何しろ勝れた人の作でなければならぬ。床の間に掲げた軸は、之も等しく雪溪氏の作で細長い紙に思ひきつて長い大きな褐色の瓢箪を現して居る。それに此大瓢箪を實際よりも長く見せる爲めに、更に其下に青瓢箪の馬鹿に小さいのを二つ三つ畫いたが爲め、件の瓢箪は天をも衝く許りに雄大に見えてゐる。

莊子の何篇かに見えた大瓢箪も、當に斯くの如きかと思はる底のもので、船大工を呼び之を割きて二箇の大船を作り、北海に浮べて貿易の爲めにするより他に何等の用途を發見する事が出来ないのである。父が骨董を愛して居たが爲めに「父の代から雪溪先生には御懇意に願つて居ります。是等も皆ただで畫いて貰ひました」とある。其他彼は書譜を示めす。書譜の中には積の石塊を踏んで船頭二人が曳船の綱を掛け河を上らうとして居る處がある。高山から見下した大樹の軀幹をすかして名も知れぬ小鳥が七つ八つ渡つてゆく有様を示めすものもある、繪葉書にした處が其他品物にした處が彼は其道の玄人だけに風格の高いものゝみを集めて居る。よく世間

には風流だと云ふて猪の首のついたものゝみを好いたり、狸の不得要領な面に無量の妙味がある等と脱線する人も居るのであるが、彼の骨董趣味は堂に入つたものであつて極めて圓滿である。等しく骨董好きと云ふても器具、書畫等の別はあるが彼は道具好きの部類である。

若い時に海にも山にも住んだ人だから海を見やう、山を見やうと云ふ様な慾望は全く無く、圓滿なる家庭と自分の好きな骨董を一つでも多く買ふ事、それに晩酌、其様な事が好きである。おめかし方も充分注意する方で立派な着物を澤山持つて居る人物として尊敬するのは立志談に現はれた安田善次郎氏等であるが人間の眞の價値と云ふ様な問題については未だ考へた事はないさうである。(八三)

### 三番 伸銅所汽罐部伍長

三十六歳 家族五人

〇〇岸の交番で彼の家を開けば彼の家が其交番所から數町も離れて居り、而して狭い路次を幾つも曲つた極めて分りにくい場所に在るにも拘はらず、件の巡查は飛び起きて午睡後の赤い眼を見張りつゝ、其人間の家ならば眞直に行つて右に入つて左に行つて三、四軒左に入り、其處に駄菓子屋がある故、其處を突き當つて云々と十分程もかゝつて彼の家の所在地を云つて呉れる。頭腦の明晰を缺く者には最初の二つ程の路次を聞いて、歩き出すより外に仕方が無い。之は彼が某會の會計主任で

あつて長く同會の幹事をして居り、先日迄藤永田の爭議で検事局に廻はされ、豫審の決定と共に一時保釋とあつて出て來た處であるから交番さん夢寐にも忘れ得ない人なのである。

三重縣渡會郡宇治山田市に生れた。四人兄弟の長男で他は三人とも妹さんである父は早く亡くなつて母のみが故郷に二人の妹と共に居る。學校は舊制の高等三年迄行つた。二十三才の年に大阪に來て關西鐵道株式會社に三年、日本製糖會社に四年而して現在の〇〇伸銅所に入つたのである。こゝに來てからは既に八年汽罐部伍長常備一圓九十八錢、實所得月百四十圓を下る事は無く推しも推されもしない位地にある人である。

彼の家は二階長屋の一部片側の平家であつて路次が狭い爲め不規則な感じもし、汚なくもある。其狭い處で屋臺で氷を賣つたり譯の分らぬ焼き菓子の類を焼いて子供を集めたりしてゐるのであるから、全く暑苦しい感じがする。刺を通じて暫くすると、某會の主任關西労働運動の死活の鍵を握つて居る處の彼が其處に現れて、其瘦せぎすな身體を正しく座し、折から鏡臺に向つて頻りとお化粧をして居たらしい九才位の少女を制し乍ら、何の用かと來意を尋ね、其儀なら入つて話せと云ふ。

二階二間に下三間である。疊敷は全部で十七疊、家賃は十八圓、敷金は五十圓入れてある。最初此家は敷金は無く家賃も僅か十二圓であつたのだが、家主が代つて

俄に敷金は五十圓となり、家賃は十八圓と云ふ事にしてしまつた。借家人十人が新家主の仕打ちを、怒つて誰も其命令に従ふ者は無かつた。即ち新家主は一策を案じ皆に立ち退きを迫つて、訴訟を起したのであつた。其理由とする處は今度此家を買つたについては、方々に散つてゐる親戚の者を此長屋に集める爲めに買つたのである。是非立ち退いて貰はねばならぬと云ふ事であつた。

型の様に裁判は家主側の勝利となり。借家人は三箇月の猶豫を貰つて立ち退く事となつた。三箇月間は以前契約の家賃で其家に住ふ事となつたが、三箇月後契約を新にし、新家主と新に家賃十八圓敷金五十圓と云ふ約束をした次第である。家主方の辯護士は非常な敏腕な男であつた。三箇月間の家賃の如きも、前渡しと云ふ事で十軒が十軒とも前家賃で出さしたにも拘らず、三箇月後には突然家賃滞納の差押だと執達吏を向はせ家財道具に全部紙を貼らせたのであつた。誰も滞納して居ないのみか、立派に前納の請取を取つて居たにも拘はらず此様にして二重の家賃を取らうとする辣腕家なのである、其處で借家人等は代表者を選び、家主に掛け合つて「お宅では二重に家賃をお取りになるのですか」ときいて見た處が其方は一切辯護士の方に依頼してありますからと云ふ事で少しも埒があかず、家財道具に手を觸れる事もならず、借家人等は十數日の間、毎日泣いて居たと云ふのである。斯くの如き家主が居り、斯の如き悪辣の辯護士が活躍する今の世の中は不合理であると云ふのが

彼の意見である。而してより以上に合理的の法律を作り、社會制度を改める爲めには其最も近道として工場委員會制度を認めて貰ひ、労働者の衣食住を安定して貰ふ必要がある。其の事に依つて當然労働者の社會的地位も出来るからその上に普通選挙を實施して労働黨を組織し如何様な法律でも通過せしめ、住宅法案でも借家法案でも労働者に都合よく立案して議會に提出するといふ所存なのである。故に彼の思想は明かに賀川豊彦氏の嫡流である事が分かる。反對派の間は、『労働黨等を組織した處で議會政策で社會を切り盛りしやうと云ふのは間違ひである。獨逸でも英國でも社會黨の労働黨のと云ふ連中は大のブルジョアである。之れは最初からブルジョアなのではないが代議士だの、政黨だの内閣組織だのと云ふ間に、労働者が知らず／＼ブルジョアになるので、制度其物に缺陷があるのであつて。流血の慘を以つてしても議會なり、代議士なりを吹き飛ばして秋の木の葉の其れの如くにやつ／＼けてしまへ』と云ふのであるが彼の眞面目な性質は到底これに賛成する事は出来ない彼は猛烈な賀川豊彦氏の崇拜者である賀川氏の情け深いこと、物質的にも精神的にも人に頼まれて嫌と云ふ事の出来ない性質の人である事を長々と話す。

身體は非常に健康で病氣といふ病氣はした事がない。音樂が好きで公會堂邊でそれと聞けば何時でも馳せ參じるが只何となくよいといふのみの事であつて音樂等は更に分からない。美術は好まない。其他之れと云ふ趣味も娛樂もない。〇〇にコン

バス會といふのがあつて休日等を利用して盛んに歩く。會員は五十人であるが實際連れ立つてゆくのは會社の方からの制限もあり其三分の一位であるが此の間は天神祭の時一週間の豫定で、富士登山をした。「江の島鎌倉箱根八里等素敵ですわ」と云つて追想に耽ける。關西の者が關東に行けば物珍らしく感じるもので關東の者が上方を見物すれば又大いに感じるのである。旅費は一週間で六十圓であつたさうな彼の家族は夫婦に女の子三人、其れから三重から來てゐる妹、此人は今〇〇新聞社に事務員をして居る。主人が廿五才妻君が廿才の時に結婚して翌年女の子をあげ現在は尋常二年生で先刻鏡臺に向つておつくりをして居たのがそれである。二番目はまだ赤坊である。此十年が程は主人が同志と共に〇〇支部を創設して今日に至る迄多少の家庭を襲ふ不安が無いでも無かつたが、今度と云ふ今度は白と出るか黒と出るか判決の如何によつては戸籍面に朱を點する事となり、〇〇は只で追ひ拂はれる事となるのである。そのことを尋ねて見れば、藤永田が罷業の最中、會社側が絶対に要求を拒絶して前途絶望とあつた時に友愛會本部では印刷革新同志會に頼んで「資本家は横暴頑迷到底尋常手段では駄目である。諸君は此際一齊に立つて大坂全部の藤永田に對する同情總同盟罷業をなす可きである。傳家の寶刀抜くは今ぞ」と云ふ宣傳ビラ一萬枚を造り幹部連が全市の各工場の門に立つて仕事が出来て職工達が出て來た處に之を配布したのである。彼は其日藤永田の門前に立つて件のビラ

を撒いたのである。此事は一見矛盾と見える。何故ならば藤永田は大多數既に罷業の擧に出て居るのであるから。然し殘部の者に之れを渡したについては藤永田の徹底的罷業を煽動し併せて我々は斯の如き宣傳ビラを全市に配布したぞと云ふ事を知らしむる爲めに有効な譯である。二三日して友愛會の幹部は悉く檢舉せられた。彼のみはあまりに眞面目な人物故檢舉が遅れ、幹部連が「一切何處で印刷せられたか知り申さぬ」と云ふ様な事であつたが彼は會計故印刷には印刷費が必要だらう君が知らない事はないと云つて引き出されたので連座したとでも云ふべき態である。警察の方にしては其様な全市總同盟罷業煽動の事は既に大電の時も例のあつた事で其時は何とも云はずに置き乍ら今度のみ檢舉するといふ事は妙な事であるが抛つて置けば何をするか分からず、且つ友愛會の頭株を繋いで置いて爭議に應援出來ぬ様にし手も足も出ない様にする考へであつたのらしい。之れは自分の勝手な推論であるが兎に角其様にして、彼は警察に八日間豫審に卅二日居て七月十日に保釋で僅かに歸るを許るされたのであつた。罪におちれば〇〇から解雇手當てが貰へない故今の中に貰つて止める工夫をして居る。手當は一年分と五十日貰へる事になる。月、百五十圓宛と見て實に二千五百圓程の手當てが得られる譯である。彼の趣味について述べた際彼が俳句に興味を持つて居る事を忘れたのであるが同好の士が相集つて句會を組織し其れを東京の斯道の先生に見て貰つて居る。先生は主觀的色彩の強い句

を作る人で夢路と云ふ。竹久夢二とは別人である。彼の最近の作二句。一句は「夕立や微かに燦めく電光」うたゝねの夢破れけり蟬の聲」未だ以つて概念を樂しむと云ふ程度を脱出して居ない。不確實な作ではあるが後者は稍確かな處があり人に迫る力をも持つて居る。

彼は天理教信者である。天理教は中山みき女の創めた教で其神樂歌等、教訓の中には深遠な意味を含んで居るらしく彼の社會改革を思ひ立つた動機も根本は此の天理教の思想から來てゐるのである。天理教は衣食住を簡易にし富の平均を主眼として持てる一切を教會の方に納め衣食住の保障を受けて無一物で働く職業は神聖なるものとして病を推して倒るゝ迄働く主義なのであつて物質的には平等にゆき精神的には各自の絶對自由境を開拓し出さんとする處に天理教の面目が存在する。彼の思想は先、貪婪極みな資本家を征伐して、財産を自分等と平均すると云ふ考へである。然し天理教も近頃は本山の方の富が下の方の者の富よりも餘計になつて來る様子であり之れは誠に棄て置けぬと彼自ら時々天理教の本山に行き幹部の人に面會して叱咤するのである。「でも」と云つて力無げに「如何なる社會でも同じ事です」と結ぶ。

將來の方針と云つて前述の如き事情故未だ何とも定つて居ない。酒も煙草ものもない。(八、八)

#### 四番 紐 製 造

三十三歳 家族六人

〇〇町〇丁目の路次を迷ひ迷つてとある赤煉瓦の行き止り道。兩側は低い二階屋物干の竿が、一列軒にズラリと並んで、一切の干物が炎天に飜り、暑さに堪へかねた裸形の人物が男となく女となく右往左往して居るところの或軒端に、彼の悪い風評を氣にし乍ら立つたのである。

折から妻君はカーキ色のメリヤスを地縫する爲め肉つきの上半身を裸出して奮闘をして居るところで傍に二つ程の赤坊が僅かに立ち得て壁に倚り何ぞとおいたを計畫中なのであつた。二階に上る段梯子は黒く細く殆んど垂直に立てられ、其上方では一種の小機械を動かす騒音が絶えず響いてゐた。其處の玄關に腰掛けて更に彼の家を觀察すれば六十越した程の男と二十内外の男の人が奥の座敷に此の熱鬧を他所にして晝睡して居る、暫くゆつくりしてさて口を開いて刺を通す。「お父さんお客様」と九つ程の女の子が聲張り擧げて二階に向つて呼んだ。騒音がハタと止んでメリヤスのシャツにズボンそれに理解に苦しんだのであるが切れて半分程になつてゐる、靴下をはいた主人が髪は美しく角刈りにし鼻下にチャップリン式的美髯を蓄へ玉なす額の汗を手の甲で拭ひつゝ、其小さな二階の穴から現はれ來たのであつた。一尺足らずの椽に薦めらるゝ儘座布団を敷いてこれから貴重なる彼並びに妻

君の労働時間を盗んで四方山の話を始めやうと云ふ段取りである。

彼の故郷は若狭の國、遠敷郡松永村である、父は七十で奥の六疊に寝そべつて居るのがそれで母は亡くなつた。兄弟は二人で其處に寝てゐるもう一人が彼の弟である。故郷に於ける父の職業は農業であつた、彼は郷里で高等二年を卒業すると一時舞鶴にも居たが直き大阪に来て労働界に身を投じた、市電の車掌を二年程して、伸銅所に入つたのであつた、其處に十年苦心の結果、帽子を被る伍長と云ふ立派な地位に迄なつたものを惜しいことにはやめてしまつた。要するに彼の意志薄弱が仇をなしたものである。住友を止めてから平紐の製造をして居る其機械は糸が集つて、糊の壺を通り乾燥せられる仕掛になつて居る。まだ大阪に四箇所丈けしか作つて居ないと云ふ説である。彼の家の生産能力は父と弟に手傳つて貰つて一日平均三百ヤールのものを二十把丈け造ることが出来るのである、其れに妻君のメリヤス地縫からの収入其他で月収八十五圓程である、製品を問屋に持つてゆくので安く買はれる爲め割に合はないといふ話。

家族数は既に述べた通り彼等夫婦に子供二人其れに父と弟とで六人の家族である彼が戸主としての家族に對する態度は簡單で快活で笑つても怒つても悉く妻君の氣に入り父からも別に悪く思はれもしない風である、又多少の物知りであつて自分の智識に對して自信のある處から近所隣りの誰れ彼れが皆彼の家に來て物を聞く「○

さん此手紙を読んで見て下さい」と云つて入つて來た一人の老女がある。「此の手紙は先達の由五郎さんから來た手紙で其後は半さんの病氣は幾分よい様だが匂ひが悪いと云ふて何も食べ物はあまり食べない云々」と書いてあると讀んで聞かせ其女が朝鮮人蔘を送つて吞ませて見やうか先年甥が朝鮮からの歸りに持つて來て呉れた品で「赤いのと白いのとあり白いのが滋養があるといふ話したす」と云ふと「其様なものなら滋養になるといふ事が知れ渡つて居る事故醫者に相談せず削つて吞ませて差し問へはありません」等と答へる「其れに玄米重湯にソツツを交せてやつてもよいだらうね。」と聞けば其儀に就ては彼は或本で讀んだ事であるがソツツにオモユを交せれば大變匂ひが悪くなると云ふ事が書いてあつたから反つてソツツならソツツ、オモユならオモユ丈け別にして飲ませた方が病人の爲めによからうと云つて居るが其れで本人も相手も疑はないのである。彼の物識りの程度は先づ其邊の處であらう。又彼は投書が好きで婦人雜誌等に盛んに投書をして居ると云ふ事である。如何様な文章を書くのであらうと思ふて根掘り葉掘り聞いて見るけれども手掛が得られ無い。現代、解放、婦人俱樂部、婦女界、友愛會の労働者新聞にも書くといふ何を書くのか解せぬ事である。小説風の事を書くものかも知れない。子供の教育は是非女學校迄やりたいと云ふて居る。休暇の利用は郊外の散歩である最近の主なる一家の出來事としては父の脚氣がある許りだと云ふ。



新聞は朝日をとつてゐる、音楽は端唄が好きで三味線を弾く美術も好きであるが自分では出来ない。其外將棋位なものである。宗教が黒住教であるのは、珍らしい此宗教は伊勢大神宮を参拜する宗教であつて黒住忠宗と云ふ備前岡山の人が始めた宗教である。忠宗の傳記を書くのだと云ふて、何かノートに書いたものを持ち出した。其教訓中に『誠にあり乍ら誠にはづれるな』と云ふ文句がある。之れを解釋して黒住教は誠の宗教である。此宗教に入り乍ら誠でないなら神罰恐る可しと云ふ意味だと云ふ。處が其説明は明かに間違ひで人は本來誠の道の真中に居るのであるが其處に居り乍ら強いて、横の方を歩き道に外れし輩は氣の毒の至りである。外れぬ様眞中を歩めと云ふ意味なので吾等は本來誠の道に居る故、細工し、造り固めて情操氣分を傷ふなど云ふ事なのである。斯くの如くにして彼の宗教は未だ本當に手に入つて居ない。其外黒住教の教理により、種々の社會問題を解釋するのだと云ふて方んで居るのであるけれども信が置けない。一時新進會に入つてゐた事がある、彼の黒住教を根本とした諸種の社會改造案を書いて郵送して貰ふ事を約して辭した。實に彼の辯舌は明瞭であり彼が某會の幹事長をして居た頃の土佐堀青年會館に於ける獅子吼の如き大いに傾聴に値すべきものがあつた。又谷本代表が國際労働會議に臨む時彼を送る爲め某會からの代表者として満場一致で選舉せられた事もあり無邪氣で性急で多少筆も立つ面白い人物である。けれども朴訥な點が無いため頼より

ならず、其れに彼については美しい婦人を見ると水癩癩が水を見た時の様になるらしいと云ふ悪い評判をする人もあるのである。(八、九)

### 五番 伸銅所銅管部職工

二十九歳 家族四人

和歌山縣日高郡〇〇村が彼の故郷である、父は五十九歳で十八歳の時に父母に伴はれて大阪に來た。最初は池田で父が關係してゐる砂山を潰す仕事の手傳をしてゐた。砂は米を搗く時に入れるものに精製せられるものであつた。一年程して今の伸銅所に入つたのであるから履歴は極めて單純である。今年で九年になる今は銅管部の伍長で常備一圓九十四錢月收百二十圓餘になる。

學歷は高等二年半途退學でそれから父と共に大阪に出て來たのである。母は亡くなつて今は池田の家には父のみが老後の樂しみに鶏と目白とを飼つて暮して居る。玄關は堂々たるもので家の間取りは二階六疊二間、下二疊二間に四疊半と云間取で南向きである。敷金としては十圓丈け入れてある。家賃は借りた時は八圓であつたが一昨年一時に十五圓に値上せられた。家族は夫婦に子供二人である。上が五つの子、下が四つの男である。外に今年二月生れて三日した女兒が亡くなつてゐる。其他同居人として稗島の發電所に通つて居る人を泊めて居る、其人は白縞の裕衣を

着た大きなそして髯を生やした人であつた。妻君は別に内職等はして居ない。大きな人で上手のない方だが整頓等は手に入つたもので勞働等をしてゐる人の家だとは思へない程に立派である。

彼の勤務時間は七時から四時迄である、八時間勞働に一時間の餘裕を見て居る。今やつと仕事はねて家に歸り勞を慰する爲め少し休んだ處なので彼は少し不機嫌で返事をするのに一分程置いてする。然かも出来るだけ簡単な言葉です。顔は一層無愛想であるから、知らぬ者には何か怒つて居るのではないかと思はれる。四つになる男の子は晝寢して居るこの事で、五つになる姉さんの方が手に小さな硝子のコップに水を入れたのを持つて來て敷居に並べ他に眞紅な瀬戸物の金魚を同じ敷居の上に置いて尾を推したりなどして遊んでゐるのである。妻君が其向ふに腰かけて主人との問答を一言も聞き落すまいと黙つて眼を見張り乍ら時々は遊んでゐる女の子を制し乍ら聞いて居り主人も時に妻君に相談をして明確な處を云つて呉れる。其處に二階から同居して居る變電所の人が恐ろしい沈黙を守つて殆んど音も立てずに降りて來て臺所の方にゆき腐らぬ爲天井に釣つてある飯をそつと兩手で降して靜かに膳に向ふのであつた。主人の注意でソーダ水がぬかれ餘りが美ちやんの件の玩具の盃にも注がれる彼の家は先づ其様な趣きである。

彼は趣味も娛樂も何も無い〇〇に圓助會と云ふのが有るが之れは汽車賃を往復一

圓以内に見積つて旅行すると云ふ會である。此の會に入會して近畿地方を旅行する事が彼の唯一の楽しみで最近宇治に遊び平等院から黄檗山と歩いて歸つた事があつた。家族的事項とても何も取り立て、記載すべき事はなく二十四歳の時に結婚して今日に至る迄別に何等の大きな事件は無かつた。前述の如く、今年一月赤坊の死んだ事、それは妻君が脚氣の氣があるのに其乳を吞ませた爲めであつたがそれのみである。

讀物としては朝日新聞を讀んでゐるばかりで雑誌は何もどつて居ない。浄土宗を信じて居る。酒も煙草も好きで酒は毎晩一合と定めて居る。最初友愛會に居たが今は新進會に加入して居る。(八一三)

## 六 番 伸銅所銅管部職工

二十九歳 家族四人

彼の家は四貫島も場末の柱の細い家々が雜然として右に向いたり左に向いたりして居り道路の如き或は廣く或は狭く千變萬化である。而して軒の低い事と汚い事のみは皆一致して居る處の長屋町のごある十字路に建つて居る。故郷は香川縣木田郡〇〇村で其處の農家の十人兄妹の四男に生れて十五の時に今の家に子が無いので貰はれて來たもので高等卒業後三年程奉公して今の伸銅所に働くことゝなつた。明治

四十四年から既に十一年、今では伍長といふ資格である。伍長の上は組長職長である。伍長は二十人に一人と云ふ割合で組長になれば既に何百人に一人と云ふ割合となる。常備は二圓であるが月収百二十圓を下る事はない。

家族数は四人。養父と妻子である。子供は、今年四つになる男の子で非常に丈夫で病氣等した事はない。二階五疊半、下が三疊二間である。床下は低くないけれども土地は濕つて不健康地らしい。妻君が病氣(肋膜炎)でもう一月も寝て居るのであるが其れも土地が不健康地である事から來て居るのではないかとも思はれる。此の家が建てられてからは既に二十年になる。借り受けたのは既に十餘年前であつたから敷金は少しも出して居ない。家賃は六圓であつたものが現在の九圓五十錢迄せり騰げられたものである。

玄關の三疊で夕の食膳に向つて居た彼は「さあ」と「何もかも取り散らして居る處です」と其邊を整頓しさて椽に腰かけた、傍に座を占め團扇を使つての話である。「休日利用としては登山するのみです。以前一人の時に何處へでも行つたのでしたけれども近頃は子供が居ますので其れを肩にのせて歩きます此前の日曜日には香植園にゆきました其又前には濱寺公園にゆきましたがいづれも結構です」と云ふ様な挨拶である。されど彼はコンパス會や圓助會のやうな旅行會には入つて居ない皆一人でゆく。奥の三疊に妻君が肋膜炎で寝て居る。病状は如何と聞けば別に痛みはしない

様子であるが其邊一鉢に苦しいこの事未だ水をさる位に迄病勢が進んで居る譯ではない。水打つた小庭の椽に敷物を敷いてそつと床を出て、足を投げ出した彼女の後姿は本當に憐れである。其處に臺所の格子戸を開けて玄關の土間に駆け込んで來た一箇の怪物がある。其れは眞裸體の今年四歳になる浩二君であつた。見れば手も足も一面の泥で其手でいきなりお父さんに戦争を挑んだもので遂にお父さんに腕を握られ再び勝手の方に連れてゆかれる。二階に通ふ梯子段の正面には柱があり、横の方から昇降するのであるが其處を七十五歳の彼の養父さんが、裸體の越中褌で昇り降りするのであつた。

彼は正しく座して慰懃を極め言葉少なく要領を得た返事をする。顔は健康に輝き言々千金の重みがあつて誠に頼もしい。「新聞は朝日新聞を讀んでゐます一時大正日日をとつてゐました。大正日日は大阪時事等に比すれば遙かに立派な新聞だと思ひます。靈の問題を研究して居ますから。」と云ふ。然し乍ら彼は靈に對する明確なる觀念を持つては居ない。其證據には靈の意義を問ふたけれども如何なる方面から之れを定義する事が出来なかつたのである。其處で大正日日賞揚説は一頓挫を來し話頭を勞働問題に轉すれば怪我して今は城の崎温泉に靜養して居る成瀬某とは吻頸の交りを結んで居ると云ふ。成瀬氏が怪我した事に就きては未だ何等耳にしなかつたところから神戸の爭議に於て警官の爲めに斬られたものと合點し斬られた當時の

模様を話せと聞けば誰にも斬られたのではないと云ふ。其れは先日伸銅所で電氣の故障を外線の故障と鑑定し屋根に上つて活動して居たのであるが其時屋上から光線を導く爲めに設けて居る廻轉窓の一端を踏んだが爲め氏は室内に墜落し二階の床で脊中を打つたとの事である。脊中には別段の負傷もなかつたが胸先が一面に紫色になつたのであつた。其處で仕事が出来ない爲め伸銅所から金を貰ふて城の崎温泉に静養して居るのである。後で件の故障は外線の故障でなく全く内線の故障であつた事が明かになつた。彼は新進會では一年丈け幹事をして居たけれども幹事と云ふ役は金ばかりかゝる役目で猜い事をしなければ立つて行かないから再選せられる處を一生懸命で逃げたと云ふ。して見れば勞働問題等にはあまり熱心な方でないらしい其外種々な問題につき彼と共に論じたのであつたが如何にも頼もしい感じのする人で以て六尺の孤を托すべき底の人と感ぜられた。家庭の讀み物としては主人は雄辯妻君は家庭雜誌を讀んでゐる。宗教は眞宗、將來とも伸銅所に居る考へである。煙草も酒も飲まない味噌汁が好きだ。其他新進會の普通會員たるのみで賀川氏と云つた處で直接話す機會が少ないのであまり尊敬して居ない。(八、二四)

## 七 番 伸銅所管棒部伍長

四十歳 家族三人

管棒の中の盤金部伍長である。西九條下の町邊は附近の大工場で立つて居るので地方を相手にした問屋卸屋のある譯でもなく官廳商館等に通ふ人々の住宅があるでもない。表通りは酒屋雜貨店、バー、カフェー、氷屋、饅頭屋等が赤青黄等安ばい色紙や裝飾紐等で出來得る限り陽氣に飾り立て蓄音機大正琴羅賣等で、夜となく晝となく賑やかに囃し立て、居り、裏通りでは各會社に通ふ職工達下駄の齒入れ、仲仕、手傳、巡查、小學校の先生等と云ふ人達が道幅の狭い長屋に住まつて種々なる手細工を内職にしたり等して一様に煙を立て、居るのである。其處に忽然として大會社の塀があり煉瓦の建物があり數百尺の煙突が林立して或は安治川發電所となり或は住友伸銅所となり中央製綿、大電安治川製作所等、皆之れである。斯くの如くにして彼の家は裏通りの比較的靜かな路次に面して居るのである。

故郷は大分縣國東郡〇〇町である。同地方の産物と云ふては琉球表に魚位のもので決して豊かな地方ではない。父は大正七年八月亡くなつたが母は今年六十六歳丈夫で働いてゐる。この母は仲々昔風の人で女は國の境を越えないものだ云ふ信念で少し財産もある處から何と云つても大阪に出て來ず一人でやつて居るのである。

明治三十九年彼が二十四歳になつた年志を立て、大阪に出で友人を頼つて永進舎と云ふ馬糞會社に入つたのが最初で其處に二年。西成製紙に四年。其れから四貫島の脇屋と云ふ鐵工所にも居た事がある。伸銅所に入つたのは明治四十四年二月十五

日既に十箇年數箇月になる。賃銀は常備一圓九十錢月収は百二十圓と云ふ事である。恰度妻君が實家へ遊びに行かれたとか云つて家の内はいくら叩いても静かなものである。午後三時を酷暑の陽が照つて居る。「物干しに登つて居られるのだから太郎ちやんは彼の家のお前内の物干しに登つてお隣の物干しを見て御覽。」其處で隣家の太郎母さんは物干し臺にも居ない。「おかしいね裏の戸が開いて居るのだけれども」といふ様な事で妻君が實家に遊びに行つて居られる事と推定せられたのであつた。其處から半町程行つた處にある彼の女の生家を訪ね刺を通じ彼の妻君が來て居られるかと尋ねたのであつた。其家は銅器等を作る家で狭い店で妻君の弟と覺しき人が金槌をさつて今や銅のバケツを仕上げる爲めに熱心になつて居た。やがて其處へ四十近い確實さと艶めかしさを持つた丸鬘に結つた彼の妻君が出て來たのである。抱いて居る女の兒も今年三つになると云ふが大きいよい子である。彼の妻君は少々氣味の悪い位に確かりして居る。「主人は只今留守でございます。すると昨年書きました家計の棊を亦書きますのですか。いづれ四時になれば歸りますから。」と云ふ調子である。

主人は實に堂々たる體格の人で家族は夫婦に子供二人、共に養女で上のは故郷の親戚から貰ふたので今年十七歳江戸堀の實踐女學校四年生である。次ぎのは妻君と

の間に子のない處から妻君の妹さんの子を連れて來て居るもので、今年三つになる。初めて見る來訪者の顔をつくづくと眺め何が氣に入つたものか頻りに喜んでゐる。もう自由に歩き得るので知らぬ間に後に廻つて自分につがれたサイダーを飲まうとしたりして極めて愛嬌がある。

主人の體格の見事なことは肩から胴にかけて如何にも肉附きの立派な點にある。腕脛、等は比較的細いが實に立派な體格でありながら幼少の頃から運動が嫌ひで相撲等には少しも興味を持つて居ない。暇さへあれば晝寝をすると云ふ主義である。それで眼が醒めれば「活動にでも行つて來るかな」と出て行く位の事である。新聞は大阪毎日で既に十年も續けて取つて居る。別に他の新聞に比較して長所があると思ふが爲めではなく單なる惰性によるものとの説明である。他に卅圓の寫真機を購つて寫眞をやる考へで着手して見たのであるが成功せず其儘に投げ置かれて居る。

家は下三疊、二間、四疊半一間、二階が四疊半二間で二階は人に貸してある西向きで東が裏になつて居り其れも裏の家に閉ぢ込められて光線が僅かに入つて來るのみである。首の廻る煽風器を置いて空気を掻き廻はして居るからよいが其れで無ければ此邊一帯が埋立地でもあり全く不健康の家と云はねばならぬ。敷金は十圓入れであるのみ。家賃は十三圓十年前に借りた當時から二回も値上げをして居る。最初は八圓であつたものを十三圓にしたのであるから家屋の修繕等は當然して貰ふ權利

を持つて居るのに家主は悪い人で十年此の方一度も修繕して居ない。何時でも雨が降れば甚だしい雨漏で困る。かの明快なる妻君が家賃を持つてゆく都度是非修繕を責めたてるが尙平然として十年を経過したと云ふ家主であるから剛腹の程が推量せられる。之れについては彼は『今度の借家法には家主は貸家が破損して住居に適しない様な場合には是非修繕する義務があると書いてありますよつてな』と幾分決する處がある様に見えたが彼の様に利害の分別のみ發達して真から怒らぬ人物が借家人である間は悪家主は枕を高くして睡る可きである。

新進會の安藤氏は吃者であつて人と對して語る時は明瞭に物を云ひ得た事がないのに演説の方は人並以上に上手だと云ふ事、新進會は未だ勢力が無くて役付の職工には正式に入會して居る者は少ない。然るに職工同志は仲が悪くて伍長等は職長組長等を少しも尊敬して居ないのに平職工であつた安藤氏等には比較的に尊敬の念を持つて居たなど話して居た。伸銅職工が伍長になれば組長になれば職長になりたいたいと思つてお互ひの悪口をし合ふ事は種々な方面から見ると興味のある問題である。而して悪口を云ふのも其人格等につきとやかく云ふのでなく單に仕事が出来ない出来ないと云ふ方面からのみ觀察して云つて居るのであるが之れも職工以外の勞働者と比較して見れば趣きを異にする點で外の勞働者では義理人情が分つてゐる居ないと云ふ事を主眼とし能率は第二義として人を立てもし排斥もするものである。

煙草は好き酒は飲んでも飲まんでもよい方で居睡りが一等の好物とある。いづれは故郷に歸るものと思ふて居るのであるが此事については妻君非常に不服である。主人が其意志を自分に向つて發表した其時妻君は大層不機嫌で俄かに氣色ばんでやがて不穩な獨り言言ひ乍らかの三つになる妹の預り兒を連れて戸外に出て行つたのであつた。(八、一七)

## 八 番 伸銅所原動部職工

二十九歳 家族五人

大野町の通りは渾沌たる西野田の南部を東西に走つて可なり賑やかな道路の一つである。〇〇伸銅所の裏門は此通の南側に開く。彼の家は伸銅所の〇門を南に入つて三軒目の家だと云ふ事だったのであるが何人と雖も此門を南に入つて彼の家を見出す事は出来ない。何故なれば此門を南に入る事は伸銅所の内に入る結果となるを以つてある。此處に理外の理なるものゝ存在するに非ざれば彼の家を發見する事が出来ない。何ぞ計らん赤煉瓦の堂々たる扉に沿つて之れと二尺程を隔て下水の溝には橋板を敷いて其處に一の間道があり此狭き入口より入る者は其の奥に無數の長屋が未來派の設計に成つた建築物の如く三角形、六角形等屋根の形もとり／＼に建てられて居るのである。彼の家は伸銅所の門を入ると此間道を挟んでシンメトリー

にある。夏の夕方外出するには洋傘を携へる必要がある。今日も亦降る。此日は伸銅所に工場委員制度の適用せらるための職工側の委員選挙日で新らしき試み故都下の各新聞を賑はして居り予も亦其れを氣にし乍ら電燈の明るい本通夜店の並ぶ路次等を墨を流したらん様の空を恐れつゝも彷徨した事である。夜店は西瓜の切賣り蜂蜜、玩具、少年もの、氷菓子、古雜誌類等で別に變つた品もない。活動本を賣つて居た中年の男は出雲節の唄手で流れゆく衆は自づと其の前に集まる。一時間程して再び彼の家を訪ねた時に彼は用達しに行つた先きから歸つて来て居り戸を開け放ち正しく座を占めて予を迎へたのである。

先年家計の榮を書いた時に居た梅田停車場裏大深町の家は現在の家よりは立派で廣さも父の此家よりは廣かつたのであるけれども遠いので毎日朝早く通ふのが困難である爲め五日程前に父の此家に歸つて来た次第である。此家は二階六疊二間、下六疊玄關勝手の間取りで六年前に借りたもの故敷金は無し家賃は十圓四十錢である家族は父母に弟二人其れに彼等夫婦で六人と云ふ勘定になる父母は別に仕事をして居ない大きな方の弟が今年十九、同じ伸銅所の原動部に働いて居る。次ぎは尋常六年生である。玄關の横に白筋の入つた制帽と赤い房のついた喇叭とを見た事である。父は東本願寺の方でお寺に參る事を楽しみとして居る。神棚には天照皇大神宮を祭り、今も二階で拍手を打ちて禮拜しさて「年寄りはお寺に參らねば」等と獨語し

つゝも二階の楮子を踏んで降り帽子を持つて出掛けて行くのである。

彼は身長五尺六寸堂々たる偉丈夫で髪は角刈り。「何人かと思ひましたハ、役所の方で……此の浴衣は其時の禮ごか云つて戴いたものです、全く驚きました、市役所から何もお禮を頂戴出来る理由が無かつたのでして」と云ふ其正しく座して人を正視する態度は頗る立派で資本家と雖も斯くはあり得ないであらう。故郷は愛媛縣新居郡〇〇村である。五人兄弟の長男で上と下が女、中が二人男である。現在では家の事總てを一人で遣つて居る。學校は高等卒業十七才の年に父に連れられて大阪に來り一年は立賣堀で酒屋に奉公し、次に大阪電燈會社の職工となり、箕面電車の入夫となり等して電氣に關する智識を養ひ其道の修養をも怠らなかつた。三年程箕面電車の技師であつた人の後を追つて但馬河内等を経巡り電氣に關する種々なる經驗を得而して伸銅所に入つたのである。時に大正四年十月、今年で恰度六年になる。日給は一圓九十五錢月收は百二十圓程で未だ役つきではない。

身体は非常に健康で嘗つて病氣をした事がない。新聞は大阪毎日を讀んでゐる、雜誌は電氣に關する専門的のものを讀むに止まり何もとつては居ない。唯新進會に入會して居る關係から友愛會の勞働者新聞を郵送して來る。音樂は一時ヴァイオリンを習つた事があるけれど年をとつてはヴァイオリン處の騒ぎではない。他に修養上の講話等を聞く事を樂しみにして居る位の事である。宗教に就いては前述の如く

神佛合せ拜するもので彼は「一切拜みます」と云ふて笑つて居るが其磊落なる且つ多少の謙遜味の籠つた笑は無限の含蓄を持つものゝ如く人をして神佛の關係等を追求する野暮な勇氣を消失せしめるのであつた。碁將棋等も行き道のみは心得て居る煙草は好きだが酒は一滴も飲まない。

彼は總てを感謝し自己のみ悪しきものとして鞭うつと云つて居る。で新進會等も修養方面を疎かにして他人を短所以外に見る事が出来ない惡癖を醸成する恐があるから近日中に脱會する豫定だ。さはあれ今日の○○に於ける日本最初の工場委員選舉につき所感を求めれば却々盛んで新進會側から十名は選舉する豫定なそう御用黨も仲々優勢とある。夜勤もある事とて今晚深夜の投票を終へ明二十四日開票の筈である。斯くの如くにして彼は稀に見る立派な人物である。件の○○伸銅所に於ける工場委員選舉の結果は十七名中十三名迄が新進會々員により占められ彼等の所謂御用黨委員は僅かに四名と云ふ結果を見た。(八、二三)

## 九 番

### 伸銅所銅管部職工

三十歳 家族二人

安治川發電所の煙突が煤を吐く癡猛さに恐れをなしつゝとある氷屋の角を曲つて

其處に彼の止宿して居る太田氏の表札を見出し得たのであるが、家は全く官吏會社員と云ふ種類の人が住む様な作りで格子戸を開けて内庭に入つてからも此家に伸銅所に通つて居る人の居るとは思へなかつたのである。其處に出て來た五十近くに見える肥つた婦人につき彼の平常を尋ねれば「○○が上之町から引越して來たのは昨年の八月です。向ふに居る筈でしたけれども赤坊が生れる爲めに此の親の家に戻つて來たのです」とある。上之町の彼の家は○○町の停留場を右に曲つて名は何と云ふのか恐ろしい泥川の岸に沿つた汚い平家であつた。奥の六疊と玄關の三疊丈だけで彼等は其三疊に居た。穢れた翠簾を下ろして家主の○○一家と區別を立て、居たので○○氏が鹿兒島縣の出である爲め彼は同郷の誼みにより其家に止宿して居たのである。八月引越し九月男の兒を出産したが間もなく死んでしまつた。

伸銅所は四時にはねて彼は五時に歸ると云ふ。今時計は三時を指してゐるから其間の時間を利用して民衆藝術の研究も亦一興と道頓堀へ出かけた。

歸つて見ると、「七時迄は待つて居ましたけれども待ち疲れて遂に外出してしまひましたとのみである。其處に湯から歸つて來た彼の妻君が妊娠慥しか七箇月餘と觀察れる處のお腹で七時迄お待ちして居りましたを繰り返して私で御返事出來ます事ならと云つて其處へ團扇を持つて座り込んだのである。先刻の母上にも増して落ちついた人である。



彼は鹿兒島縣日置郡〇〇村の生れで家は指物大工。三男に生れて居る、それに姉が一人。全部で四人兄弟である。長兄は大阪に居る、次男は村から五里程の村に聳に行つてゐる、姉は一度他に嫁いだが不縁になつて今父母と一所に居る。彼は此地で此家の娘なる今の妻君と結婚して居るが親思ひで兄も居る事であるが月々郷里に向けて三十圓宛の仕送りをして居る。教育は郷里で高等二年を卒業したのみで廿三歳の時出郷し兄を頼つて大阪に來り今日迄同じ〇〇伸銅所に勤めて居る。常備は一圓九十錢月収は百十圓内外となる家計の棗記入當時の住宅については既に述べた通りであるが今は此廣さうに見える妻君の母の家の二階六疊一間のみを借りて暮して居る。六疊一間が九圓と云へば妻君の實家の貸間である事を思ひ合せて見ると其の高いのに一驚を喫する。

妻君の職業はメリヤスの地縫であるが収入の高については『ホンの小使取りに致して居ります』とのみで分らない。主人の餘暇利用は、釣魚の一途あるのみで近頃の獲物は主として鮎とある。廿八歳の秋に結婚し其後何の變りもなく去年赤坊が死んだ、それのみである。

健康は充分ではない、胃が悪くて常に藥瓶を持ち廻つて居り其れに妻君のした事が氣に入らないので自分で悉く仕直はすと云ふ様な癖がある。此様にして彼は虚弱で女の様な性質なのであるが伸銅所の方のみは休む様な事はない。自分では演説等

出來ないけれど中央公會堂邊に演説會があると聞けば必ず出掛けてゆく。興業物等も好きではあるが近頃は暑いので費用が澤山掛るので出てゆく事が稀である。今夜は附近の小學校で衛生活動寫真があるので其れを見に行つたものとの事、新聞は毎日新聞をとつて居る。

宗教は門徒なる故生駒様を拜みにゆくののであるが眞宗と生駒様との宗教上の關係は如何なつて居るか分つて居ないのである。日本人はごかく神も佛も基督も皆一所に考へてゐるので其無頓着さには驚かざるを得ない。彼等夫婦も大仁の永祥寺、浦江の極樂寺、野田の延命院、何でもかまはず願を掛ける主義なのである。新進會に入つて居るが別に役員ではない。(八、二五)

### 一〇番 伸銅所銅管部職工

二十七歳 家族五人

本庄中道から〇〇伸銅所迄は電車で一時間半程掛る。此邊の玉造から郡部に入つた一圓は迷走せる道路に添ふて不潔な長屋の數々が立並び夥しい人々が住んでゐる。今宮邊の此種の場合に比較して悪い意味に於て遜色がないのである。沛然として降る雨を衝いて行く。夏の雨なれど今日は亦只の夕立ではない。昨夜の嵐は二十日の前嵐だと云ふ。東宮殿下には明日日本の領海に入られる筈であるに。天公何を戸

迷つて雨を降らすか。何にしても氣づかざるは殿下の御旅路のことのみである。海路御平安ならんことを。床の低い玉造一圓は俄かの出水に忽にして海となり家も浮び上らうと云ふ光景である。見るからに汚ない饅頭屋に赤裸な人々が雨晴らしとて逃げ込んで其處で人生の機微に觸れた物語りをして居る。「お前は後家だらう、後家、だから繁昌するのや。之れか。之れは眞田の槍であるぞ」等と云ふて槍を打ち振る。彼の家は比較的立派な路次に面して道路は屋根瓦の屑を縦に打ち込んで造つてあり其向ふの溝の岸には木柵を廻して種々な野菜が作つてある。眞裸體の子供が二人雨後の夕日を浴びて此木柵に攀ち、溝を置いた向ひの家の格子に並んでゐる。之れも同じく裸體の子と口喧嘩を戦はしてゐる。「馬鹿や、此處迄出て来い。やいチンポや〜。」と一方が片方の悪口を並べれば他方は其終るを俟つて一層面白い悪口を發明して之れに酬ゆるので何れが勝ちとも分らないので何時果つべしと見えない。恰度〇〇〇内のその如く無責任極まる子供の喧嘩である。其れを眺めて彼の歸りを待つ。

家の中では彼の妻君が一昨夜産んだ女の赤坊を傍に置いて起きなほり故郷の廣島縣から應援に來た十八になる妹さんを督して何やかやと氣を配つて居り今年四つになる茶目君が赤坊が生れたと云ふ神秘なる出來事に多少は驚き乍らも餘念なく悪戯を劃策し又一直線にお母さんに向つて突進するので母は妹を呼んで「たみや正一を

連れて外に出てお呉れ」と云つて居る。嫌がる正一君を抱いておたみさんが出て來るといつた調子である。

瀬戸内海の風光にも似る清く正しい容貌の所持者である彼は廣島縣忠海町の生れである。四人兄妹中只一人の男で四歳の時に父に別れ廿歳の時母に別れて居る。十六歳の時同じ町の鍛冶屋に奉公し兵役の方は補充の籤逃れであつたのを幸廿一歳の時に大阪に出て來て西九條の鈴木鐵工所と云ふに入り三月して玉造りのある鐵工所に轉つた。其處は鐵工所と云ふものゝ職工は僅かに三人であつたし二箇月位しか居なかつたから何といふ鐵工所であつたか全く忘れてしまつたのであるが、其處の鐵工所に居た關係から玉造に住居して、伸銅所に通ひ既に八箇年未だに不便を感じつゝも此處に居る次第である。伍長で常備は一圓九十五錢月収は百三四十圓である。平家で、間敷は二間、四疊半に二疊、敷金は十圓、家賃は八圓八十錢であるが來月位から九圓八十錢にすると云ふ宣告を受けて居る。先年家計の榮を記入した當時も矢張り此處にゐた「誰れか若い人が見えて教へて下さいました私は居ませんでした。我が妻がよく御教授を受け、全くよい經驗になりました。私の處では其後續いて同じ形式で收入支出を明かにして居ます」と云ふ。結婚したのは廿一歳の時であつた親が無かつたので早く結婚したのである。最初の女の子が二つの時に食當りして亡くなり四つになる男の子と一昨日生れた女の子と家内は四人となつた譯である。間

暇の利用とて月に一回位芝居を見に行くのみで他に趣味も何もない暇な時は稻荷様を信仰して居るので其方にお参りするのであるが彼自身何か知らん迷信の様にも思はれてならないと云ふ。彼はお稻荷様の原理は信仰する者に神様を憑らせて置いて然る後に禍福吉凶を占ふと斯う言ふのであるが之れは信者を一種の催眠状態に置いて然る後に出鱈目を言ふて聞かすと云ふ意味に解釋する事が出来る。即ち信者を一切の反抗力のない單に術者の服従關係に置き其れに向けて思ふ存分の暗示を與ふる仕掛けなのである。赤い鳥居の數々と巻物を口にした狐とお燈明と因果の法則を超越した不思議な物語と之れに一種の異様な音聲を調和し香を焚き以て信者の持つ一切の覇氣をぬいてしまふ。如何に反抗心の強い者でも長い間は是等の術を施されるとうつかりしてボンヤリした心境を楽しむ様になり遂に細工を施されるものである。酒を飲み三味線を聴き美妓を眺めて居る間に餘の様に細工せられるのと其理は同である。劍やピストルで強迫し金を出せと言へば命より金はつまらぬ事に想倒して遂に金を出すものである。思へば皆此稻荷様の所謂神憑り状態に人を引き込み己れも無我夢中になつて威丈高になり人を自由自在に動かすと云ふ事は事を成さんとする者の等しく研究すべき問題なのである。

稻荷の研究は不充分乍ら單に之れが心理的方面の考究に止め再び彼の人物を叙述すれば、身體は極めて健康である。新聞は時事新聞を讀んで居る。書物としては一

切讀まない。雑誌は中央公論を好いて居り小説等は大体好きとのみで作家の名等は記憶して居ない。煙草は好き酒は少しも飲まない。嗜好物としては甘いものが好きである。一時友愛會に入つて居た事もあるが會社側の壓迫を蒙つて遂に脱會したと云ふ。然し今では殆んど此種の壓迫と云ふ様な事はなくなつた由である。先日の工場委員としては友愛會の〇〇氏を選舉した。賀川豊彦氏とは一二回話した事があるが具合の宜しい人と云ふ批評である。其他彼は水泳が得意だといふ。(七、二八)

### 一一番 製鎖工場職工

三十歳 家族三人

春日出發電所の増築は其規模頗る雄大で魔塔の如く太い煙突の數々が立てられ建築物の骨格丈けが鐵骨によつて組み立てられて居る。地固めをする爲めであらう。鐵鏈が高く空中に巻き擧げられてドンと落ちる。其れが幾回となく繰り返えされて秋の日が傾く。春日出町には殆ど番地が亂雜で同じ番地が二三箇所離れて存在する様な場合が多く其等の番地が如何なる方法によつて決定されたか分らぬ。交番では番地が整理中の様に語つて居た。

彼の家は東洋紡績四貫島工場新建寄宿舎の附近にあつた。その寄宿舎は今年新設せられたもので收容人員は八百人程である。六時交代であるらしく今や澤山の女工

達が彼等の寄宿舎に歸りゆく處である。一同揃ひの作業服を着け頭は束髪に結つて白い袋を被せて居る。皆腕と腕とを組み合つて組長さんが恐ろしい眼をして睨んだ話だの誰やらは妙な人だのイヤな人だのと云ふ様な事を語り合ひながら工場から五丁程の道を歸るのである。道の兩側にはめし屋、うどん屋、雜貨店等が並んで電燈のみは景氣よく輝く。「秀ちゃん其犬こわいのか」「うむ」「あゝこわ」見れば寄宿舎の門前に意地悪さうな一匹の犬が立ち塞つて焼き芋の皮と覺しきものを食ひかけて居る。可哀さうに女工達は犬に道を塞がれて門内に入る事が出来ない。然る時にどある路次に皆が黒山の様にたかつて一事件の成行きを一種の期待と不安とを以つて見物して居る。群衆の中に一人の土方風の男が居て「撲つて呉れ。殺ろして呉れ」と云つて頑張つて居る處である。四五人の者が「何でお前を撲るのや、人さんに御迷惑になるではないか」「よいから撲れ」「貴様妙な奴やな、お前を撲るのは譯はないが此様な人様を見て居る處で何しに撲るのや。其れ丈け撲られたいのならばこんな皆さんの御迷惑になる様な處でなくともいくらかも場所があるぢやないか、場所を考へて見い。」と云ふのである。涙が男の双頬をつたふ。「何うしても叩いて呉れ」と云ふ男は咽喉に大きな塊を感じ乍ら切れ切れに云ふ。「撲つて呉れ……。」同じ處に東洋紡績の社宅もある。社宅の中では明るい電燈の下で男の人達がテニスをして居り、傍らの娯樂場?には係の女の人がオルガンで「アムール河」の曲をひいて居る。職工の

子が二人(五六歳)其の食堂の窓から星を仰ぎ乍ら譯の分からの唱歌を唱ふ。大人達は交代時の急がはしさにゴツタ反して居る。彼の家の附近は其様な状態である。殘業を二時間して七時に彼は歸つて來た。妻君は仲々別嬪で義齒をした人。よく肥つて居る。清潔を好む人と見えて純白のエプロンをかけて居る。玄關の板間に腰掛けてお茶を頂戴して居ると身長の高い彼が歸つて來て殘業をして居た事を云つて座につき夕飯は後にしてお話しを承ると困つた事を云ひ出した。

彼の故郷は佐賀縣西松浦郡〇〇町である。家業は陶器製造で兄妹は五人最初が女で後の四人は男。現在家業を繼いで居るのは最後の弟である。彼は高等四年を卒業して十六歳の時に臺灣に渡つた。臺中で同町の人が經營して居る陶器商店の番頭をして居た。兵役に四年。廿四から二年は佐世保の海兵團で機械修繕の方をやつた。是れが彼の機械工業職工としての振り出しである。妻君は其頃貰つたので今年廿六歳。大阪に出て來て最初大阪鐵工所に入った。次ぎに住友電線。そして大阪〇〇所に入ったのである。住友電線を出たのは當時戦争で市の方の賃銀が善かつたからである。大阪〇〇所の仕事は主として製鎖であるが機械修繕の方もして居る。製鎖は四萬噸位の軍艦に用ふる鎖も造つて居る。悉く機械の力を借りて造る。彼は修繕部に屬して居り、賃銀は二圓七十錢程である。彼は大阪鐵工所に居る頃は友愛會に入つて居た。大阪鐵工所は當時友愛會と鐵工組合とが競争的に會員を募集して居たが

彼は友愛會に入つた。電線に代つてからは友愛會に入會して居る者は少なかつた。少しは居たが支部が違つて居たので脱會した。脱會と云つて正規の手續を踐んでの脱會では無く單に會費を納めないで自然に脱會したのである。

彼の家は二階四疊半に三疊。下も同じ。昨年新建に引越したので敷金は百圓。廿二圓の家賃である。二階は二人の同僚に貸してある。最初賄をして居たが物價が騰つて賄しては却つて損になるので間貸しに代へた。家族は彼等夫婦と其れに養女で彼の養女は今年六つになる。

何も趣味はない。働く一方で新聞をよく讀む。此前の公休日に商品陳列館に博覽會を見に行つた位の事である。神様も佛様も拜まない。家の宗教は眞言宗である。煙草は好き酒も一人前飲む。働いて儲ける外に餘念の無い人で言語明瞭、容貌立派で極めて常識に富んだ人である。(二〇、一三)

## 一二番 電氣器具製造工場職工

五十六歳 家族六人

彼の家は茶園町で西野田第五尋常小學校の附近である。故郷は伊賀の上野の三田と云ふ村である。母は彼の十五の時に亡くなり、父は先年此家で亡くなつた。兄妹は彼と妹二人であつて。高等二年迄しか學校は行かなかつた。高等科があつて四年

迄行く事になつて居たのであるが高等二年になつた年に伊賀の高等科は他村の生徒を收容する事は止めになつた。其れ故止められた八箇村の村民は俄に高等科を作る事になつたが彼の村は建てる事が出来なかつた様である。當時の事は未だ幼なかつた爲めよくは記憶しては居ない。津市には中學校も出来て居た。高等三年から入學出来る事になつて居たが、彼は家庭の事情が許るさなかつたから行く事が出来なかつた。二十五の年迄は家業(農業)の手傳もし花菴の製造を思ひたつたりして副業の方にも身を入れたが却つて其が悪く失敗して朝鮮に渡らねばならぬ事になつた。京城には彼の伯父が商賣をして居たので其れを助けて二年程した。

大阪に来て妻子を呼びよせ新町で米屋を初めた。「四十五年頃御記憶ですか知らん米が二倍程になつた事があります其れで結局非常な失敗をしまして……」と云ふ。米が高くなつて何故に米屋の小賣が失敗するのかと云ふと、問屋の方からは是非高く仕入れなければならず之を一般需要者に貸しつけると回収する時に以前の半分値であつた時の位しか呉れないので結局貸し倒れと云ふ譯になる。彼は別に相場に手を出したのでは無かつた。新町邊は客が客だから止むを得ない。其れで大正元年に藤村鐵工所に入つて鋸盤師となつたのであつたが其頃は一番不景氣な時で一時は随分困つた。大正三年頃は段々景氣もよくなり、〇〇〇鐵工所の方に働いて可なり収入もあつた。妻君が新町橋の袂に天麩羅屋を出すし(今も行つて居る)。其中息子も大

きくなつて来たので二人で働く様になり漸時盛り返して来た。長男は今年二十一歳甲種合格で十一月八日に入營する事となつて居るがやはり父と同じ鍬盤師で日に四圓宛働いて居る。彼は昨年十二月から大仁の〇〇興業に通つて居るが日に二圓宛になるそうなる。

色々と話して居る中に電燈が急に暗くなつたが、これは安治川發電所で猫が送電開閉器の中に入り込んだためで直に引き出して故障の箇所を修繕したとかで間もなくばつと明るくなつた。彼はよく肥つた人である。立派な着物を着て居る。美髯を置いてよく落ちついた人であるが彼自身が説明する通り體かに陰氣な人である。子供は廿一の長男と次ぎが十八の娘である。妻君は新町橋袂で労働して居るが故に彼女が子供を構つて一人で切り廻して居る。次が尋常六年の男の兒最後が二つの男の兒である。

二階は六疊に三疊、下は六疊に四疊半である。家賃は十六圓、敷金は三十圓出して居る。若い時には亂暴な事をして財産を無くしてしまつたが色々な事業に失敗したので今では悲觀許りして居る。新聞は大坂毎日を讀む許りで別に趣味と云ふものはない。信心は眞宗である。將來とも今の〇〇で働く考である。煙草は喫はないが酒は少しは飲む。(九、二五)

## 其二 染織工業労働者

### 一番 紡績會社職工

五十四歳 家族三人

○紡績今宮支店は六時にはねる。此頃は五時と云へば日が暮れるので都會の熱鬧が鎮まるにつれて機械の音が大きな石臼をまはす様な音や鐵の盤を叩く様な音となつて入り亂れて聞えて来る、工場を廻ると職工達の宿舍がある、會社が特に宿舍として建てたものではなく、附近の民家を買収したもので宿舍としては不完全なものである、何處の貫一が呪つてか師走の寒空に月が明滅する。

彼は社宅の第九號に居る、岐阜縣可兒郡○村の生れである、士族ではあるが彼の父は僅かな土地を耕して居り彼の記憶では父は全くの農夫であつた、十七歳の時下等八級を卒業して其後は家業の手傳をして居た、二十七歳の時に父が亡くなつたので相續者である彼は一切の後始末をつけて大阪に出て来た、兄弟は三人で二人の弟の中一人は亡くなり一人は廣島市外三篠村で小さい雜貨店を營んで居る。

來阪後は此處の紡績會社に入社して十六年一日の様に眞面目に働いて居る、仕事は衡量係と云ふので出來上りの綿絲の重さを計つて居る、月給(○)紡績は悉く日給勘定の月給)六十四圓であるが病氣其他の事情で全部の作業日数を勤める事は稀であるから六十圓内外の収入である、半期の賞與は一箇月分位なものである。

彼の家は宿舍に當てられた長屋の一角で階下で四疊半と三疊がある、家族としては彼等夫婦に養女、養女は義理のある兒で八つになる。木津の第二小學校の一年生に通つて居る、「此家は妙な造りになつて居ります、階下は一軒で階上は二軒になつて居ます、其れは階段が一軒置きについて居るので其様な事になります、一軒一軒階段を作るにはは場をとりまますから宿舍として改造される時に此やうに造り更へられたものです。」と云ふ、「二階は三軒よ」と美ちやんがつけ加へる「黙つて居なさい」と嬌められて母の脇の下に匿れたまゝ、絶対に顔を出さず其儘寝てしまつたものらしい、彼女も以前は同會社の工場に通つて居たが今は行つて居ない、彼の二十五歳の時に結婚して今日迄二人とも至極丈夫であつた。

「今日も職工係の方に申したのですが如何なる理由で事理の分らない私の様な者を調査する様に推薦したのですか所詮分り兼ねて居ります……何も分りません爲め不得要領に終りまして申譯がありません」と云ふ様な口上である、兎の毛で突く様な隙も見せずに應對する人で極端なる謙遜家である、茶を汲む手つき菓子をすゝめる言葉、人を戸外に送り出す足どり、粗暴なる者には一々冷汗が出る程の正確さと奥床しさがある、彼の十六年の職工生活によつて少しも損はれて居ない士族的な風格に打たれてつくつく時勢の變遷を思ふ。「昔者で事勿れ主義と云ふ迄の事で恐ろしい者には近よらず萬事分に安じて勤めて居ります。」

宗教は永平寺に屬する曹洞宗である、天理教、基督教等からは是非自分の方の宗教にと云つて改宗をすゝめて來る人もあつたが祖先からの宗教を改めると云ふ考はかつて持たなかつた、其れは好き酒も少々用ひる。〇〇紡績今宮支店には勞働団体は無い其理由には種々あらうが紡績會社には女工が多いので彼等の間に交つて働いて居る男工達も自ら中和された穏和な性質を持つ様になり反抗心も、反抗心から起る團結心も比較的少ないのであるらしい。(二二、三)

## 二 一番 紡績會社職工

四十一歳 家族五人

彼の家は〇〇紡績今宮支店の社宅北表の最端にある。南區の生れであるが現今父の家は天満にあり八百屋を營んで居る、父は六十四、母は六十五である、五人兄弟の長男で家業を繼ぐべき運命を持つて居るが或る時期迄は別に自活の方法を講じて居る次第である、別々學歴と云つては無く只家庭で手紙等を書く事等を少々習つたのみである、三十過ぎる迄は家業の手傳をして居た、攝津紡績に一年半、久保田鐵工所に三年而して〇〇紡績に入社したもので勤めてから既に六年になる、仕事は撚絲の方で其外の雜務をも兼ねて居る、妻君も同じ紡績會社に勤めて居る二人の収入を合せて六十五圓餘になる。



家族は彼等夫婦に娘との三人で其れに親類の同居者が二人居る、階下で、四疊半二間に三疊である、入口の四疊半には床がついて居り南無妙法蓮華經と書いた掛圖が掛けてある、佛壇の意味であり、蠟燭がともつて居る、十六歳の彼の娘が今や夕の禮拜をして居る、法華經であらう、長々と一巻あげてから「日蓮宗でございませ私共にはよく分りませんが私の方の宗教は日蓮宗でも日蓮様が始めたのとは違ひますぞうです」と答へる、宗教とは云へど經文の意味も分からず宗教上如何なる部門に屬する宗教であるかも知らないで所謂見ずして信じて居るものである。彼は「無學の労働者は座れば直き足が痛くなつてごもならん」と云ふ様な事を云ひ、娘に話しを譲つて奥へ逃げ込む、閑暇利用と云つても閑暇の無い彼であるが休日には寺参りをする、煙草は喫ふが酒は飲まない思想と云ふ可き様なものもないが家の中は正しく整頓せられて陽氣な氣分が充ち満ちて居る。

### 三番 紡績會社職工

二十九歳 家族二人

○紡績の社宅は随分汚い、大抵の貧民窟もこんなに汚くはない、彼の家は北裏社宅の第三番、道路の角にあつた、「播州加古川町です」と云つて作業服の儘正座す

る。「お樂にしてお話し下さいませんでせうか」と願つても「これが普通ですよつて」と云つて動かない威風堂々たる人である、父は十七の時に亡くなつた。母は五十五になる、郷里で皆が工場通ひするのを色々世話して居る、故郷の工場と云ふのは加古川から一里許り離れて居る二人の妹は鐘ヶ淵紡績に弟は加古川毛布に通つて居る。彼も尋常四年を卒業してから一時家事の手傳をし其後鐘ヶ淵紡績に通つて居た八年程して優良職工と云ふ事になり相當にやつて居たが大坂邊に出たならば又其處に別な面白味もあらうと思つて來阪したのである。

彼の鐘紡での仕事は補綿係と云ふので原綿を加工する最初の機械について不斷の注意をなす一種の修繕係なのである、一臺の機械に二人の女工がついてゐるのであるが其機械五六臺を受け持つ事が普通になつて居る。來阪して職を得る爲めに方々の紡績に出頭して求職したけれども思はしからず、此處で故郷の鐘紡に居た時と同じ補綿係として働くやうになつた。大正八年八月から既に二年半腕には十二分の自信のあるにも拘はらず未だ何等の役の無いに對しては非常に不平で、「何處でも同じでせうが紡績は特に激しく全く上の人のヒキ一つです、女工ならば顔の美しい者男なら係の人に何か品物を餘計に持つて行く人と云ふ様なもので私は其様な事は出来ませんので」と云つて居る、彼の妻も工場と同じに働いて居る。

玄關が三疊で奥が四疊半である、電燈は一箇、玄關の土間が同時に臺所の土間と

なつて居る、疊は非常に悪く土色になつて居る、排水が不完全なので雨が降れば裏の溝から汚水が流れ込んで来る、夏は蚊が多い、家族は彼と妻君との二人で今年六月女兒が亡くなつた、去年十一月生れで彼の顔を見てニコニコ笑ふ位であつたが癩疹で亡くなつたのである。

赤坊が亡くなつてからは彼女も工場に出て働いて居る、二人の収入合せて五十圓位なものである、其内から二圓餘の家賃並電燈代を出さねばならぬ、會社に出す二人の飯代は彼の七圓五十錢と彼女六圓とで合せて十三圓五十錢月々の生活費を極端に切り詰めて二十圓と見れば三十圓宛貯金が出来事となる、實際彼は何等の趣味も無く休日も大抵は家庭に於て暮し餘分の金は全部貯金して居る。

一時友愛會に入會して居た、労働團體に加盟する事に對しては會社側では何も云はないが、彼は間もなく脱會してしまつた、一時は彼の外にも友愛會員は數名あつたが、今は労働團體に入つて居る者は誰も居ない、何故脱會したかについての意見として「不景氣な時に様々な事を云ふのは人間として云々」と云ふ様な事を云ふ、人間として云ふ意味は漠然として居て意味を無さない、講談本等を讀む、武勇傳が好きである、赤穂義士傳は郷里が赤穂に近いと云ふ意味と彼の家が士族であること云ふ事からと武張つた事を好むので何回も繰り返して讀んで居る、尙彼は「労働問題とは外國から來たものですが外國の會社では重役が少ないし日本では重役が多い

ので同日に論じられない」と云ふ。外國の會社に幹部は少いとしても日本の會社に幹部が多ければ何故無理が云へないか、何回反問しても説明不十分であつた。

(二、四)

#### 四番 紡績會社職工

三十四歳 家族三人

女のみ親子三人の彼女達は北表の寄宿に居る、父は和歌山縣日高郡東〇〇村の人であつた、父は聰明な人で無かつたので田畑を無くして一家は東京に出る可く餘儀なくせられた、當時は彼女の妹であるおはなさんは未だ生れては居なかつた、上福島の商賣屋に嫁入つてゐる次女と彼女と丈けが父母に伴はれて東京に出た。「色々職に就かふと思ひましたがよい事が無いので吉原に勤めて居ました」。父の吉原での仕事は如何なる方面の仕事であつたか不明である。居る事八年にして父は身體が不自由になつて勤めも出來かねる様になつたので大阪に歸つて來た。彼女の夫が萬事を指揮して南傳法町に落ちついて居た。

彼女は淺草で尋常五年を修業した。彼女の夫に伴はれて來阪し家事一切の事をして居た。一昨年夫が無くなると同時に次女を嫁入らせて末の妹と共に〇〇紡績〇〇支店に働いて居る。亡くなつた夫は品川白煉瓦會社に出て居た。月收は妹の分共で

三十五圓位になる。其内二圓七十錢の家賃を出さなければならぬ。飯代としては辨當にして居るので會社へは支出の必要がない。三十五圓の安月給で一家三人が生活して居るのは奇蹟の様でもある。而かも「芝居は好きでんね、歌舞伎だんね」と云ふ。他に何時でも來て寝泊りして居る若い男がある。三十四歳の彼女が二十三歳の青年を婿がねに選んだのであらうか、其邊は不明な點が多い。

四疊半、三疊の二間で、三疊の間に一杯になる大きな夜具が敷いてある、夜具は會社の方で貸與するもので棉を安く得られる關係からであらう、普通家には無い様な危大なるものである。彼女の末の妹は美人で丁寧によく話す人である、彼女の母は六十二、豊者で時ならぬ探偵(?)の侵入に對して驚きの眼を見張るのみである。

彼女は湯上り姿のまゝ、椽に腰掛けて「私の處には女許りですよつて別に悪い事をする様な迂散なものは居りませんけれど」と云ふ様な事をポツ／＼と語り「私の前一しよに居たものが稗島で勤めてますが」と云つて彼女と關係のあつた一巡査の事迄も説き出すのである、余は巡査ではないから其様な巡査の事は知らない。

前述の如く彼女の趣味としては歌舞伎、それに時々京都西本願寺に參ると云ふ。

(二二、五)

## 五番 紡績會社女工

三十九歳 家族一人

會社は寄宿舎に居る女工の教育について尠なからず意を用ひて居る。毎夜裁縫の教授もし(日曜は休み)休日には花の稽古に行く事等を奨励して居る。又月に一回丈け南久太郎町淨源寺の住職木村宗圓師に願つて佛教に關する講話を願つて居る。

宗圓師は眞宗の僧であるが「南無阿彌陀佛」を唱へる外は少しも眞宗臭い處の無い人で却つて禪宗の坊さんに見る様な洒脱な處がある。「今日は恰度宗圓師の講話がありますからそれをお聞きになつては如何です?」導かるゝ儘に大きなボイラーの仕掛けてある工場の側や高い煙筒の傍を通つたりして會場に通る。時間が少し早いので係の人達が師を相手に話をして居る。何處の和尚も大抵は禮儀が正しくて其顔を晴れやかにして居るものであるが此和尚も端正に座して麗はしい眉目を持つて居る。心境も餘程に練れて居るものであらう。

講演は二時間に渡つた。智仁勇の意義を明かにして女と雖も智を研き和合の徳を養ひ勇猛に至誠一貫すべしと云ふ意味であつた。智を物差しに譬へ仁を糸に譬へ勇を針に譬へた。仁を糸と云つたのは如何なるものも密着せしむる力がある爲めで、勇を針と云つたのは善惡、正邪、清濁、信不信一切を貫き而かも平然たるからであ

る。和尚は勝れたよい僧である、仁とか、勇とか云ふ難解な觀念をよく皆の腑に落ちる様に説いた。又件の講話の中には赤ん坊が腹の中に出來たら之を墮胎するのはよくない、因縁だと思つて産み落せ、而して育てるんだ、と云ふ様な事もあつた。講演はすんたが事務所での皆の批評は當らない事を云つて居る、「如何に難解な言葉を用ひても皆に分らなければ何もなりませんからね」と云つて和尚を褒める女の事務員も居り「よく場慣れしてゐますから」とも云ふ人がある、「大谷句佛の弟子の様です」其れかあらぬか歸るに先じて高らかに「旅に病みて夢は枯野をかけめぐる」と云ふ句を口誦し又「心轉じて常無し」と云ふやうな意味の説明をして居た、「和尚さんには十七の娘さん……」して見れば若く見えるが彼の僧も大分な年であらう。講演後は係員からの一場の訓話があつて女工達は各自の宿舎に歸つて行つた。

彼女は米澤市の生れである、「焼けてしまつたさうですわね私は二十年も故郷に歸りませんが今では以前よりもよい町が建てられて居る。

家業は商業であつた。母は何時亡くなつたか分からない。父は七年前亡くなつた兄妹は三人、一番目が姉次ぎが兄で彼女は三番目である。「私は學校には行つて居りません。」事情があつて一人で東京に出た、奉公して居たが二十五の年に嫁いで長崎生の夫と共に朝鮮に渡つた、男は種々な仕事をして居た。一時内地に歸れと云はれて大阪に居り又一しよになる都合であつたが種々な事情で遂に男と分れてしまつた勸められる儘に數年前工廠に通つて居る者に再縁した。彼は江州の人で、大阪には二三の親類もあつて都合よく暮して居たが昨年一月病死してしまつた。子も無かつたので以前の夫とは生き分け、次ぎの夫とは死に分れてしまつた。「二人の夫の家とは今は音信を絶つて居りますので夢の様です。」今は彼女の思ひ出をそゝるべき何物も無い。旅にて経験した一切の潜在意識を盛つた身體を「いづれは兄を頼る外仕方ありません」と云つて居る。兄は横須賀で海軍の方に勤めて居る。

彼女は室長をして居る、寄宿舎は階上十七疊半、階下十二疊を合せて一部屋と云ふ事になつて居る。階下が居間で階上が寢室である、彼女の受持ちは南の四號で定員は十名であるが現在は六名居るのみだが猶残りの四名も近く收容する筈だ。十名を收容する事の出来る部屋が八つある。

男の事務員に對しては勿論女の事務員に對しても話する時には板間に手をついて話す様にして居る。之がこの紡績の禮儀であるのか、それとも彼女自身の習慣であるかは不明であるが驚く可き程禮儀は正しい。久しく東京に居た關係からであらう、言語は明瞭で御殿奉公をした人の様である。新聞は事務所のものを読む。三味線等は寄宿舎であるから弾かない。花も心得ては居るが近頃は生けた事が無い。

女工達は休日には勝手に興行ものを見に行くが彼女は遊びに行く處も無し、起居

を益々厳にして事務員達との交際を楽しんで何處にも出ずに其日其日を送つて居る四十圓の月給である。其内食費として四圓五十錢を會社に支拂ふ、月三十圓の貯金が出来ると云ふものである。御殿女中の様に振舞ふ彼女の近頃は男故に苦しんだ昔に比して却つて楽しいもの、様に見える。(二二、九)

（以下は極めて淡く、ほとんど不可読な文字列が続く。これは極度の減字や印刷ミスによるもので、本文の意味はほとんど失われている。）

### 其三 化學工業労働者

（このページの大半は極めて淡く、ほとんど不可読な文字列で埋められている。これは極度の減字や印刷ミスによるもので、本文の意味はほとんど失われている。）

一 番 護謨會社職工

二十七歳 家族二人

築港千島町の停留所を西へ六七丁行つた處に〇〇護謨會社と云ふのがある、彼は其處の職工で寄宿舎に居る。「〇〇は只今作業中ですが就業時間が果てゝからでは如何ですか」就業時間は十時間労働で朝の七時から夜の五時迄と云ふ事になつて居るそれに二時間の夜業を加へて夜の七時にならなければ歸らない。(尤も其間一時間の休憩時間があるから實際の作業時間は九時間である)。晝の間に葭原に誰か燃した火がボカ／＼と燃えて居るからそれにあたり乍ら寒空に星を數へて彼の工場に汽笛がなつて、青服を着た人達が夕暗の間に吐き出される迄彼の家の周圍を観察せなければならぬ。

築港の此附近は家が未だ班らである、大阪の市街は上にも發展するが、より餘計横に郊外に廣がる、埋め立てた築港の土地は住宅地としてもよし、工場を建てるにしても非常によい。

それに水利の便がある爲め此附近には製材所が多く溝の中には材木が一杯であるカリフォルニア邊から積まれて來る所謂米松と云ふのが主で、値段は安く耐久力はさして悪くもないからあちらのソーミルでは夜も晝も挽いて柱にして居るさうだ。

此木で住宅が建てられる、之で家を建て、高野の材木を用ひた様な顔をして家賃を

一疊二圓五六十錢で貸せば住宅を建て、貸す事は最も有利な仕事の一つである。そこで請負師達は競つて家を建てる。

先刻砂川土橋の上を通つた時は面白かつた。それは十数名の男が溝の中から某製材會社に屬する神龍號の小蒸氣を空地の上に捲きあげて修繕しやうとして居たのである。「機械の力は恐ろしいもので、あれ丈の少人数、あれ程の細いロープで見よスルスルと小蒸氣が上陸してゆくではないか」と土橋の上の觀衆は何れも感心して居た。「エンヤラ捲いた！ヨイト捲いた！」……と突然にロープがブスときれて神龍丸はスル／＼と水の中に逆進水を開始する。

人夫達は此不可抗の位置のエネルギーが加速度の原則に従つて進展するので何等の對策を講ずる事を得ず、元氣を出してロープに掴まつた者は宙を引きすられ、腰をぬかした者は無制限に口を開いて其行衛を眺むる許りである。

其餘勢が筏に當つた、件の筏は例のメリケン松にて組んだもので仕事なら十人前相撲なら十兩處の元氣な兄哥が二人乗り組んで居た、大喝一聲「マスク野郎！何をしやがる、艫が一本此通り折れた見て置けよ、未ださんのけて見なければア分からぬがまだ外に……、馬鹿！貴様等何をしてけつかるんだ」此二度目の馬鹿が過失者達を徹底的に馬鹿にしてしまつた。若者二人の威勢はあがり十数名は未だ口を閉ぢないで一樣に水の上をのぞき込むんでゐる。

星の數多い夜の葭原に餘燼は無くなり、護謨會社の汽笛がボーとなつて寄宿舎にも皆が歸つて來た。

或家の二階で四疊半三間である、奥の間に彼と彼の父とが居る、それが一家と云ふ譯で家庭としては極めて變則な譯であるが、此處から毎日會社に通つて十二時間の勞働に服し一日、十五日の休みには二人で郊外散歩等をして愉快に働いて居る。

彼が基督教信者であり其教理によつて眞の教徒らしい生活をすると思へば社會運動家として立たねばならぬ事に論はない。勞働運動、社會運動に關する十數冊の書物を書架に並べ、壁間には新しい版畫等もピンで止めたりして居る。此會社に屬する職工達は皆友愛會に屬して居るので宿舍即ち友愛會支部の事務所と見る事も出来る

彼は丹後の國加佐郡○○村の生れである、家は代々百姓をして居た。父は薄俸な人で妻君を二度も亡くし、子供も多勢死なし持つた田畑も大抵無くしてしまつた、残つた一人子の彼は幼ない時には神童の名で通つたものであつたが卅近い今日になつて見れば故郷を去つた他の兒等と同じ様に何の成功もしないで徒に悲痛な生活を持續して居る次第で薄俸に徹底した父であり、子である。父は昨日今日の寒さに風邪ひいて居るのに明日からは子と二人會社を追はれ宿舍を引き拂つて路頭に迷はなければならぬ。

其意味は今晚は大正十年十一月十九日の夜であるが、明くれば廿日○○會社では

取締役〇〇氏が職工全員四十五名の即日減首を斷行する運命になつて居る、何知らぬ親と子とである。

彼は故郷で高等小學校を卒業すると京都に出た。京都で某貿易會社に勤めて計算部に働いて居た。六年程働いて居たが入社當時から何かにつけて厄介になつて居た重役の三村と云ふ人が社内の或者と意見が合はないで横濱に行く事となつたので彼も其人を慕つて會社を止めた。横濱では三村氏の紹介で方々就職口を探し歩いたが學歴が悪いので、よい就職口が見當らず小僧としてなら使つても遣ると云ふ店があつたけれど何をさせても十人並以上の能力を有する彼には小僧でもあるまい。一時は友人と共に大阪に仲買店の様なものを出し諸種の機械類等を商つて居たのであつた。伏見でも友人と共同出資で同じ様な事を開業した事もあつた。事業は何れも失敗に歸しブラ／＼して居たが故郷の父から「其様な事ではごもならんから何か職業について呉れ」と云ふ手紙があつたので父の紹介で昨年二月〇〇會社に入つた。

〇〇會社には父の友人が賄方をして居た。其賄方を頼つて入社したのである。彼の父も彼と前後して丹後を出て同じ會社に勤めて親子二人で働いて居る。父は生れ落ちるごから故郷にのみ居たので世間もせまく彼は父を伴つて諸種の興行物を見せもし休み日には郊外を歩いて名所舊跡を訪ねたりして居たのである。

基督教には無差別平等の者が多い、又一切の因習的權力を否定する者が多く〇〇

〇〇と云ふ様な事を念頭に置く者は稀である、彼も基督教信者で「一切の効力權を認めぬ」と云ふ

一切の權力を無視せんとする彼は「勞農ロシヤの現在を見てレニンの失敗と斷ずる事は出來ぬ」と云つて勞農主義を暗に稱揚する、階級の專制を否定して彼自身の階級專制を出現したレニンの遣り方は一時的の現象で、やがては過去の歴史的人物イエスキリスト様をでも讚美して悉く平等で暮せる世の中が次の時代のロシヤに來ると見て居るのであらう。議論は議論とし辭して戶外に出れば霜は白く風は寒い。

明くれば十一月廿日〇〇會社は豫定の如く午前八時と云ふに解雇に關する揭示を出した。

#### 「解雇に關する揭示内容」

- 一 作業中に寄宿内に立ち入りたる者
  - 二 職務に怠慢なる者
  - 三 作業中に酒を飲む者
  - 四 工場内の秩序を亂す者
  - 五 其他工場規定に違犯したる者は解雇す
- 但右の場合に該當して解雇せられたる者に對しては解雇手當を支給せざる事勿論なるも念の爲め之を告知す。



此揭示は大西外七名を解雇する前提として取締役が発表したもので、解雇手當を一文も出さないと追ひ出さうと云ふ料見であつた。午後四時頃迄職工達は働くとも、相談するともなく今日の揭示について心配して居たのであつたが、此有様を見た重役は直に即日全員解雇の揭示をした。數時間前に揭示してある通り、職務怠慢故の解雇であるから一文の解雇手當を支給しない事は明かである。但三日間以内に復職を申し出でたる者については審議の上復職せしむる事あるべしとつけ加へたのである。

父も彼も解雇せられた。廿二日夜友愛會執行委員會は〇〇會社の爭議につき徹底的應援をなすに決定し、廿三日西尾主事から會社に對して友愛會が應援する旨の最後通牒をした。應援費も先づ一回として五百圓が出て居る。廿二日から廿五日迄は彼は夜も殆んど寝て居ない「餛飩二杯食つた許りです」と云つて夜の十時頃追ひ立てられて居る宿舎に歸ると彼の父は流感で寝て居る。蒲團から頭を出して「それはあかん、井とつて來て遣るから休めや」と云つて父が出てゆく。

他の部屋の人達は荷物を作つて座敷の真中にコロコロと居る。誰も居ない。それが廿三日の彼等の宿舎である。廿四日には職工達が非常に不利な事をした。それは會社の事務員が職工側の本部前を通過した時に皆で會社側の意志を聞かうとしたに對して、職工達を馬鹿にした態度で逃げ去らうとしたのを撲つたのであ

つた、其場には彼は居なかつた。

廿五日には彼は泉尾署に引き立てられた。事件は前日事務員を撲つて檢束された數名に關する事と彼自身が廿五日朝白穂橋に立つて會社の遣り方が悪辣な事につき反會社の宣傳ビラを配つた爲である。總同盟大阪聯合會泉尾第二支部長であり基督教的立場に立脚せる社會改造家であるところの彼は目下警察で種々なる取調を受けて居る。

彼の〇〇での平均一日の所得は二圓七八十錢であつた。彼の父は多分丹後に歸るであらう。神龍丸は再び陸の上に引きあげられて心持ち首を曲げ乍ら一人ボンヤリ勞資關係の行末を考察して居る。(二一、二五)

## 二番 護謨會社職工

三十四歳 家族四人

彼の故郷は徳島縣板野郡〇〇町である。(本籍は此地に移してある)代々農を家業として居た。父は彼の十六の時に亡くなつた。母は七十三才、故郷で今に丈夫で働いて居る。五人兄弟で然も五人とも男である。「一人二人……五人目か」と云へば「一番下や」と座に居合はせた彼の上の兄が大口開いて笑ふ。兄は彼と同じ血を受けて居るとは思へない程見違はせて肥えた人である。「私は市電で乗務員をして居た時に腦

を打つてから神経が悪くなつて瘦せる一方ですのや何喰べても此通りです」と云つて肥つた兄貴の手前自分の瘦せた身體につき云ひ遁れをする。市電では車掌をして居たが車庫で雑務をして居た時に上から落ちた機械で首筋を打たれて卒倒した。其後身體が日に増し瘦せ衰へて今日の觀を呈したのである。職に殉じたとても云ふのであらう。

舊制の高等一年を卒業すると同時に大阪に出て來た。十二の年であつたが二十迄安土町の毛絲問屋に働いて居た。毛絲の事なら一通りは分かる。帝國護謨會社に約四年。市電に四年、四年目に前述の負傷で市電を罷めた。〇〇護謨に入社してからは五年目になる。創立當時から居るので混合部の主任で日給二圓八十八錢を支給せられ、善につけ悪しきにつけ常に職工代表者と云ふ事になつた。前に述べた如く十一月廿日に取締役〇〇氏の辛辣な手段により、職首せられたのである。「〇〇だつたか。あれも面白い男でんのか、滿鐵に勤めて居たか云ふて……市役所の土木課で働いて居た事もある様子です。私共の會社は一切温情的にやりますと云ふてポツタリくどやつて來さす男です。〇〇さん（〇〇社長）の娘を嫁にして置いて取締です。其れで私も〇〇さんに何とか云つてやらうと思ふて二十日に職首になつた時「〇〇さん。温情主義もえい加減なもんですな。即日解雇だつたか、五年間朝早うから夜遅くまで一生懸命に働きぬいた者に何の通知もなしで職首ですか、えい温情ですな」と

云つてやりました」。取締役〇〇氏のやつた即日解雇は悉く復職を希望するものと見越して解雇せしものであつたが、其策戦は中らなかつた。八名の復職者は被解雇職工團の決議により就職口が無くて直に悲惨なる運命に陥る者と見た者を復職せしめたもので他は誰も復職しなかつた。混合部主任は其顔に對しても復職は出來ない。最後に嫌味を云つたのが〇〇氏との分れであつた。

〇〇の争議は争議としては小さい乍ら頗る面白く社長〇〇氏は俠氣のある人で二百五六十圓の安い月給で一家と妾宅を維持して行かなければならない。妾腹の子も二人ある。それに面白いのは妾宅に三對の夫婦者が居て彼等のすべてが居候な事である。何故之等の居候が居るか可笑しい。其中一人は手無しで手は無ければ、會社創立當時に何かと功勞のあつた男である。もう一人は會社の職工で居て友愛會の様なものには入らないと頑張る爲め、工場の規定に當工場職工は他の會員と一致の行動をとる事を要す、然らざれば解雇除名するものとすのである。其結果件の頑張り屋は交友會を除名せられ〇〇會社の職工たり得なくなつたのである。路頭に迷はず事ならぬから「己が養ふからいよ」と社長が云つて引き取つた。以上二組の夫婦者の外にもう一組（之は一時ではあるが）を養つて居る人なので、「社長はい、親爺だ、あれに自動車を買つて乗せて見たいな」と云ふのが一般職工達の念願である。其等の居候達は如何にかして友愛會系即ち全職工を追ひ拂ふかと云ふ事に没頭

して常に居候的な策略を用ひて居た。其處で混合部主任である彼は「私はあの手無しと頑張り屋と〇〇さんと△△さんと五人で一度對決させて貰はなければなりません」と云ふ。其意味は今度の全員解雇の原因は彼等寄食團の離間策により斯くの如く悲しい結果になつたのであるから寄食團の偽りを會社側幹部の前で明瞭にしてやると云ふ意味なのである。

家は玄關が二疊に奥四疊半の平家の長屋である。家賃は十二圓敷金は入れてない泉尾三泉市場を南に突き當つて西に入つた所で近所に小さい説教寺がある。彼も眞宗であるから時々此説教寺へ行つて南無阿彌陀佛を唱へると云ふ。

家族は彼等夫婦に二人の子供で六つと二つの姉弟である。妻君は無頓着らしい肥つた人である。彼は休日には家で子供を相手にして遊ぶ事が楽しみである。娯樂は何もない。朝日新聞の夕刊を読んで居る。職務には忠實な方で〇〇では部の主任として四十五人中では何かにつけて推されて居た。今は部下の就職口について奔走して居るが大抵かたづいた様であるから明日(十一月廿八日)位から自分の就職口を考へなければならぬ。以前帝國護謨に居た關係から同會社には知人もあり、帝國護謨に行つて頼む心算である。

貰を喫ふ。酒は一合位飲む。友愛會に屬して居り爭議には九月以來陣頭に立つては居るが主任故に皆を代表して出るのみで九月初旬の解雇手當規定制定に關した争

議、十月初旬の賃銀値上の爭議の際には主なる謀士は前述の〇〇〇〇達であつた。勞働問題社會問題に對して別段の意見は無く一般勞働者に衣食住の安定さへあればよいと云ふ考へで人類と云ふ立場から問題を大きく考へては居ない。一般勞働者と云ふよりも先自分達の仲間が飲んで食つてゆける様にと思つて居る丈けである。因に彼は〇〇會社の混合に關する秘密は一切知つて居るので會社側からは非常に惜しまれて居る。(二一、二九)

### 三 番 護謨會社職工

三十三歳 家族三人

〇〇會社の職工達は善後策を講ずる爲め一團は造船工組合に集り一團は〇〇主任の家に集り一團は〇〇主任の家に集つて評議をして居る。友愛會からの應援費も限り無く出るものでもなし、年末には何處の會社も賞與を出さねばならない關係等から一様に雇入れを見合はせるので段々困つて來た。「お前行つて來たか、どうだつた?」「仕事がエライそうです、一日働いたら一日休むと云ふ風にして働かねばならぬそうです」「其はよかつた。日給は二圓六十錢か、そうか其れはよかつた。慣れたら樂なもんだ」と云つて主任は部下の就職し得たことを喜び且つ彼に元氣をつけて居る。一日働いて一日休まねばならないのに二圓六十錢で「其れはよかつた」と云ふ

主任の言葉には無理がある。此の際其程度の無理は穩當と認めて他の失業團の人達も「それはまあよかつた」と相槌をうつた。世にも悲しい「よかつた」である。

職工達は大抵大きい立派な桐の下駄を穿いて居る。△△主任の家の玄關も亦同じ様に桐で一杯であつて二階では小田原會議をして居た。大きな桐の下駄と失業とは悲しいコントラストである。

彼の家にも三足程の廣く大きな桐が脱いてある。彼は主任でないから脱がれてある下駄が少ないのであらう。二階借である。二人の友人が彼等夫婦を相手に資本家に對する呪咀の慷慨をして居た。彼等の風格態度は一人前の闘士と見えるが見解は未だ練れては居ない。「兎に角横暴だ」と云つては、然し〇〇會社の様に奇麗な仕事で同じ様な報酬を出して呉れる處は無いと云つて考へ込み「君宗教を持たない様な人間が日本に居るものか」「居ることも大いに居るさ」等と云ふ様な脱線的な事を大聲を張つて云ひ合つたりする。

彼の故郷は福井縣坂井郡〇〇村である。男三人の兄弟で彼は三男である。家業は農で父は彼の十九歳の時に亡くなつた。母は七十五で故郷で兄と共に居る。高等四年を卒業してから大正七年の春迄三國町の船舶問屋で働いて居た。其船舶問屋は酒屋を兼業して仲々盛んな店であつたが。彼は別に重く用ひられた譯でもなかつた。大阪に出ると直ちに〇〇會社に入社して今日に及んだものである。二階の四疊半と

三疊に彼等夫婦と今年一月生れの男の兒と三人で居るのである。妻君は赤坊があるので内職等はして居ない。休日等に散歩をする時は妻君を連れて活動寫真を見に行くと事も無いでは無い。昨年卅二歳で結婚したのださうな。

無口な人で問はれない事は絶対に話す事無く問はれれば一度問ひ返して質問の内容を確かめてから返事をする人でよく云へば念の入つた人であるが悪く云へば禮を失して居る。新聞は大阪毎日で雑誌は一切讀まない。二圓五十五錢の日給と二時間居残りで三圓近くの収入があつたから昨日迄は別に經濟上の不自由は無かつた。今日は解雇せられてその手當を得る爲め連名の訴訟を起しては居るがそれが勝訴になつたとしてもどうせ黙つて勤めて居た様な事は無い。彼も皆と共に氣焔もあがるが家内の無い人達とは違つて全く心寂しく感じて居る。〇〇の最後の争議に職工側のとつた態度は決して當を得たるものと云ふ事は出来ない。資本家は横暴で即日解雇をしたかも知れないが現在の護謨會社としては賃銀が少ない事は無い。解雇せられて路頭に迷ふよりは「三日間以内に復職を申し出でた者は復職を許す事ある可し」と云ふ條件もあつたのだから全部一應復職を希望するのがよかつた。而して其意思に反して會社が解雇した者のみ連名で解雇手當要求の訴訟を起し他の者等は黙つて働く方が一番賢明な策であつた。仲裁が入れば今からでも出来る。然るを單に解雇せられて極端に悲惨な運命に陥る者數名のみが復職して大部分が意地を張つたのは

結局多数の苦しみとなつた。彼も亦此誤られたポリシーの爲めに張り度くもない片意地を張つて今日此頃の寒さを必し／＼と身に感じて居るのである。

家の宗教は眞宗である。煙草は好きだが酒は飲まない。現代社會に對する希望と云ふ様な事は何も無い。安全に暮し度い事何かポロイ事もがなと探して居る事位なものである。(二一、三〇)

#### 四 番 護謨會社職工 三十九歳 家族四人

十二月は入營期であるから入營軍人のある家では「祝△△君入營」と云ふ旗を幾旒も立てられ夜は青年團の後援で澤山の紅提灯をともす。吹けば飛ぶ様な歌菓子屋からも大工と書いた軒燈を出した家からでも立派な國家の干城が出て居るのだ。全く軍國の氣分が漂うてゐる。場末の歌菓子屋に幾筋もの長旗が建てられ。枯草の間をコーチンが彷徨うて居り入營者の弟妹達がお祭りか何かの様に喜んで居る。冬の弱い日は照つたり曇つたり定まらない。三泉市場を何處かの葬式が路を練つて来る。長い葬式で先頭は造船工組合の前を通つて居るのに會葬者達は未だ梅の屋の角を曲つてサムライ商會の前から帝國製綿會社の邊を歩いて居る。笠で顔を匿した小さいボンチが二人一つの車に重り合つて揺られて出た時には見物の女達は一樣に涙を誘

はれて「ア、」とか「マア」とか思はず同情の聲を發した。顔も手も血紫の大きな女がついてゆく。亡くなつた人の看護婦であつたと見えて死人の身内と思はれるボンチを抱いて緊張した顔をして居る。死人は大きな請負師なんかであらう幾組かの花輪には何々組と云ふ様なのが多い。要するに營養不良の一團が眞面目な顔をして練り廻る光景である。葬式が過ぎた後の話では八つの橋を渡らなければならんよつて又此前へ出て来るであらうと云ふ。あの行列に何日も廻られては全く寂滅氣分になる。〇〇主任の家では今日も亦失業團に對する焚き出しをやつてゐる。妻君が暢氣な顔をして「主人は使つて呉れませんそうな。まあ御親切にそう云つてでしたそうな」と云ひ乍ら鐵の釜からヌク／＼の飯を握つて三角にしそれに鹽をつけて盆の上に並べて居る。總同盟の加入者は何處へ行つても使つて呉れない。彼等は何時迄も三角のヌク／＼をのみ食つて居るのである。市役所の職業紹介所にも行つて居るが思はしい口は一つも無い。斯くして師走が追々迫つてくる。

故郷は石川縣珠洲郡〇〇村である。父は十歳の時に亡くなつた。母は六十二歳で彼の家で働いて居る。家業は農業である。兄妹は七人。彼は六人目の四男で男の中では一番下である。長兄が眞面目に働いて居るので家を顧みる様な心配はない唯母が長男と折り合はないので〇〇の家名を稱して居る(次男三男は養子)末弟なる彼の家に來て居る。學校は舊制の高等科を卒業した。

十六歳の時に故郷を出でて京都の染物屋に勤めて二年程した。其後行商人に變つたのであるが行商と云つても萬問屋木谷幸次郎商店京都の販賣員と云つた様な譯で値段が折り合つたら問屋に電報で注文する仕掛である。其値鞘を儲けもし問屋の方からは日當二圓五十錢宛出て居り旅費は別に請求して居たのであるから此様に面白い商賣は無かつた。商品は主として蜜柑類壘俵類等であつたが徴兵で入營する迄は何處で何をして居たか自分で分らない様であつた。餘り面白いので「よし來いや一杯やろよ」と云ふ様な調子でいつの間にか年月が過ぎ去つてしまつた。兵役から歸ると同時に今の妻君を迎へて〇〇護謨會社に勤めたが其後は思ふ様にならず「若い時に餘りに面白い事をして居たので其罰です。」と云ふ様になつてしまつた。〇〇會社では調帶部の職長と云ふ事で部下として二十何人を使つて居たのである。彼は〇〇會社の最初の友愛會員で其後皆を勧めて遂に全部の職工達を友愛會に入れたのであつた。

今日の全員解雇には彼は比較的軟派に屬して居る。「取締役は高等工業を出て技師と云ふ肩書を持つて居る様に聞いて居ますが滿洲に居た事もあるやらで全く滿州ゴロと云ふ處ですね。土方を使ふにはあの様な者が一番宜しいのですが、多少事の分つた都會の勞働者を使ふにはあの様な者は駄目です」と云ふ。「實際私は面と向いて君なんか人を使ふ様な柄ではない、何かブン／＼して妙に威張つて許り居るぢ

やないかと云つてやつたのです。すると先生僕は新米さ、新米だから君一つ歸つて來て僕を助けて働いて呉れないかね、君等が居らんと仕事は出來ん。君を失ふ事は二十人三十人の職工を無くするよりも尙辛いと云ふのです」うんと御馳走して買収に掛るので年末賞與も二倍にしてやるよと云ひ彼も幾度か首を振つたり眉に唾ついたりして取締の云ふ事を聞いて居た。「よろしい復職させよう。私の部下二十人を連れて復職します。然し其處に一つ條件がありますよ。即ち以前に裏切りして復職して居た二人を解雇する事と復職者以外には規定通りの解雇手當を給與する事を聞いて下さい」と持ち込んだ。買収に要した費用はいくらか不明である。兎も角此談判は不調で彼は依然他の失業團と行動を共にして居る。取締役の食へない事は「では二人は解雇するから來て呉れるか、手當は他の者が勝手に裁判で來たらよいではないか」と此様な事を云つたのを見ても分る。此景氣の悪いのに〇〇で職長をして居た彼が潰し値で他の會社に行く事は頗る不得策である。其で一度故郷へ歸つて長兄と熟議し幸ひ彼の現在の家は商賣が出來る様になつて居るから何か商賣をし様と考へて居る。一家をなしてから解雇せられ今や路頭に彷徨して居るので何につけても思ひ出すのは昔のことである。懐かしいのは行商時代の十八九の頃で明日を思はず一日を享樂する事が日課であつた其華かな少年時代を思出して妻君が家賃丈けでもとると云つて帽子屋に行つて居る間に誰も居ないを幸ひ片膝立て、障子を見つめ薄馬

鹿の様に懐舊の笑を洩したりして居るのである。扱ても罪の無いものは懐舊の情である。さり乍ら何處に行つても〇〇會社で取つて居た二圓六十五錢其れに夜勤手當を加へて二圓九十錢餘の金を出して呉れる者は誰も無い。〇〇では頗の落ちる様なうまい話を持ち出して彼を誘惑する。彼の家は三泉市場が木津川に突きあつた邊のどある路次で二階は三疊に五疊下が四疊半、二疊、三疊である。二階は夫婦者に貸してある。下に母と彼等夫婦とが居る。他に兄の娘を養つて居る。今年十六で禮儀を習ふと云ふ意味で某邸に奉公して居る。家賃は全部で二十圓。路次に面した三疊は店にする事が出来るから家賃としては高くない。此三疊の間を店にして何商賣をするか、先決問題で第二に開店に要する資金を何處から得るかであるが位地から云へば申分は無く何を商つてもよい處である。

叙上の如く失業の彼は部下の就職口を見出す可く又自分の身の振方をも定めなければならぬので朝早くから奔走して居る。思はしい口が無いので失望して家に歸つて考へたり又出掛けたりして居る。母はいとしい末子の彼が失業と聞いて仕事も手につかない様な有様である。

新聞は朝日を讀んで居たが近頃止めて居る。十九の頃脚氣に罹つたのみで其後病氣になつた事はない。子の無いのについては「結婚してから五年にはかならんにそんなに早く赤坊が生れるものですかそう早く生れられては……」と云ふ。講談物を

讀む事が何よりも好きだと云ふが古今の豪傑の力量を批評する等と云ふのではなく好き故讀み、讀んだ事を記憶して居るに過ぎない。

家の宗教は淨土宗である。葺も喫ふ。又酒も少量丈用ひる。(二二、二)

## 五 番 護謨會社職工

二十八歳 家族六人

〇〇護謨會社は浦江にあり四百五十人からの人数を使用して居る大會社である。彼は其處に通つて居る。浦江聖天様の通りは二三年以來非常な發達で夜見世が出るので夜はかなり人出が多いが惠下田三段以下の者共が「タンタラパー」とかに陣取つて活動して居たと云ふが其れ程の擻猛な不良團體の活動する地方とは受け取れない。聖天様はよく大阪人の宗教心をそゝる様に要領よく建てられて居る。鼻の門える様な處をあまり喧嘩もしないで群衆が流れ流れる。要するに我々は群衆に酔ひ度いと云ふの本能を有して居るのである。

彼は大阪人である。北區堂島中二丁目に生れた。彼の父は色々な處に勤めて居た。八年前此處に移つて彼等が一人前になる様になつてからは身體も虚弱であり何處にも勤めない。彼の長兄が大連で親類筋のある商館に働いてよい収入があるので生活は安定せられて居る。彼は鷺洲町大仁の關西商工學校商業本科を卒業した。夜學で

日中は〇〇護謨會社に通ひ乍ら通學したものである。護謨會社に通ふ様になつたのは彼の十七の年からで既に十年餘になつて居る。今では月收八十圓平均程あり工頭と云ふ役で二十名以上の部下を使つて居る。

家族は父母と彼及び妹三人である。母は五十三になるが若い時から古着を賣つて歩く事が好きで内職として方々知人の紹介で古着を持つて歩いて居る。彼の收入許りでは不足するといふわけではなく本人が樂しみにして居るので内職としてはよい職である。其外妹達が逓信局に出たり裁縫をしたりして皆で家政を助けて居る。

以前は日曜祭日等には芝居を見物したり郊外に遠足したりする事が多かつたけれども近頃は野球に熱中して其方を見物に行く事として居る。此前の日曜にはスターとダイヤとの決勝戦があるので鳴尾迄見物に行つたが恐ろしい接戦であつた。家族中病む様な者はないが父が喘息で年に二三回發病するのみである。

彼の趣味は野球の外に演説を聴きに行く事である。賀川氏の演説等もよいと云つて賞める。新聞は朝日、雑誌は現代をとつて居る。『官業労働者の今度の大會も聴きに行きました。要するに關東方は直接行動に出でよと云ひ關西方は先普通選舉によつて選舉權を得。議會政治を認めて社會改造の實を擧げるのだと云つて激論をして居ります』と云つて居る。彼自身が演説等をするのではない。修養の参考に迄聴きに行くのみである。音樂にも趣味があつてよく聴きに行く、宗教問題や根本的な思想問題は研究して居ない。よい方面を代表した大阪人である。(二、三)

#### 其四 特種工業労働者



一 番 電燈會社機械部助手

三十六歳 家族五人

春に入つてから急に暖くなつた。傳法の川と川どが落ち合つた端に鴉ノ宮神社がある。場所もよく景色が豁けて居り相當に掃き清められて居るので人を待つ間を腰掛けて居るには極めて恰好な處である。附近には製材會社、硝子會社、鐵工所等が多く空氣は悪いが其も反つて大都會の場末らしい風致である。拜めば子が生れる神社である云ふ鴉ノ宮から千島町に至る川沿の道路は片側道ではあるが他の片側は川に舟を浮べて住宅を形作て居る。此附近で荷揚げ等する人達の住家であらう。水準の差が少ない。

ヴェニス邊にした處が野蠻人に追ひ立てられた文明人が一時的の目的で建てたものが永久的の意味を持つ様になつたに過ぬのであらう。人類の水上生活は例外もあらうが何等かの力によつて一民族若しくは一階級が地上を追ひ出された場合に起るものであり、此等の人達も好んで水上に住居するのでは無く地代等の掛りが少ない水上に遁避したものであらう。其等の中二三軒の家屋が顛倒して居り中の疊や障子が半水に漬かつて其不統一な態を曝して居るので皆が同情の念を以つて代り代り立寄つて見て居る。

水上生活者の女房達は自分自身の身の上に較べて特別に深く長い溜息を漏らして

之を眺めて居た。そして船の中から誰か、労働者らしい歌を唄ふ。

三時に交代、三時半には彼が歸る。香川縣の〇〇町に生れた。此の町ではお遍路様を待遇する事は非常なもので、誰でも御布施を貰ひ乍ら樂に琴平參りの出来る様になつてある。僧空海の人格の光が今に高野山を中心に其宗旨の上に現れて居るのは勿論だが平民的共産的な一面は琴平神社を中心にしてゐると見える。

家は農家である。父は彼の二十四の時に亡くなつた。母は五つの時に亡くなつてゐる。父は子供が可哀さうだからと云つて後妻を貰はなかつた。兄弟は五人である。兄二人姉二人彼は末子である。末子が女である場合は感心出来ないものになることが多い。男が末子である時は謀反心の強い面白いものになる事が多い。彼も謀反心が強い方で工業學校の三年生迄行つて學課は悪くない方であつたが、教師に對して持つ反感等もあつたし、酒色の味を覺えてからは世間が馬鹿らしくなり、傍ら勇敢な事を好む性質であつたので學校を止めて海軍に志願した、吳の海兵團に入營出来たのは明治三十九年、彼の十九歳の時であつた。海軍生活は全く愉快であつた。主として富士に乗つて居た。砲術練習艦として横須賀には三年程居た。多くは伊勢灣で砲術の練習をする。的を艦に牽かせて置いて追ひ掛けたり逃げたりし乍ら之を射つのである。「犬追物」と同じで犬が逃げる、馬が走り、射る者は餘程の熟練が要る。八年間勤めぬいて満期と共に大阪に来て、大阪電燈に勤めて今日に及んだもので

ある。

職工から助手技術員（一級二級三級）と昇つて行くのであるが彼は現在助手である。彼の友人は大抵技術員になつて居る。一、二年すれば三級の技術員になる事が豫想せられる。機械の方の係をして居り月収は平均百二十圓位になる。

大電爭議の時は裏切りと云ふ汚名を被つて復職した。誰でも復職した人達は非常によい待遇を受けた、當時の模様を聞くに警戒者達は罷業團が門外に殺到して棒等の中に挿しこんだ時には遠慮せず中に引張り込んで、相當な懲戒を加へ福島署に非らざる他の警察署に連れて行つたらしい。其理由は罷業團本部と福島署と近い爲め罷業團が殺到して貰ひに行くかも知れないからである。「總じて大電罷業の時には警察側があまりに會社側に應援した様に見えましたが事實罷業團が全部占領したなら什んな事をしたかも知れません。警察が應援したと云ふのは會社を應援したのではなく市民の爲めに働いたと見るのが本當でせう。」成る程一理ある。然し籠城中の待遇が少し善過ぎた事は事實であつた。彼も此特別待遇を受けた一人である。然し彼は「實際私共は困難な立場にありますのや技術員は職工達と仲よく酒を飲む様な事はありませんが助手である間は職工達と飲む事もあり、技術員其他とも飲み合ふのですから兩方の言ふ事を聞いて居ます。資本案側についても職工側についても兩方悪い事になります。一度罷工團と共に出て見ましたが復職しました。」と辯解する

自分の動かして居る機械に故障があれば全市が如何なると云ふ事が明確に頭の中にある。彼で見れば復職したからと云つて普通の労働争議に於ける裏切者と云ふ意味とは違ふ。電氣が止まれば就業時間以外でも自分の機械がどうかしはせぬかと思つて誰が何と云つて来ないでも一人で行つて見る氣になる。

家は四疊半に三疊の二間である。電氣會社に勤めて居る關係から特別に安く電氣を使用する事が出来るため煮焚の事から炬燵に至る迄悉く全部電化せられて居る。電熱器は飯、汁、魚の煮焼一切の事をして今日で二十日程になるが未だ七十キロしか電氣を喰つて居ない。一キロ三錢二厘で得られるので二圓二十四錢程になる。彼の家では炭なれば二十日に四圓は用ふものを經濟である。「體裁もよし是非に一般に用ひる様にしなければなりません。來年度は大電の電燈の方は是非に買はねばならぬと云ふ市役所の腹らしいので大電は動力で立つより外ありません。それで動力使用の事を盛に宣傳して居ります。」炬燵の方は三月で四圓である。

此家に住んでから既に七、八年になる。家賃は漸次値上して十圓五十錢になつて居る。「此附近の何處よりも安い方でせう。」中等程度の學問をして居る人であり奥さんも立派な人で屋内は悉く文化的である。子供は十一(男)三つ(女)一つ(女)の順序で。一つの女の兒の肥えた可愛らしい事は何にも譬へる事が出来ない。子女の教育については男は工業學校から高等工業に遣り度いと思つて居る。女は

未だ考へては居ない。

彼の従弟が中學校を卒業して高等學校に入る準備をして居たが過度の勉強をしたので未だ試験を受けない前に病氣(肺病)になつて死んでしまつた。「英語と算術」は特に出来たのであつたが惜しい事をしました。之に鑑みても中學、高等學校、大學と踏ませる事は考へものと思ひます。」と云つて居る。二十五歳で結婚して以來特別の出来事も無くて今日に及んで居る。

新聞は朝日新聞を讀んで居る。危険な仕事に携つて居る爲めでもあらうが。應答の具合が響きの音に應ずる様に明快でうつつかりして居ると徹底的に遣り込められはせぬかと云ふ様な氣の措ける人であるけれども、事實は優しい人で積極的に人の鼻柱を折らうと云ふ様な性質の人ではない。鼻下に美髯を置いて風貌實に堂々たるものがある。現職に對しては充分の自信もあり技術員として乗り切りたいと願つてゐる碁を打つ事が好きな丈で三人の子供もあり他に何等の趣味もない。大阪電燈には現在では横斷的の労働組合に加入して居る者は表面上無い事になつてゐる。職工達は助手、技術員に至る迄全部團結して居り萬事會社側と懇談して事件を解決して行くと云ふ方針である。(一、一三)

## 二 番 電燈會社機械部助手

三十六歳 家族四人

今年になつてからの初雪である。年内には申譯的に二度許り降つた様であつたが今日の雪は夥しい。屋根には三寸許り積んで居る。地上にも一面に積つた。彼の家は西野田のどある路次にある。道が非常に悪いが一圓二十錢のゴム靴で歩く者にはさまで痛痒が無い。自分を電車の上から早く降りろと云つて突き落した魚屋の事を思ふ。要するに魚屋は鯛の尾を切り棄てる時の勢ひで萬事を解決しやうとして居たのである。其れに雪で寒いから一刻も早く電車を降りたかつたのであらう。何れにしても魚屋は何れも元氣が餘りよぎる傾向がある。

今は午後の二時である。三時出勤故彼は火鉢に手をかざして新聞を見て居る。件の新聞には世界的庭球選手某の結婚に關する記事や亡くなつた大隈侯の逸話等が出て居る、病中の山縣公は大隈の死については「うむ、亡くなつたか、惜しい事をしてな」と批評して居るそれ以上の事は何も云はないと云ふ。山縣公も亦命旦夕に迫つて居る。

彼は大分縣直入郡〇〇町の生れである。阿蘇山から流れて来る大野川に沿つた人口三千程の町である。舊中川藩であるが十年の役に大抵兵火にかゝつてしまつた。西郷方の一隊が宮崎縣に入つて到る處で殺戮を敢てした。中川藩は恐ろしいので已むを得ず降参したのであつた。彼の父等も一時西郷の軍勢について歩いた方で後で大分縣廳に引き出されたが已むを得ずついて歩いたので、積極的に亂暴したので

はなかつたから別段の刑罰は受けなかつた。藩主の居城があつて舊藩内では一番大きな町であつたのだが附近の農村を相手にして立つて居るのみで年々衰微して行く許りである。彼の家は城裏の士族屋敷にある。彼の十四、五の時には四、五十軒の立派な士族の家が建つて居たのであるが今では皆無くなつて彼の家共に五軒程並んで居るに過ぎない。其等の家は皆農を營んで居る。

五人兄妹の末子である。大分中學校の二年生迄行つたが家庭の都合で退學し、海軍が志望であつたので志願して佐世保の海兵團に入團した。日露戦争の時は上村艦隊に屬して居た。蔚山沖でリューリックを撃沈した時は大部大きな戦争であつた。出雲に乗つて居たのであるが四十幾發かの砲弾を受けて大部死傷者があつた。撃手はそれ以上に損害を被つてゐた。リューリックは舵機に故障を生じ海上にマゴクして居る處を驅逐艦で襲撃して撃沈した。

總じて軍艦は砲弾のみで沈むものではない、彼は機關部に働いて居たが戦争も數時間に亘るとダレて來て遊び半分になつて來る。彼も終りの頃は「己も少し見て來る」と云つて時々甲板に昇つて見たのであつた。砲弾は機關部で聞いて居るとこつちから發射したのか敵弾が命中したのか少しも分からなかつた。十一年間勤めて大正三年に退職し二年程故郷に居て家事の手傳をし其後大阪に出て安治川の發電所に勤めて今日に及んでゐる。今年で五年目になるのみであるが助手であり月收は百十

五六圓平均になる。

四疊半に二疊の長屋で前の路次は道幅が三尺程で日當りの悪い處である。家賃は九圓五十錢、敷金は入れて無い。『濕氣は激しいが健康に害のある程度のもでは無い様です』家族は彼等夫婦に二人の女兒。上が七つに下が三つである。下の兒が黙つて自分の顔を見て居たが大きな聲を出して泣き出した。やがて又直き機嫌をなほして笑つて居る。妻君は東京辯で氣持ちのよい人。子供達は美しい。『お父さんもお母さんもこう美しい娘さんを持たれては餘程御注意なさらなければなりませんね』『故郷から送つて来た柿ですがおとり下さい』種は小さく頗る甘い干柿である。

二疊の間の一隅に酒樽を重ねて栓をぬけば直に徳利を充たす事の出来る様になつて居る。其側に電熱器が置いてあり非常に便利である。『私は常にどうして愉快に此世の中を送らうかと云ふ事を考へて居ます。酒は少々飲みます』。電熱器の側に酒樽を積んで置くなら愉快に暮せる筈である。誰も内職はして居ない。『未だ何處迄勉強させるかは考へて居ませんが女はあきません、嫁にやらねばなりませんから』子供が好きでどうしてゐるかと思つて會社からも走つて歸つて来る様な次第で、閑暇があつたからと云つて何處に遊びにゆくとか何を見物するとか云ふ様な事は無い。

大正三年に結婚してから今日迄皆丈夫で何の災厄も無かつた。

正確な智識を持つて居ながら、それを不正確にソロ／＼と發表する人で尋ねれば何でも知つて居る癖に何も知らないやうな顔をして居る。『労働運動も、う少し合理

やらなければなりませんね……』と云つて暫くして『假に賃銀の値上を要求するにしても自分等の生計費は月に男いくら女いくら何歳の子供はいくらと計算し、他の工場の賃銀とも比較し、會社の利益と云ふものをも計算して總ての方面から算出し立案して之を會社の方に要求として提出するのであれば成功不成功を問はず立派なものです、それを今度は三割要求にしやうか三割では少し多いだらうか。棒程願つて針程叶ふと云ふではないかと云つた調子で争議を起すので少しも合理的に争ふ事をしませんから私は今日の争議には不賛成ですのや。もつと合理的に争ふなら……』問ひ詰められて仕方が無くなつてから僅に自分の意見を述べ、出来る限り固い話を避け他は子供の可愛い話や何んかをしてニコ／＼して居る。氣焰をあげる事は嫌ひな性質と見える。悟り過ぎてしまつたのである。現在の職は長年やつて居た事であり一生涯やる考へである。宗旨は淨土宗であるが寺に參る様な事はしない。電氣會社は機械工場ではなく運轉工場であるから仕事は至つて樂である。殊に彼は助手でもあり只監督して居ればよい様なものである。機械の修繕等餘程困難な場合でなければ自ら槌をとつて働く様な事は無い。(一、一四)

### 三番 電燈會社電氣部助手

二十八歳 家族三人

雪解けの後を皆で掃除して居る。玉川町三丁目派出所の巡查は記憶力の正確な人

と見えて彼の止宿して居る遠近の家を尋ねたら、其家が數町離れた分りにくい處にあるに拘はらず地圖も見ずに正確に教へて呉れた。其處は此邊にありがちな赤煉瓦の行き止り道で同じ様な長屋が幾つもある。随分混み入つた處であつた。

暗い梯子段から「おはいりなさい。何日お見えになるかと思つて居ました。さあさ。」彼は二階借りして居る。梯子段は丈夫に出来て居ないので急な所で頗る危険である。二階八疊の間に花莖を敷いて箆筒鏡臺其他の諸道具が整然と並べられて居る。屋根に物干があつて其物干臺で簡単な煮焚が出来る。

本籍は東京である。湯島天神下に彼の家があつた。父は淺野セメントに勤めて居た。もう一年も勤めれば餘程よい處になれると云ふ時に恰度彼の十歳の時であつた。が心臓痲痺で一夜の中に亡くなつてしまつた。一家は母と二人の姉と彼と妹の五人であつた。遺産が可なりあつたので差し當り困る様な事は無かつたけれど遊んで食つては泰山も猶足らないと云ふが、次第に家計が困難になつて來たので何か商賣を始め様と云ふ事になつた。

母は一生懸命であつたが二人の姉が恥づかしいと云つて手傳ふと云ふ氣が無かつたので商賣は止めになつた。二人の姉は年頃になつて嫁いでしまひ、彼は高輪中學の二年生になつた。其頃には父の遺産も大抵使ひ果されて居た。彼は中學校を卒業すると云ふ考も無かつたし學校も休み勝ちで居たが、或日夕日を追ふ者の様な心持

ちで母にも其旨を語つて大阪へ來た。大阪で職を求め様と云ふのである。大阪に來ては知人が大阪電燈で職工をして居たので其人を訪ねて就職口を頼んだが當時大電でも人を求めて居た際だから入社して其の儘今日に及んで居る。大阪電燈で働く傍ら關西商工學校に通つて工科を卒業して居る。現在は助手として二圓八十一錢の日給であり月収は百圓内外もある。十年も働いてゐるのは大阪電燈でも珍らしい方で、順調に行つて居れば技術員になつて居なければならぬ筈であるが、自重すると云ふ事が無く平職工達と一緒に騒いで居るので助手の中でもよくない方である。「私も、う少し自重したいと思ひますけれども此通りで」と云つて居る。如何に氣取る氣になつてもそれが出来ないで困つて居るのであらう。江戸ッ子には彼の様な氣質の人が多。

二階の八疊を九圓で借りて居る。權利とか敷とかは出して居ない。東京の人丈けに家の中が明るく諸道具が皆粹なもの許りである。三つになる伴一君が眼を覺ましていたづらを始める。未だ何も云ふ事は出来ないが他人の言ふ事はよく聞き分ける。聞き分けると云ふよりも人の動作を熱心に見て其心持を察するのである。大小便等ははまだ云へない。妻君は大阪の人である。十八九に見える人で机の上には種々なる婦人雜誌が載せてあり其中に婦女界がある。

閑暇の利用方法としては主として運動をする。高輪中學校時代にベースのチャンをして居た關係から大電チームに於ても遊撃手をして居る。現在のチームは餘り強

くはないが一時は非常なもので關西の實業團體チームの中では一二を争つて居た。其外彼はテニスや射的を好む、テニスは常に後衛としてコートに立つ。去年獵銃の鑑札を受け様と思つたのであつたが金が掛るので見合はせた。其外寫眞を研究して居るが未だ本物にはならない。二十六歳の春結婚して前記の男の兄一人である。彼も彼女も健康其物の様で一度も病氣をした事がない。

江戸ッ子であり、中等程度の學生々活をした事のある人なので極めて快活で『私は此頃は本を讀んで居ませんので辻褃のあつた事を申しあげる事は出来ません。尙他の連中をお調べになつたら物の分つた者も居りませうから』と云ふ。無宗教である。何も突き詰めて考へた事は無い。將來とも技術員として貫く考である。(一、一六)

#### 四番 電燈會社電氣部職工

二十六歳 家族三人

借家人同盟會の〇〇氏は石井忠商店から收賄した某々官吏を槍玉にあげた人である。彼は電車の中で彼と同じ様に勞働運動に奔走して居る某氏と遇つて『やー！』と聲を掛け『先年己が少し何かしたと云つて野郎共が己を檢舉したのであつたが、あの奴等が人を無暗と檢舉するなら己だつて其覺悟がある。民間にも檢舉團を置いて彼等をどしどし檢舉して遣ればよい譯だね君！』と云つて彼の總金齒入りの燦たる口を開いて笑ふ。左の腕には紳士用オペラバツタと云つた様なハイカラな書類入

れを提げ、赤皮の長靴を穿つて居る。『官僚連と舷々相磨して進むと云ふ意味で己は石井忠は既に駄目故三越、白木屋等どしどし攻撃する考へた。今度で先づ先年の分は帳消しになつたからこれから取引を新に……』恐ろしいイタツラ者が現れたものである。

彼は警察側とどこ迄も太刀打ちする意氣込みである。〇〇氏は其前に市役所の某大官が居るのを知つてか座をはづして立つ、其後に腰掛けた男が又頗る付の變り者で風采は高等官何等と云ふ教育家らしく見えるのであるが、支那天津産甘栗をオーパーのポケットから出して一心に食ひ始めたものである。殻を破れば中から裸體になつたホク／＼した處が出る。『まだ焼き立てだな』と自分は思つた。其殻が一面に車内に散つてゆく誰も彼のダラシない風を見つめる者は無く皆横の方を向く。

其時に二人の土方風の勞働者が乗つて來た。一人の方が他方に向つて一昨夜來の出來事を語り聞かせて居る。『己と其男とは別に仲が悪いと云ふ譯ぢやないんだぜ、それなのにどうしたのか喧嘩したのや、負けたか勝つたかよう分りまへん、本田の電車道をゆき居たら誰かお前怪我して居るな、どしたんぢや、己が仇をうつてやるから行かう、お前誰にやられたのかとさくので悪い友達ぢやありやへんと云ふたが、可哀想ぢやと云つて縋帯して呉れたりしたのでそれと二人で又飲む、昨日も一日飲んで二日飲んでしまつた。今日は苦しうてな。己は好きで酒を呑みあせんせ、

氣がクサク／＼するでの、それで飲むのや、ほんまにの」と云つて聞かせて居る。見れば其類は破れ、頬はひき裂けて居る、膝が一番痛い云つて擦すつて居るが立派な體格であり堅實なる神經の所有者らしく見えるが氣がクサク／＼すると云ふ處を見れば彼も自分と同じ近代人の特質を備へて居る事が分る。途上所見は其様な事であつた。彼の家は浦江聖天様の附近にある。頭の極めて大きなブルドッグがいきなり吠えついたので、一時驚いたが其犬は人の足に噛み付く真似をした許りで奥の方に逃げ行つた。下の家は按摩を業として居るらしいが主人は盲者ではない。彼等は其家の二階借りをして居る。

上福島四丁目で生れた。「父は何を業として居たものか分りません、四つの時に亡くなりましたからね」母はよく裁縫の出来る人で多少の遺産もあり、彼が二十二歳になる迄幾分は親戚の厄介にもなつたが誰からも批難されぬ様に立派に育て、呉れたが彼の二十二の冬流行性感冒で亡くなつた。其頃彼はある會社に勤めて居たが彼自身も感冒で二日程床に就いたりしたので随分苦勞した。親族から來て手傳ひをして貰つたけれども費用は全部彼が負擔した。

其後二年大阪高等工業の夜學に通つて電氣科を卒業した。卒業後直に大阪電燈に入社した。以前約一年許り同じ會社に厄介になつた事もあつたが其時は本當の下役で給仕代理の様なものであつた。昨年十二月一日入社した許りであり、日給は僅に一圓六十錢である。

二階は四疊半に三疊で家賃は九圓である。近く聖天の傍らを通る泥川が流れて居るので恐ろしい濕地であるが二階に住む人は其點は關係がない。部屋の内は美しく整頓せられて居り、妻君も髪を近代的の女優鬘に結つて頗る氣持がよい。彼と彼女の二人暮しであるが此二三日遊びに來て居る彼女の妹が居る、今年十六で暢氣な性質で大聲あげて「苦しい、あゝ苦しい」と叫ぶ。妹君少し風ひき氣味で寢て居たのであるが頭が痛んだので突然にそう叫んだのである。實は苦しくも何も無く起きなほつて笑ひ崩れ「おゝビックリした永代さんが來られたのかと思つた」と云つて起上り寢卷の上に羽織を引きかけてバタ／＼と馳け出した段梯子を降りきつたか、きらぬかに又大聲をあげて「姉さん！コワイ此犬！」と云ふ先刻のブルが唸るのである、歸つて來てさて云ふことには「アイツ恐ろしくつて仕方が無い。しかしもう妾にはあまり吠えなくなつた。……あゝ頭が痛い。」一點の邪氣も無く思ふ存分に振舞ふ妹君である。姉さんも妹の無頓着なものには閉口の様子である。

内職はして居ない、近所の裁縫仕事をして居るがそれも斷れ／＼で本當の内職と云ふ意味にはなつて居ない。室内裝飾も立派なり、諸道具も整然と置かれてある處から見てとても一圓六十錢の日給で生活して居る人とは思はれない。昨年四月の結婚で其後は別に記載すべき程の家族的事項もない。

單純其ものゝ如き人である。勞働問題、社會問題と云つて騒ぐ人達の多い世に「退



いて自分の職に精を出すのが一番ではありませんかね」と云つて資本家の肩を持つでも無く、勞働者の言分が悪いと云ふ譯でも無く超越的態度を以つて働くこと云ふのである。庭球野球等に趣味を持つて居り、自分でも試みもし見物にも出掛ける。美術音楽等に對する趣味は無い旅行散歩等が好きである。將來も技術員として働く考である。(一、一八)

### 五番 電氣會社電氣部助手

二十五歳 家族二人

彼の家は土佐堀五丁目にある。未だ獨身で彼の兄と共に下宿屋の部屋二三を占めて萬事共同して居る。宮崎縣兒湯郡〇〇町の生れである。彼の故郷は宮崎縣も大隅に近く舊島津藩に屬する。彼の家は郷士であつた。維新後は農を家業として居る。父は五十七母は五十六で共に丈夫で居る。女一人に男五人の兄妹で彼は四男である。小學校を卒業してから暫く家事の手傳をしてゐたが三番目の兄が大阪に来て居たので十八の年に來阪した。兄の厄介になつて關西商工學校の電氣科を卒業した。高等工業の試験を受け度いとも思つたけれども學資が續かないので大正五年大阪電燈會社に入社した。關西商工は第七種と云ふ事になつて居る。其後年々試験を受けて今年は第二種の試験に及第した。第二種は高等工業早稻田理工科卒業程度の處である第一種は最高學府なる帝大工科其者と云ふ事になつて居る。第二種の試験は困

難であつた。豫備試験、本試験、口頭試験の三段に分れて居る。其中口頭試験は東京迄出て行つて受けるのである。然し口頭の方は主として實際問題であるから彼のように實際の問題に日常接して居る者に取つては少しも恐ろしくはなかつた。大電に勤めてから既に七年になる。助手であり現在の日給は二圓六十錢である月收は百圓内外になる。他の助手達は三圓以上の日給であるのに彼のみが此様に少ないのは彼が未だ獨身者だからである。

兄は近所の指物屋に勤めて居る。職工學校を出たのみで働いて居るので今では彼の方が出世した様な形である。六疊一間に賄附きで二十五圓と云ふ事になつて居る兄は下の廣い間を借りて細工の方を實地について研究して居る。此家は其構造が昔風の家で光線の採り方は悪く材木は度外れて太い便利は便利でも吹けば飛ぶ様な近頃建つ家と比べて見れば何處か取柄がある様にも思はれる。油繪が三つ四つ掛けてある。彼は繪が好きで繪の展覽會と聞けば必ず見に行く。其時に氣に入つたものを買つて來たものである。其他刷り物も悉く立派なもののみである。彼自身が描いたと云ふ水彩畫の靜物は物自體を畫面に叩きつけたと云ふ様な強味は無く何處か美化に苦心したと云ふ様な跡が見えて居る。それで「此繪等と云ふものは天才が無ければ出來るものではありませんからね」と云つて居る。彼の藝術は美化の藝術の域を出て居ない。此思想は直ちに彼の社會觀についても同様の觀察を下す事が出来る。

労働者の學問の無い點、無作法で慾張つて居る點等につきては口を極めて悪口を云ふ。彼の理想は純粹や粗朴ではない。雄大とか堂々とか立派とかと云ふ事である。極端なる差別的觀念を以て優勝劣敗の原理を「神よ地上に優勝劣敗の理を與へ給ひし事を謝す」と云ふ様な意味で大いに感謝して居るらしい。二種の試験に及第した事等も彼の差別的な見解が最も手傳つて居る。

二十五とは云へど三十前後に見へる。基督教並に日蓮宗を研究して居る。物の裏迄見貫く様な彼の性質に惚れて「己の方に來ないか、己の方に」と云つて互に彼を引張り合つて居る。日蓮宗は皇室中心主義であるのに對して基督教は「天の神が唯一の我等の禮拜す可きもの」としてある。彼には教理等問題ではない人を殺すに刀を用ひ様がピストルで撃たうが構はぬといふのである。由つて以て一方に雄視する事が出来るなら問題は無いのである。意氣昂り身長も五尺五六寸、體格堂々辯舌流るゝが如く昔なら一軍の將ともあらう人に見える。天賦の良い性質を持つて生れた人で霸氣強くも亦強い。

何れは宗教界に身を投ずる考へである。閑暇があれば讀書をする。大電の旅行には缺かさず出席して居る。運動ではテニスをやる。歌劇、活動寫眞等を見に行く事もある。労働運動は本來から云へば賛成で大正十年五月大電争議の場合にも最初は一般職工側と行動を共にして常に陣頭に立つて居たが「途中馬鹿らしくなつて來て

裏切り職工と云はれた方です」と云つて居る。彼から見れば無智な労働者等は共に齒するに足らないのである。(一一〇)

## 六 番 電燈會社機械部職工

三十八歳 家族二人

近頃は何處の派出所に行つても親切に道を教へて呉れる。自分よりも頭の低い人を見れば涙ぐましい感じになる。殊に巡查と云へば物の分らない空威張りをするものと思つて居たのが此頃は反對に自分達よりも丁寧になつて來た。今晚もそうであつた。或派出所の巡查は夕飯を半にして立つて道を教へてくれた。或派出所では美人を説諭して居たのを止めて慰懃極まる道の教へ方をして呉れた。近來巡查達の丁寧になつた事は喜ぶ可き現象である。彼の家は下福島にある。

石川縣河北郡〇〇村の人である。村は山間の寒村で米があまり穫れぬので養蠶を副業として居る。魚は濱でよく獲れるので村に運ぶ迄に少し古くはなるが一日に一度は喰べる習慣になつて居る。家は代々百姓をして居た。父は彼の二十五の時に亡くなつて居る。母は今年六十七で故郷に居る五人兄妹で男が二人。彼は次男である高等二年を卒業すると兄と共に家事の手傳をして居た。一時金澤のボンブ會社で働いて居た事もある。二十五歳の時將來の見込みが立たないので大阪に出て來た。恰も彼が大阪に着いた時父病氣との報を受け間もなく訃に接した。大阪では町工場を

廻り歩いて居た。大正七年大電に入つた。今は日給二圓八十錢である。

二階三疊二間の下六疊に二疊で月十五圓の家賃である。敷金は三十圓丈け入れてある。彼が此家に住んだのは四年前の事であつたが其後三回の値上げによつて殆ど倍額となつた。閑暇の利用としては散歩に寄席位なもので、娯樂としては將棋を打つ。相撲が好きで毎場所の東西相撲の取組番附等には非常な興味を持つて居る。

二階で手ミシンを動かす音がして居る。妻君がメリヤス地縫ひの内職をして居るのだ。奥の六疊には床がついて居り花が生けてある。室内があまりに明る立派なので「結構な御住居で」と讚辭を呈すれば「何時迄しても壁を塗り代へて呉れないので自分で塗りました左官が故郷の者なので土代と手間と云ふ約束で塗り替ひました。腕のある左官だと云ふ事です」其壁に釘を打ち込んで懐中時計を吊つて居るのは少し亂暴である。二十四歳の時に結婚して一子をあげたが間もなく亡くなつた。我々は「子供があつても養ふ事が出来ない様な有様ですから……姉の子が澤山ありますから一人連れて来ればよいのですが」結婚後二人とも特に記載すべき程の家族的事項もなかつた。

髯を蓄へて村役場邊に居る人達の様な中肉の赤ら顔の人である。應待は親切で充分に話して呉れる。本は讀まない。毎日新聞をとつて居る。將來とも機械の方をやる考へである。真宗で一年に數へる位東本願寺に參る。大電の爭議の時には嚴正中

立を標榜して爭議の解決せられる迄は會社にも組合にも顔を出さなかつた。注意深く我と一家を守つて世を送る人である。(一一二)

## 七 番 電燈會社機械部職工

三十三歳 家族二人

香川縣綾歌郡〇〇村の人である。舊丸龜藩に屬し千戸程の農村である。特産物として砂糖がある。家は代々百姓をして居た。父は彼の十七の時に亡くなつた。實母は三つの時に亡くなつてゐる。義母は今に達者で兄と一緒に居る。他は腹違ひの姉があるがそれは義母の連れたもので本當の兄弟は彼と兄との二人きりである。高等四年を卒業すると共に彼の義姉の嫁入り先きなる金澤へ行つた。姉の夫は金澤から金石に通ふ金石電氣鐵道會社に勤めて居た。十七の時から電車の乗務員として兄の勤めて居る會社で働いて二十四の年迄金澤に居た。金澤には汽車修繕會社があるので電鐵から其方に轉つて鐵工として働きもした。大阪に来てからは機械工として町工場をそれからそれへと移り歩いた。大電には大正八年に入社したものでまだ平職工です月収も九十圓内外である。

二階六疊に三疊、階下三疊二間に四疊半で二十四圓の家賃である二階を十圓で他人に貸してある。此家は古風の家ではあるが玄關は廣く南に小庭があつて光線の具合もよく立派な住宅である。小庭の向ふが小川になつて居て其向ふが安治川發電所

の塀になつて居る。家族は彼等と二つになる男の兒である。

妻君は子供があるから何も内職をしては居ない。「アー」とか「ハー」とか云ふ女の人らしい嘆聲が奥の間から洩れて来る妻君が風邪の氣味で寝て居るのである。近頃の風邪は質が頗る悪しく四十度位の熱が四日位続きそれで肺炎にならずにすんでも後は二週間も三週間もよくなるらない。彼女の風邪になつた原因はこうである。正月三日を利用して堺の實家に歸る爲め川口から船に乗つたが非常に寒いので船の隅に小さくなつて居た。實家に歸つたら急に熱が出て寝込んでしまつたのであつた。五日程したら少しよくなつた様なので「お正月早々病氣で寝たりして済みませんでした」と云つてお暇をして來たのであるが又船の中で風邪を引返したのであつた。結局病氣しに家に歸つた様なものである。「あきません。私は朝早うから出ねばなりませんし子供は母を離れ様としませんからね」と云ふ。又しても溜め息が洩れる。女の人の溜め息許り男の心を掻きむしるものは無い。「どうだ具合が悪いのか。」返事がない。裏の發電所から金と金を磨る様な騒音が聞える。子供の教育だけは充分させ度いとも思つて居るが何學校に入れるとも考へては居ない。

勞働する者の妻になつた程氣の毒な事は無い。彼は常にそう思つてゐる。閑暇の利用方法としては妻を連れて近郊を散歩したり旅行したりするのみである。「家内に満足を與へるのが一番の楽しみです」二十九の時に結婚して一子をあげたのみで火

事災難等には遇つた事が無い。

如何にも話し好きと見える人で漆の様に黒い髪を美しく分け座を正しくして喜色満面で話し続ける。爭議の當時は電業員組合に入つてゐました。何時も役員に選ばれてゐました。〇〇が支部長であつた時には萬事都合よくいつてゐましたが〇〇が代つてからは會社側を欺いたり職工側を偽つたりしたので兩方共立場が悪くなつて來ました。私は爭議に入ると共に役員は止めました。家の宗教は眞宗であるが彼は無宗教である。機械工は永らくやつて來た仕事であるから之を止めて何にかわらうと云ふ様な氣は無い。人懐かしがりて何から何迄行き届いた人である。(二、三)

## 八 番 電燈會社機械部職工

三十歳 家族三人

九條上の町の最も柄の悪い處に彼の家がある六尺とない道を間に一間二間の部屋に仕切つた長屋が並んで居る兩側の屋根から屋根に竿を渡して干し物をする様になつて居る。随分汚い。貧民窟と云ふのは此様な處を云ふのであらう。「ドン底生活者の群」とは此様な處に住む人々に捧ぐる名前であらう。然し乍ら其は形式から云つたもので其他にも實質的な貧民窟はある。ドン底生活者の群も居るのである。

彼の故郷は三重縣飯南郡〇〇村であるが最近に籍を移して本籍は四貫島にある。父は五歳の時に亡くなつた。母は六十八で今に達者である。〇〇村は普通一般の

農村で特産と云ふ様なものはない。高等科を卒業すると共に來阪して木型職を習つた。木型と云ふのは鑄物の型を作るについての必要品で木を指定の形に削る職である。男のみ四人の末子であるが次兄が大阪に來て居たので兄の家から勤め先きに通つた。勤め先きは石井鐵工所と云ふ鑄物會社であつた。當時は小さい個人の經營に係るものであつたが其後發展して今では三百萬圓の大會社となつた。日本紡機工業株式會社と云ふのが之である。兵役は歩兵として合格し津市の第五十一聯隊に入營した。軍隊に於ける成績は悪い方で眞面目に勤めぬいたに拘はらず除隊迄に僅かに一等卒となつたのみである。軍隊から歸つて大電に入つた月収は百圓に足らない。既に述べた通り彼の家は極めて柄の悪い處にある。玄關の間が四疊半、奥の間が六疊で家賃は九圓八十錢である。何十軒と云ふ長屋に水道は僅かに一個であり便所も共同便所である。一疊一圓にも當らないから安い様でもあるが實際は相當な家賃である周囲の状態は陰鬱と不潔の二字に盡きてゐる。

家族は彼等と四歳になる女兒で、女兒は少し行儀がよく無い。妻君は氣の利いた人と見え客と見て早速に御菓子を買つて來て薦める。此様な事は例もある事乍ら有難迷惑でやめて貰ひたいものだ。子供があるので妻君は内職をして居る暇が無い。六疊の間には立派な諸道具が並んでおり如何にも豊かな感じを與へる。入口の四疊半の間には稻荷様を祀つたものである。神棚に澤山の燈明をあげて餘程の信心家ら

しい。それで「私はそんなに深い信心ではありませんからよくは分りませんが」と云つてモグ／＼してゐるのを見ると之も一種の無宗教らしい。二三日前神戸で流行してゐる無言講と云ふ一種の怪教を信じた爲めに夫から蹴殺ろされた女がある。前夜撲たれて頭が痛むと云つて床の中に寝て居た妻を夫が足で蹴殺ろしたのである。死んで眞の無言に徹した譯だ。彼は「どうして仕うして私共には分りません。」と云つて遂に彼の信仰を打ち明けない。「私は何も知らない」と云ふ禪宗の坊主の様に白ツバクられてしまつて始末におえない。閑暇があれば旅行遠足等をする。伏見桃山の御陵に參拜してから稻荷様に參詣すれば何回參つても何時も新しい神様の御示めしを受けると云ふ。子供は是非に女學校丈けは卒業させるつもりと云ふ。二十六歳の時に結婚して女兒をあげたのみである。先年野田に居た時に盜難に遇つた事がある、泥棒は近所の者らしく二階住ひの彼の家に押入つて箆筒を開け二十二枚の着物を持つて行つた。裏が空地になつて居り電柱から屋根に上つて此始末に及んだものである。將來とも木型職をする考である。(一、二四)

### 九 番 電燈會社機械部職工

三十九歳 家族四人

彼の父は伊丹の人である。伊丹は灘と共に酒の名所である。銘酒は近頃灘に負けてしまつたが劍菱、白雪、一文字等が僅かに氣を吐いてゐる。其中劍菱は少し衰兆

がある。白雪は伊丹に本店はあるが灘でも魚崎でも醸造して居るから伊丹の地のものと云ふ事は出来ない。彼は此の六分農家で四分が酒屋関係者と云ふ伊丹の町で大きくなつた。彼の家は雜貨店であつた。疊にすれば百五六十疊も敷ける大きな家で家族から使用人迄入れ、ば十六七人が足りない大きな家であつた彼は其家の四人兄弟の長男に生れた。父の商賣上の失敗からして大阪に引越さねばならぬ様な事になつた。兵役は福知山聯隊に工兵として入隊した。日露の役には従軍して鐵嶺附近に轉戦した。硝煙彈雨の間を馳驅して充分の功を立てたのであつたけれども金鷄勳章と迄はゆかなかつた。明治三十九年兵から歸つて高野鐵道に勤める事となつた。當時の高野鐵道は汐見橋長野間で誠に微々たるものであつた。火夫をして居たが其後一時運轉の方もした。明治四十二年四月高野鐵道を罷めて神職となつた。もとゞ彼の家祖先は神職で彼の父も一時其方に關係したりした事がある。中之島の豊國神社で修業して京都の平野神社に勤める事となつた官幣大社であるから貰ひ物が頗る多く正月等には貰つた鯛が食ひきれない程あつた。神宮奉齋會で曆等の分配もした。大電に入社したのは大正五年の八月である。今は助手代理として二十人程の人を使つて居る。昨年五月の争議の時には部下の者をつれて罷業せぬ様にした。それは人と争ふ事は無益の事であると云ふ彼の信條から來て居る。現在の月収は百圓内外である。

二階六疊に四疊半、階下四疊半二間に三疊であるから勞働者の住宅としては廣過ぎる様でもあるが「狭いので困ります大阪の家は何故此様に狭く建てたものでせう」と云つて居る。伊丹の彼の家に比べて小さいと思ふのである。家賃は十八圓敷金は三十圓丈入れてある。

家族は彼等と女兒と他に弟の子が一人ある。父は今年一月十二日に亡くなつた。神職にあつた事もあり世話好きで好人物だつたので町内の誰彼からは常に立てられて居た。此處の下三番町には北中會と云ふのがある、之は町内の人達の親睦を計ると云ふ意味の會で現在の處七十餘名の會員がある。彼の父は其専務と云ふ事であつた此一月も北中會の新年會の事で奔走して居たが十二日の四時頃具合が悪いと云つて寝たなり死んでしまつた。腦溢血で亡くなつたのである。母は六十四で今に達者である。彼は父の後を繼いで北中會の専務になつた北中會は新年會忘年会の他に運動會もすれば其他種々の催しをするので其方の事務が仲々急がしい。其他彼は終美會の幹事をして居る終美會と云ふのは一種の旅行會で他にアルコホルを用ひ取り止めの無い氣焔をあげると云ふ様な意味をも持つて居る。弟達は東京邊に働きに出掛けて居るが何時歸つてもよい仕事だと云ふ。三十二の時に結婚した。どうしたものか一向子供が生れなかつたが昨年漸く女兒が生れた。彼の家庭は極めて圓滿である。久しく神職にあつて心身の鍛鍊をしたのと父から受けたよい血液の爲めに理屈は

云はないが心身共に圓滿な發達を遂げた人である。「そうです。神職の方では神様が常に宇宙を遊行してゐて人間の身體の何處かに無理があれば其邊に病氣をつける(御示しとして)」と云ふ様な事を申します。私杯も病氣になれば神様どうぞ悪う御座いましたから此處の處の御叱責を除去して下さいと云ふ様な事を願つたりしたものです。然しコチコチに神道に固つてしまつて病氣と云ふものは皆宇宙の遊行神がどつついたと考へる事はよくない事と思ひます。病氣は時が來れば自然によくなるものですから其様に考へずに放つて置け今に癒る位に考へる方がよいのです」と云つて誠に其様な事を云ふ人に似合しい顔をして居る。作らず飾らぬ面貌態度の所有者である。「私の先生は神道本局の〇〇部長です。京都での先生は修齋會の〇〇所長です」と云ふ。して見れば彼の先生は相應に力のある人達であらう。信者の中に彼の如く幼少の時から種々なる困難に遭遇して居乍ら暢々したそして能率のある人を見れば古神道の有難さを思はない譯にはゆかない。今は勞働をして居るが何時かは再び神職をする考である。中津の町にしては相當に賑かな道路に面してゐるから格子を取り除いて何か商賣を始めれば相應ゆけるのである。兩方やつてゆく考で目下計畫中である然し彼の本當の心は田舎に引込んで盆栽なり野菜なりを作つてゆつくりと暮し度いと云ふ考である。熱鬧の大阪は少し藥が効き過ぎる感がある。(二二六)

## 其五 勞働團體關係者

一番配

給

係

二十六歳 家族三人

船が毛馬の閘門を上つて新淀川に出るには水門を閉ちて水を溜め、一段二段と上つてゆく。それで時刻の来る迄は船は悉く控所で待つて居る。控所には各種の和船が並んでゐる。船には主人も女房も娘も子供も居る。所謂十月小春日和の午後の陽が惜しげも無くその光を投げてゐる。船の下では小さな魚族が嬉しげに躍つて居る。それを釣る爲め六、七人の人達が釣を垂れる。釣れてくるのは目高の大きくなつた様な魚で美人の指程もない。鯛はらば溶ける様な魚である。それを釣つてやはり食ふのであらう。食ふと云ふよりは釣る事自身に興味を持つのである。

船から陸に渡した長い橋板がある。それを傳つて女や子供も通る。コンクリートで固めた石垣の上にガンテキを置いて何處かで拾ひ集めたコークスの殻を焚き、今や一人の女房が何かを煮やうとして居るのである。たしか十六鍋と覺しき鐵鍋をかけ水を注ぐと見る間に湯が沸きる。見よ側にあつた山の様な菜が煮物であつたのである。其の菜が片端から萎れてゆく。さしにも多量の菜も悉く鍋の中に萎れてしまふ。

彼女は傍で魚を釣つて居る男に話しかける。「兄さんは何處ですか」「私は大阪です」「大阪云つた處で他所の者が多いですね、皆寄り集りですね。」向ふの船の上では



十六七の少女が米を磨ぎ出した。子供が多勢平氣で舷で遊んで居る。川の向ふは城北村でボブラの並木が堤防に並んで居る吾々は今開門の上に立てゐる。水が多くなれば木材を沈めて水を堰く仕掛けで其邊は自然に對して人間の示めした雄々しき抵抗を見に来る人達の爲めに小公園の様に開放してある。淀川の瀬に棲む魚を料理する家もあつて風景がよい。

彼の家は毛馬の開門から數町離れたローヤル刷子工場の附近にある。彼は〇〇〇組合の組合長である。戸口には日本勞働總同盟の支部、共益社購買組合出張所と云ふ風に澤山の看板を並べて盛んな事である。彼は共益社の得意取と配給とを兼ねて働いて居る。

共益社の報酬は少ない。事務員で最高七十圓配給の方は五十圓平均である。今の處北區が彼の受持で活動して居るが得意を取るにしても購買組合の何物なるかゝら説明して掛らなければならぬので、全く苦戦である。妻君が子供を連れて市岡の親類に行つて居り、彼は未だ就業時間中なので家は鍵のかゝつた儘いつ迄たつても誰も歸らない。

彼の故郷は岡山縣和氣郡〇〇村である。彼が三つ許りの時に。彼の父は家の事一切を弟に委せて大阪に出て来て、本町の木綿問屋に奉公して居つたが何か大望を懷いて大阪に出て来たものらしくあつたが彼の十五の年に亡くなつたので父の望の何物

であつたかは彼にはよく理解出来ずに済んだ。唯其内容が普通一般に云ふ金を貯へるとか云ふ様な意味のものでなく、何かしら自分の識見を以つて世を救ひ度いとか、物の見方を誰も彼も自分の様にしてしまひたいとか云ふ宗教的の意味を含んだものであつた様である。

何せ彼には其事がよく分らなかつたが父を一種神様の様なものに考へて居た事であつた。彼が八才の時に彼の母が亡くなつて居る。彼は其後病んで父の處に居つても、行き届かないので故郷の叔父さんの處で治療して居た。當時はお祖父さんもお祖母さんも生きて居たので故郷では皆から可愛がられた。

學校は堀江の尋常小學校を卒業したのみで。父が亡くなつてからは已むを得ず就職して刷子工となつた。兄妹としては姉が一人ある許りでその姉は故郷で嫁入つて居る。

最初働いたのは福島の大島刷子製造所と云ふ所であつた。「其後四つ五つ轉はりました。誰でもさうです」と云つて小兒の様に愛嬌のある糸切齒を見せた。最後に働いて居たのは西谷と云ふ刷子工場であつた。此工場では彼に對して特別に待遇がよかつたので全く働き心地のよい工場であつた。

使用人としては僅かに十五人居た許りである。機械工場を丈け持つて居るにしては十五人は普通である。機械部のみにして見れば板部にした處が十五人位なもので

あらう。居心地のよい工場であつたが此不景氣で閉鎖してしまつた。刷子は何處の工場も今は悲境にある。ローヤル刷子も大分整理して居る。「刷子にバクテリアですつてそれは事實ではなく競争者の流言でせう。實際日本製の刷子は外國の刷子に比べるゝ粗悪ですから其様な結果になるのです。もつと職工をして仕事に興味を持たせて働かす様に考へて來るならば決して粗製濫造と云ふ様な事にはなりません」と側に居た刷子工組合の幹部と思はれる人が理屈を捏ね出した。

資本家が仕事に興味を持たせて働かせること云ふ方針は是非にとつて貰はねばならぬのであるが粗製濫造は職工が資本家は職工によつて儲けると云ふ事を思つて居るので其結果當然其様になつて來ると云ふのには議論に大分ギャツプがある。寧ろ現代の産業組織が消費の爲めの生産では無く賣つて利益を得るための生産であるが爲め最も多く利益を得る事を主眼とする様になるからである。

消費の場合に至つては如何に其品物が都合の悪いものであらうが消費は間接であり營利が直接目的である。其故當然最大の利益を收めんとするには粗製濫造が宜しく信用がなくなり會社に利益がなくなつたら止めてしまへば結局巨利を得るに至るので生産の直接目的が營利にある社會組織では同業組合等で如何に検査をしても到底粗製濫造を防ぐ事は出來ないのである。此原理を度外視して妙な理屈を捏ねて一座を説服せんとする論客の名を○○君と云ふ。假りに○○君の議論を補なつて完全

ならしむるとしたら資本家は労働者を使ふ事を主眼として居るが故大いに使ふ。使ひぬいて労働者が疲勞困憊する事を意としない。其故製品が自ら悪くなるとでも云ふのであらうがそれにした處で大體資本家は労働者を使ふ事を主眼とはして居ないので此議論は到底屁理屈の範圍を越える事が出來ないであらう。

彼は此理屈をこね其他二、三の來客に對して此二階は「我等の二階なれば碁、將棋は勿論腕相撲、座り相撲、其他何でも賭博を除く一切の事をしてよいのである」と云ふ様な説法をなし「雜誌や本は何でもあります。持つて行つてお読み何なりと」と云つて座敷の一隅に積まれた十數冊の本の小山を指すのである。○○君の彼を批評した言葉に「彼はまだ若いですが忙がしい身です。彼は宗教上の立場に立つて社會を改造しやうとして居ます。年こそ若けれ總ての行り方が巧みです」とある。

彼は西谷の工場を罷めてから行くべき工場も無し共益社に働く事となつた。西谷では特別待遇であつたので解雇の際手當等を要求する氣にはなれなかつた。共益社に入つてからは上述の如くである。

彼は刷子工組合の事務所に住るから家賃等の心配は要ら無い。刷子工組合は二階四疊半に二疊廊下を隔て、三疊下四疊半二間に二疊と云ふ間取で階上は事務室階下は住居に當てられて居る。大きな玄關があり二疊が玄關の間で其處から直接二階に

上る事が出来る様になつて居る。路次の行止りにあつて新築で理想的な事務所である。家賃は月卅圓である。此邊の土地は非常に乾燥してゐる方である。

彼の家族は妻君と子供二人で五つに三つ。上が女で下が男である。妻君は何も仕事をしては居ない。一時刷子の方をして居た事もあるが子供が二人になつてから其様に働く暇はない。家計の方は共益社からの五十圓でやつてゆけない事もないが其他に二三十圓位の収入がある。これは賀川氏や村島氏から原稿料だと云つて送つて来るものでパンフレットの編輯等に手傳ふからである。それは私用には使はず公の事に用ふる事として居る。

「旅行なんかは好きです。よくお染久松の墓などを訪ねる事がありません」と云つて例の笑ひ方をする。彼は幼い頃から文藝に興味を持つて居た。日本の文學史に現はれて居る竹取物語だとか源氏物語だとか云ふものは悉く讀んだ。其意味で近松物等も讀んだのである。従つて休暇等には是等の遺跡を訪ふ氣にもなる。芝居も活動寫真も共に好きである。活動寫真を好きだと云ふのは高尚な趣味を持つて居る彼にしては一の矛盾とも見られる。「場面がいゝではありませんか。西洋の婦人が景色のよい處を悠々と歩いて居る處だとか西洋人の衣食住の具合がよく分る點等唯そのシーンを見るのです。全体としては人の穴許り探したい私の眼から見れば缺點だらけのフィルム許りです」音樂も美術も共に好きである。子供の教育については出来る

丈けと許りで未だ何も考へては居ない。

結婚したのは彼の廿一才の時であつた。故郷の叔父が「彼が亡くなつたからには一刻も早く妻を娶つた方が宜からう」と云ふので徴兵が不合格と知れた時に早速貰つた。徴兵を免れた原因は彼の極度な近眼にあつた。其後二人の子供を擧げたのみで一族は悉く健康である。階下では彼女と二人の子供が夕の膳に向つて居る。〇〇君は粗製濫造の原因に關する氣焔をあげた後一向元氣は無い。晝の疲れが出たのであらう。小さな机の上に這つて伊勢鰯が兩手を擴げて魚屋の店頭に客を待つ時の様にしてスヤ／＼と寝て居る。

座にはもう一人。年格好三十五六の同人が居る。「あなた労働問題を研究して居る人ですか。一體結局ヤリ／＼の處如何様になればよいのですか」「私は勿論私個人としての考ですが。各生活單位が圓滿完全なる生活を營む様になれば自然と労働問題も社會問題も解決出来る事と思ひますね。其意味は一の工場について云へば資本金も労働者共に一体となつて。則ち戦時英國に發達した工場委員會制度を徹底せしめて資本金も労働者も一樣に利益の分配に與かると云ふ様にして。共同して工場を經營するやうにして行けばよいのです。其事は何も横斷組合をして存在の餘地無からしむるものではありません。市役所等だつて同じです。一の生活單位である以上は市長様の年俸のみ多くて下々が瀕死の状態であつては如何に市政が立派だと云つた處

で一の生活單位として觀察する時は立派とは云へません。家族に見ても主人が酒を飲んで威張る。子供は胎毒でグチャ／＼になつて居る。主婦は萎び果てゝ居る様では悲しい次第で。人間は一の生活團體に屬する以上其團體の主腦者によつて生活の保證を受くる當然の利益を持たなかつたなら其生活團體は咀はるべき團體です」此議論は人々を感動せしむる事は出来なかつた。彼の男は矢繼ぎ早やに「委員會制度はあれは失敗だつた。何で今の世に資本家と共同して一の工場を立派にやつて行くなどが出来るものかね。資本家は我々を犬馬の類と見て居るのですよ。温情主義によつて豆腐のオカラを食はして置けばよいと云ふ思想の所持者と握手しやうとした愚なる計劃は見事に失敗した。全く彼等の爲めに利用せられて尊い我等の首は益々彼等の土足によつて……」と云つて吼え立てるので。茫然として彼の朦朧たる醉顔を見守るより他に仕方がないのである。

それで結局團體交渉權で無ければならぬと云ふ主張である。「處で神戸のリバーブラザー商會では日本労働總同盟を以つて團體交渉權の主體と認めた。今後は皆團體交渉權で行く可し」と昂然たる意氣を示めし。扱て一杯づゝを客に薦める。

彼はニコ／＼して人々の話を聞いて居り「私は總て御調査の對照となるにしては變則な者でして早く妻子を持つた事杯も其れです……」なんかと云つて人を笑はせ。俄に居直つて「〇〇〇は貴族的不良少年少女の巢になつて居ますね。何時かは自分

等のものとして利用出来るやうに……貸しません。貸さぬ理由はない天神橋筋の貧民共と云へば我々でせう。我々が利用出来んなんで」と云つて悲憤を始める。

彼は朝日新聞を讀んでゐる。毎日と比べて思ひきつて書いてあると云ふ。天理教並基督教の説教を聴きに行く。別段に宗教信者ではないが。同志からは唯心論者として宗教家の様に云はれて居る。其意味は彼の意見は宇宙の本體は意志で。總ての生命は永劫に完成を求めて努力して居る。障害は生命完成の條件である。抵抗によつて我々の魂の躍進を見る。我々は總ての魂が完成する事の出来る様な社會を出現する必要がある。と云ふのであつて彼は労働運動をする人を見るよりは社會革新の運動家である。「過去の總ては宜しかつたが、よりよき社會を創造せねばならぬ」と云ふ彼の口吻にはどうしても宗教家の様な處がある。然し生命の本質力の本源。靈魂とは何ぞ、自己とは何ぞと云ふ様な生々した本質問題については徹底的に突き進んで居ない。センチメンタリズムの赴くにまかせて清く美しく此世を歩む美しい人である。尊敬して居るのは賀川豊彦氏と西尾末廣氏とである。(一、二)

## 二 一番 消費組合事務員 三十三歳 家族三人

彼は〇〇社で夜の十時頃迄仕事する爲め十時頃でなければ歸らない。家は妻君と五つになる男の兒とで淋しく暮して居る。第一日曜と第三日曜とは休みであるが。

彼は労働者のお日様を開展し出さうとする労働運動家であるから。雨が降るとか風が吹くと云ふ様な呑気な事を云つて遊ぶ譯にはいかない。妻君は背の高い。品のあつた人である。「宅は何時も十時、十一時にならなければ歸りませんからお待ちを願ひしても……造船労働組合は慥か向ふの赤い火のついて居る處だと思つて居ます。何も分からなかつたのですが此前宅が拘引された時に方々歩きましたので少しは分りました。本部は西野田にある様に聞いて居ます」と云ふ。

此春川崎造船所の争議に際して演説したのが禍で六月二十五日から一箇月間禁錮せられたのである。治安警察法に觸れたのであつた。演説の趣旨は暴力の肯定で「資本家は彼の暴力により不斷の驅使と迫害を日課として居る。彼等の爲めに屠られた幾萬の魂の爲めに。現在我等が受けて居る憤ひ得ざる辱しめを報ゆる爲め○○○○○○○○○○其結果？知れた事だ。○○○○○○○○○○其處に男兒の面目があるんだ。諸君……」と云つて我乍ら調子乗つた演説したのであつたが演説は中止。彼は檢束となつた。後それで妻君が方々廻つて夫の釋放を奔走して歩いたものであらう。此様な事に想到した時は何にもかまはず念佛をとるゝのが一番よい。さる程に三泉市場の造船労働組合に着いたのである。

事務所は市場の中程にあり。東向で或家の二階を借りて居る。四疊半二間に三疊二十圓の家賃であるが一番奥の四疊半を五圓で山野氏に貸してある。○○氏は藤永

田造船所に出て居る。刺を通じて談じたのであつた。藤永田は職工のための設備が大變に悪く最初は二千人からの職工の爲めに僅か一箇の便所があるのみであつた。其後職工自身が作つたのと社員の便所を占領したので僅かに用を便して居るので。大便が汎濫して煉瓦を二箇持つてやつたりして居た。と云ふ様な事。鑄物工場であつて見れば煤が多く風は自由に吹き込むので食事の時は飯が食ふ端から煤で黒くなると云ふ様な事。先達ての争議の時に檢束された者が多かつた理由は皆朝の二時頃から辨當を作つて來る人達なので「今日は休業だから皆歸れ歸つて呉れ」と居つたに對して「何故休業か其理由を説明しない間は動かない」と何も知らずに頑張つた連中が皆連れて行かれたのだと云ふ。「警察の方では門の處に斯くも多數集つて理由を説明せよと云ふのは不穩だ」と云ふのであつた。これは明かに會社の方で前日位に多少説明して置かなかつたのが悪かつたのである。其他彼は藤永田が不正極まる仕打ちをするものである事を説明し。この度新に要求條件を提出したけれども委員會其物は國粹會の者が多いが爲め都合が悪かつた事等を話すのであつた。

○○だの○○だのと云ふ者の乾分は皆資本家の爲めにビストル短刀等を持つて不穩な事を云ふものを取締つたと云ふ事。それに國粹會員の云ふ事には不合理な事が多く「諸君は日本の國體を汚がすのか。工場の設備を改めるのは何故か。工場の設備等をよくしたとて病氣は外部で傳染したら如何する」と云ふ様な事を云ふなんか

彼等は如何にも言ふべきかを知らない徒輩だと云ふ事。其他會社の秘密——其秘密を發表すれば藤永田が存在の餘地の無い様な重大なる秘密——の鍵も握つて居ればいづれは一争議持ち出さなければならぬと云ふ様な事も居つて居たのである。事實藤永田が職工の爲めにしてある設備は不完全なものであらうと思はれる。

座に居た築港の市港灣部新屬工場に居ると云ふ他の組合員は攻撃の鋒先を市役所に轉じて。市役所の悪い事について縷々として陳べ立てるのである。市營住宅はコンミツションの如何により入れるか。入れないか、決定せられるとか。梅田築港直通の電車が運轉さればよいとか。築港の何處かには船の修繕に十分使へる板を山の様に残んで何故早く腐らないかと云つて係員が閉口して居るなど、云つた。が之等は悉く理由のあることであつて殊にコンミツション云々は全然無根である。彼は二回も市營住宅に申込んだのだけれども資格が無かつた爲めに當選出来なかつたので人の風評を鷄呑みにして斯くも悪口を云ふものである。要するに彼の屬して居る造船労働組合は其意氣中々盛んである。

彼の故郷は高知縣香美郡○○村である。漁業七分農業三分と云ふ割合で戸數は千戸もあらうか。米は二度獲れる。士族で維新前は浦戸に居たのであるが父の代になつてから伊勢に移り。長く警察官をして居た。

彼は伊勢で生れて居る。其後一家は再び土佐に歸つて農業に従事して居た。父は

彼の二歳の時に亡くなつた。母方の親類が皆富裕に暮して居るので。彼が大きくなるについては別にさしたる苦勞も無かつた。中學校の二年迄行つて止めたのであるが。家庭の都合上止むを得なかつたのである。それは彼の通つて居た中學校は南海中學と云ふ軍人志願の者の入る中學校で最初の程は彼も是非軍人にならうと思つて勉強して居たが身長も足らず。軍人には不適當であらうと云ふ人が多かつたのでそれ等の理由も手傳つて中學校は二年修業で止めた。

彼の親類には軍人で少佐だの。大佐だの。と云ふ高官になつて居る人がある。中學校を退學してからも母の膝下にあつて家事の手傳、親類の仕事等をして居た。兄弟としては兄があつたけれども日露戦争の時に初瀬の乗組員として戦死して居る。

大阪に出て來たのは明治四十三年であるから。彼は十四、五年前の事である。母は大正二年に故郷で亡くなつた。

神戸の商家に店員として働いたのが振り出しで。其店は獨逸人の經營して居るイハイ商會と云ふ店であつた。今は解散してない。土佐の新聞の通信員の様な事をして居た事もある。郵便局の集配人もやつた。大正七年に豊田織機製造所に入り。九年八月止めて創立當時の○○社に入社した。其後藤永田鐵工所に職工をして居た事もあつた。争議には關係しなかつた。それと云ふのは川崎の事件で入獄中であつたが爲め彼の所謂「不幸にして參戦する事が出来なかつた」のである。

彼の家は平家で四疊半二疊の二間である。土地は濕る一方で疊裏等は眞白に微びて居る。其爲めか年には一度必ず彼は脚氣を病む。其他五つになる彼の子に俗に云ふ飛火が時々出来る。醫者から聞けばこれも皆濕氣の多い爲ださうである。○〇社の事務をとる報酬としては五十圓丈けである。朝の六時から夜の十時迄の就業で今は少ない報酬ではあるが其内盛んになれば随時多くの報酬を貰ふ様になるので餘剰を驅逐し○〇社を中心として一の新社會を建設すると云ふ意氣で皆死物狂ひになつて働いて居る。

○〇社に働いて居る人は配給の方をして居る人も。事務をこつて居る人も能率の上にはさしたる違ひの無い人達である。配給をして居る人でも事務をこらせば結構事務をもとる。それ故規定の給料等も差が少なく。○〇總理を始めとして熱心に働いて居る。

第一日曜と第三日曜とは休業する事になつて居るが其日とて午前中のみは休み午後からは事務の整理と云ふ名義で集まる事になつて居る。「居心地のよい新社會」「働き心地のよい新社會」と云ふのが彼等の標語である。「死ぬ程働いてもよいがベテンの無い組織の下で心よく働きたい」とは彼等の念願である。而して事實彼等の團體である○〇社は儘に働き心地のよい團體で世間の會社とか官公署とかに見られぬ美風が現はれて居る。

休日には妻子をつれて郊外に散歩する。それ以外に樂は無い。「三百六十五日朝早くから夜の十時、十一時迄働く者を夫とした彼の女は不幸である」彼はさう思ふ。そして少しでも慰めてやらうと思ふのである。「夏になれば薄い着物を着て白粉をつけて夕の散歩をする。春は花、秋は紅葉と皆美しく化粧して居る女の人達彼等を見て御前は何と思ふか」と問へば彼の女は「何ともありません」とこゝろ答へる。然し女である。自己表現方法がある範圍に制限せられて居るので女は是非に美しい着物でも着なければ具合が悪い。又彼にしても着せたい事も山々なのであるが美しい着物を着せる處ではなく前述の様に自分で赤く美しい着物を着て彼の女に迄見せる事がある。それで妻君に對しては常に氣の毒と云ふ心を持つて居る。子女の教育としては男の兒が生れた月から毎月二圓宛貯金して居る。此金が如何程になるものか。其金で彼の後繼者を如何なる程度迄教育する事が出来るかは今後其場合になつてからでなければ分らぬ。二十八歳に結婚して今日に至る迄一子をあげたのみで他には何等の出來事も無かつた。勞働争議で名聲をあげたり憂き目を見たりしたのみである。勞働運動には非常に興味を持つて居る。一時は暴力の肯定者として世間からは恐れられ。可なり名聲もあつたが近頃よく考へて見るのに今日迄の自分の述べ來つた意見が間違つて居る様にも考へられ出したのでと兩手で頭をかゝへ「暫く考へさせて呉れ。己はよく分からなくなつて來た様だ」と云ひ出したので皆は「野郎軟化し

たな」と云ふて居る。彼にしては徹底的に考へ抜いて然る後本當の見解を持つて再び労働界に臨みたいと思つて居るのである。

事實本當に労働者の進路を何等の疑ひ無く指示するものは居まい。大綱ならば彼とてもよく分つて居る。労働者も人間である以上愛したい。着たい飲みたい。食いたい。現在の制度を改めて一様に文化に浴する様にさせるのだ。資本家制度の下で労働者資本家が協調して行くと云ふ事は絶対に出来まい。過去に於ても出来た事もなし。將來も出来ないであらう。「彼位の事なら分つて居ります」と云ふ。彼は今の處先づ煩悶期にあると云ふ形である。勞資の間をゴマかすにしては工場委員會が一番よいと云ふ意見で労働者の無自覺に對しては痛く憂へて居る。

新聞は〇〇社事務所に備へてある朝日毎日等を讀んで居る。別に將來の希望と云ふ様なものは無く今の處一意専心此處の消費組合運動を助けて奮闘して居る。酒も貰ものまない。確信のある人が出て今の世に資本家なり労働者なり各階級の人間に對して歩む可き眞の道を教へて呉れないものであらうかと思つて居る。(二九)

### 三番 消費組合擴張係

三十二歳 家族四人

彼の本籍は香川県木多郡〇〇村である。両親共健在で父は六十三、母は五十七家業の農業に精を出して居る。彼は五人兄弟の長男であるが次男が身体も弱く内氣

で他家に養子に行つても歸つて来る様な始末で所詮は一人立ちして奮闘する事が出来まいと思つたので家は其弟に譲つて大正六年に三男である彼の弟と共に大阪に出て來た。學校は高等卒業である。相澤造船所に二年半程居て藤永田に入つた。今春の争議では實行委員として一、二回も争議の矢面に立つた人である。六月二十八日七百餘名の入達と共に解雇せられて浪人の己むなきに至り其後は造船工組合の常務員として事務をとり月給五十五圓を貰つて居る。十月十日〇〇社の擴張員として入社すると同時に造船工組合の報酬の方は辭退してしまつたが尙以前と同じ様に事務をとつて居るので無報酬は氣の毒だからと云ふ幹事會の決議で電車賃と云ふ名義で十圓宛を貰ひ受けることになつた。

凡て〇〇社の配給擴張等をして居る人達は資本家達側のブラックリストに載つた人達で何處の會社に行つても雇つて貰ふことの出来ない人達である。皆労働條件を改善せよ目覺めよ團結せよとか云ふ様な事を唱出す人達なので資本家の立場としてはまかり間違つて雇ひ入れでもしやうものなら此上無い危険な人物で大阪ではとても職につくことは出来ないものであつて世の中からは浪人すべく餘儀せられ頼るべき知己も無い有様である。幸に〇〇社と云ふ様な所があつて。資本經濟組織の間に、僅か乍ら膝を割り込んで反抗を續けて居る次第であるが彼も其一人として喜んで働いて居る。謙遜で眞面目で「如何にかして愛に満たされた氣持のよい世の中にした



いものだと思ひます」等と云つてはしきりに赤くなつた―多分結膜炎らしい―大きな眼を拭いて居る。そして五十圓の報酬を以て妻君と三人の子供を養はねばならぬのである。

家は西區の市岡にあつて四疊半の二階に下が同じく四疊半の二間きりである。二階には先達迄弟が住んで居た。弟は彼よりも前から藤永田に働いて居たが争議の時には兄と共に交渉委員として立つたので兄と同時に三十餘日の解雇手當を支給せられて出されたのである。弟は妻君を養ふことが出来なくなつたため一時親元に歸して自分は矢張り〇〇社に入り今は其方で起臥して居る。新聞は事務室にあるものを見て居り新しい本は何でも讀む。家の宗教は一向宗と云ふ事になつて居るが神や佛を敬する氣にはなれない。唯々清く暮らす事を心掛けて居る。酒も葷ものまぬ。趣味として村に居た時青年團で撃劍等をした事がある。

日常自分の周圍に愛を以て働く完全なる團體を作り出す事を考へて居るといふ時の彼の容貌は實に正しく音聲は悲痛であつた。「〇〇社も以前は電話で米等を送つて呉れと云つて來ると自分の受け持ちでないからと云つて受け持ちの人が歸つて來る迄は抛つて置く様な風でしたが、今では私が行きませう、私がと云つて競争です」といふて居る。(一、三)

#### 四番 消費組合擴張員

三十四歳 家族四人

島根縣大原郡〇〇町が彼の出生地である。故郷で尋常科を卒業してから松江に出て私立修道館と云ふのに入学した。中學程度の學校で私塾の様なものであつたが中途で退學した。五人兄弟の四番目で次男である。大正三年に軍隊を出てから大阪に來たのであつた。軍隊では「一等卒になるには大分苦勞しました。何故と云つたつて命令に従はないのです」と云つてニコ／＼して居る。トロツキ式に髪を掻きあげ黒いセルロイドの縁の眼鏡を掛けたので全く労働運動家らしく見える。「國家存立の目的は所有を奨励し正しき生活をする事を奨励して居ないが常に所有者を保護して居ります。此事が同時に資本家保護の意味にもなつて來ます。「正義」は立法上行政上常に「所有」の爲めに負けて居ます。我々正義を求むる者は何時も所有を求むる者の爲めには勝てません。其れは我々の正義を求むる事が國家存立の根本義に歸るからです。此様な意味の國家は……と云つて國家が所有奨励を重きを置く事を悲憤する。「ストライキ手傳業」と云つて人の顔をのぞいたり多少冗談をも云ふ人である。大阪に來てから京町堀の銃砲店で店員をして居た事がある。櫻島鐵工所、藤永田村尾造船所、新田造船所、其他にも鐵工所、造船所等を歩き廻つたけれど是等は「私

が本氣になつて資本家側と交渉をした工場です」と云つて笑ふ。

彼の家は築港八幡屋町にある。電車通りから入った許りの處にあり立派な堂々たる新建の家である。二階は六疊に四疊半下は四疊半二間に三疊である。家族は妻君の両親と彼等夫婦とである。大體此家は彼女の家の家であつて父親は區役所に通つて居る。「區役所の報酬は安いですね。砂を……乞食と同じで三日すれば〇〇議員は止められぬと云ふ。大きな經濟故其様な事もありませう。砂を食つて居るやら石を呑んで居るやら」と云つて大きな誤解を發表する。以上の四人家族で未だ子供はない。妻君は別に内職と云ふ様なものはして居ないが近所から頼まれて縫物等をする事がある。彼の報酬は五十圓である。休日でも休まない。午前は造船工組合で事務を整理し、午後は〇〇社の方に顔を出す。結婚したのは三十一歳の時であつた。

性格並思想の傾向は大體叙上の様な次第であるが彼は労働組合運動も、今の儘で進めば行き詰まるであらうと觀察するので一時此處の消費組合運動を助けて居る。組合運動が行き詰る。と云ふ意味は英國の如く如何に強大なる労働團體の力を以て資本家に突貫して罷工等をした處で資本家並官憲は巧みに其鋒先をあしらつて一時は労働者に負けた様な顔をして「まあ静かにく、敗れたく」と云つてるが労働者が歎聲をあげて就業すると俄然居直つてビシ／＼絞めつけるので要するに労働者が現在の組合運動を繰り返して獲る處は疲勞と困憊とより無いのではないかと云ふ疑問が頭を支配して居るのである。「組合は修養の方法としては他にあるが飯が食へな

いのに徐ろに修養でもあるまい」と云つて彼は組合運動の効果を疑ひ出したのである。然し社會主義に走る考へもなく優しく消費組合運動に留つて居るのである。其は喫はない。酒は少々飲む。(二一、二四)

### 五番 労働組合書記

三十九歳 家族六人

彼は東區の生れで長男である。父は今年正月流行性感冒で亡くなつた。母は七十二歳今に達者で働いて居る。家計が豊かで無かつたので學校は尋常四年迄行つた丈である。十一歳から職業に就いて町の工場を歩いて居た。十八の時には東京に出て芝の山越と云ふ鐵工場で働いて居た。東京には前後を通じて四年程居たが其間にも大分方々變つて歩いて居る。大阪へ歸つてからは砲兵工廠で働いた。其處で作業中誤つて眼を害ふたのであつた。が之が彼をして労働運動家たらしめた動機である。治療に要した費用等は皆工廠の方から出して呉れたし手當として百日分を支給して貰つたのだから當時としては破格の待遇であつたが。片眼を失明してからは何か氣が變になつて、見る事聞く事が悉く悲しくなつたのである。加ふるに工廠も一時的には手當を出したけれども其後の待遇は彼の負傷が何等作業に支障の無い程度であつたに拘はらず全くの不具者として取扱ふので彼は怒つて工廠を飛び出してしまつた。伸銅所は當時未だ體格検査が無かつたので、義眼の彼も容易に雇入れられたが

伸銅所に入つてからの彼は工廠に居た時代とは全然反對になつて積極的に積極的に出る様になつた。伸銅所には全部で七年勤めた。〇〇會の成立したのは大正八年十月盛んに罷業のあつた頃で、創立者は彼と〇〇、〇〇の三氏であつた。〇〇會が漸次大きくなつて來るにつれて伸銅所から睨まれ、懸て解雇せられたのである。九年五月彼が臆首になつてから〇〇會は其反動として俄に大きくなつた。其後彼は〇〇會事務員として働く事となり。日本の勞働者は先づ團結せなければと云ふ意味で〇〇會を友愛會に加盟せしめた。

彼の家は〇〇會の事務所をも兼ねて居る。安治川發電所の裏で彼の家の前を通る路次の突き當りは發電所の塀になつて居り恐ろしい程大きな煙突が其向ふの方に見えて居る。二階は五疊に二疊で、組合事務所に充てゝある、勞働組合の事務所らしい種々の道具があり、勞働問題社會問題に關係した本が並べられ壁には大和繪であらうが美人が朝目が醒めて床の上に身を起し髪を掻きあげて居る處の刷り物ではあるが掛けられて居る。彼は藝術に對しても一塵の識見を持つて居るのである。自分で描ける譯ではないが天平時代推古時代の佛教を背景として發達した日本の古美術に對しては特に趣味がある。其間の藝術品を見て作者の心境を窺ふ事が出来るならば身は〇〇會理事であれど其儘運慶であり鳥佛師であると云ふ意見で藝術品に對しては頭を下げる。彼は一種の偶像崇拜者と云ふ事が出来る。其れで日本では大和藥

師寺金堂の本尊が一番尊いと云ふ様な事を云ひ出した。其外俳句に對しても趣味を持つて居り、未だ此様に忙しくなかつた時には句會を作つて其俳號を四溜と稱し甲の家に集つたり乙の家に寄つたりして盛んに句を作つたものである。四溜と云ふ意味は以前彼の住つた家が想像を許さない程複雑した路次に面して居り十文字の道をどつちの方向へ歩んでも行き止つたと云ふので四方閉塞と云ふ意味で四溜であること云ふ。『此頃は少し忙しうございます。友人が死んだので其遺稿を編輯して居ますので』と云つて俳句の方には可なり自信があるものゝ如くである。

酒れ池の泥に魚栖み寒に入る。

霞吹き残るあかりに枯木かな。

波がしら見えそめ鴨はたちにつけり。

あきらめのけふも冬木の中に栖み。

寒鮒の子に鴨太りまないに。

等の作がある。いづれも立派な句である。寒鮒や枯木の事許り作つて居る様でもあるがこれは一月二月頃の句會でものした句集から抜いたので其様な事になつた。階下が彼の住居に宛てられて居る。二疊二間六疊である。子供が多いので妻君は何も内職はして居ない。彼の結婚生活は複雑を極めたものであつた。今の妻君とは一昨年結婚して二つになる女兒をあげて居る。先妻の子が二人長男が十七長女が十三で

ある。最初に結婚したのは二十二歳の時であつた。

彼は労働運動家で社會に對する不平は數限り無くある。戸外をチリン／＼と號外賣が歩く（件の號外には太平洋會議に於ける米國の提案の内容が出て居る）「十萬人何が十萬人で濟みませう。全然軍備撤廢でないから幾分は残る者があるとしても佐世保、舞鶴、吳等で大恐慌を來すでせう。大阪では藤永田が不要となる。住友伸銅所住友製鋼所等も事業を停止するより外無くなる。其外陸海軍に物品を納入して立つて居る會社は大阪には澤山あるのです。其等が何に轉業すると云つても仕事があるものですか」彼は吃音なので云ふ事が一層偉らそうに聞える。「御飯を喰べられなくなるものは労働者のみではありませんせ、悪くすると之が産業組織そのもの、改革を要する事になりますよ」と力を入れて「要するに従來の爲政者が軍備にのみ重きを置いて來たのが悪かつたのです。今迄はナポレオンとかアレキサンダーとか云ふ一種の支配狂を尊敬して居たのですからね。私は百萬の失業者が出來たとしても今度の軍備縮少には大賛成ですが其結果が如何に大きなものであるかを打算して居ない當事者の迂愚を私かに笑つて居る者ですよ」彼の説には多少の誇張がある。大いに眉に唾して聞く可き説であるがいづれは一騒動あらうとも思はれる。「私の主義は○○○○○○○○○○に○○○○○○○○を加味した奴です。全日本の労働者は團結困難であらうと云はれるのですか。英國？。英國には團結し得ない原因があるので

133

す。原因は國民性其ものなのですが、歐米人は砂の様にバラバラの個人主義の國です。すからね。團体的行動をするのは彼等の利害關係から來て居るのです。日本も同じ？御説は尤もで私達も此運動に關係して居ると皆自分の利益の爲め許りで加盟したり又は行動を共にして居る者もあります。其以外に古來日本人には先天的の團体意識があるのです。楠正成にした處が西郷隆盛にした處が名譽の爲めでも利益の爲めでもない團體其のもの、爲め組織其のもの、爲めには眼がグラ／＼ッとして幾多の生命を亡くしても何とも思はないのです。其徒輩が多勢居るので私自身の經驗から云つても一度日本労働總同盟の名を掲げたが、最後其名の爲めに皆我を忘れてしまふのです。従つて英國の組合運動があれ以上發達しないからと云つて其論法で日本の組合労働が英國と同様行詰ると云ふ結論は決して出て來ません」彼は先づ組合の總同盟然る後○○○○○○○○と云ふ思想の所持者であるらしく資本家は我が○○氏の爲めに恐れしめられる事夥しいのである。其他彼は労働組合の組織等に關しても一隻眼あり人に接するに眞摯な態度熱烈な辯舌は人を引き込まずに居らない。因に一箇月程以前日本労働總同盟大阪聯合會會長選舉に際しては彼は有力なる候補者の一人であつた。（二一、一五）

Faint vertical text columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

其六 官公署被傭人

Faint vertical text columns on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

其六 官公署書記人

一番 市電運轉手

三十三歳

家族四人

市電の各出張所では彼の屬する市電梅田出張所に限らず車掌並運轉手を「い」から「ち」迄のいろは順八組に分類して、賃銀の受け渡しから時間の交代、賜暇等總ての事務進行上の單位として居るが、彼は「〇」組に屬し、其〇〇長である。會長副會長の仕事は外に向つては會を代表し、内は萬事不平杯がなく能率があがる様子を配る事である。彼が運轉手となつてから今年で五年目であるのに、斯くも出身したのは異例の事である。

彼の家は天神橋の二丁目西へ入る大阪座の附近で元來住宅の爲めに建てられた二階長屋の路次ではあるが路次に面した格子を取拂つて駄菓子屋雜貨店等を開いて居る家もある。ありふれた路次であり、ありふれた長屋の一劃である。二階六疊に下六疊と三疊。北向きで立間入つて右が勝手。上つた處が三疊になつて居る。押入が小さい爲めか柳行李や風呂敷包が六疊の間に積まれて居る。六疊の南が小さな中庭になつて居たけれども裏の家の高い板扉に覆はれて光線の具合も通氣も至つて悪い此邊一体が濕地であり彼の家の床下も濕り勝ちである。彼の脚氣は十九の年から持病で敢て此家に來てから掛つた病氣ではないが、十五年の今日に至る迄病勢が益々盛になる許りであるのは一つは濕氣の多い土地に居るからである。彼の脚氣は

十九の年に起つたもので其後年々夏の頃に出る。廿五の年に再び猛烈な症状を呈し卅三の今年又々激しくなつて今日で恰度四十日目になるが其爲めに此様にして仕事を休んでゐる。全く今年には彼に取つて縁起でもない年である。卅三と云ふ厄年であるから許りでなく此の春慰勞休暇を貰つて皆が伊勢に参拜した事があつた。彼は其日『○』組を率ゐて引率者として行かねばならぬ責任があつたのであるが其前日恰も、京都の病氣で入院してゐる伯母から顔に出来た瘤を切開すると云ふて電報が来たので其立ち合ひとして京都に行かねばならぬ事になつた。彼は其れ迄伊勢には参拜したことがなかつたので國民として是非一度は参拜せねばならぬ處でもあり且つは公務にも關係して居る事故伊勢詣りだけは止める事が出来なかつた。其れにしても伯母の瘤を切開する事も可なり重大な事であり悪くすれば一命に係はる事ともなるのである。彼は其夜中寝ずに考へた末明け方になつて伊勢に参拜する方がよいと云ふ結論に到達した。理由は伊勢に参拜した上で『今日京都の伯母の處に行かねばならぬ身ではありましたが既に大廟にお詣りする豫約がありましたから其方は断つて斯くは参じたのであります。就ては別段のお願いもありませんが、只々伯母の腫物の全快のみを祈願する次第であります』と此様に願つたなら必ず伯母の腫物も快癒し、且つは自分の年來の宿志も叶ひ其れに『○』組○長としての責任も果たす事が出来るからである。斯くして旅装を整へ京都の伯母に對しては「ユケヌ」と打

電し伊勢参宮を決行したのであつた。けれども此處に忘れて居た事は伊勢参宮をすれば善い時は大いに善い事があるけれども悪い時には又大いに悪く自分の命が無くなる様な事があるのである。其れ故此度の脚氣は充分氣をつければならない。脚氣が此様に悪くなつたについては伊勢参宮の縁起が手傳つて居るのみではない。彼は彼の信する友人から脚氣には寒水を吞めばよくなると云ふ事を聞いて居たので毎年冬になれば、寒水を吞んで居たし、喰べ物の如き常に淡白なものを選んで居たのであるが昨年は脚氣の氣が少なかつたので昨年の冬は少しも養生をしなかつたのである。此事があるのと其れに脚氣になつた時には其の人間の生れ故郷に歸つて其處の水を吞み其れに跣足で朝露等を踏んで歩けば自ら快癒するものである事を聞いて居た。彼は一箇月前仕事を休んで故郷の福井縣勝山に歸つて世俗の云ふ通り水を吞み其處で朝露を踏んで心ゆく許りに故郷の山河に接したのであつた。魚の如きも勝山の地は山間の辟地でもあり海魚は非常に高いので一尺程の鮎をのみ食つて居たのである。斯くの如く故郷の山川に親んだのであるけれども脚氣は依然としてよくならなかつた。悲しい哉、彼は十五才の時に出郷して今日迄既に二十年大阪の地にのみ住んで居り七年して人間の身体を構成する物質は全部新陳代謝をすと云はれて居るのであるが七年を三回迄でも此地に住んだが爲め彼は既に身体の何處の部分と雖も大阪の地からとれた物質のみにより構成せられて居たのである。彼の言語は

大阪辯となり彼の性質も大阪氣質となつて居たのであつた。又故郷に歸つて脚氣が快癒する原因の一つは故郷の山川に親んで物質的に其肉体と自然との接觸がある許りではなく父母の膝下に歸つて知己弟妹と共に昔を語り精神的に落ちつき、焦燥な気分が無くなるが爲めである。然るに今や彼の知己は悉く四散し老いたるは不歸の客となり稀に残る幼な友達に既に分別盛りの壯年に達して居り遇つて話すにしても僅かに懷舊の談話に一時を持つ位で單に珍らしがられるのみで真から歓迎する人は無かつたのであつた。故に精神的には決して其故郷に歸つては居なかつたのであつて異郷から異郷に歸つた結果に終つたのである。之れが彼の病氣を益猛烈ならしめた最近の最重大なる原因である。斯くの如くにして彼の脚氣は日に増し悪くなり、貯蓄も次第に無くなり全く氣を腐らして居る。處で近頃は其爲毎日注射に行つて居る。

彼の故郷は既に述べしが如く福井縣〇〇町である。家は代々農家で五人兄妹の末子に生れて居る。長男は故郷で働いて居り次男は現在彼の家の二階に居る彼は三男で後の二人は女である。

學校は故郷で高等を卒業した。彼の一家は十五才の年に長男に家督を相續させて故郷に留め父と二兄とが先立ちとなり一家を率ゐて大阪に移住して來た。北濱裏に小さな店ではあつたが店を張り吳服屋をして何不自由なく暮して居つた。彼は十六

の年から四年谷町の洋反物屋に奉公して一切の事をやり漸く一人前となり其の後兵役のため暇を貰ふ事となつた。兵役の方は八聯隊に入隊。一等卒として除隊となり除隊後は外國貿易をしてゐる本町の石猪商店と云ふ店に入つて洋反物部の外交をして居た。月給は最初僅かに二十圓と云ふ少額であつたが長く洋反物屋で奉公して居た關係から仕事が出来る爲め主人からは重く用ひられて居た。然し此の主人は昔高等商業の教師をした人なので頭はあつたが世事に疎く外交をして居る者が如何に苦心するものであるか、目に見えぬ金を如何に多く使ふものであるか等についての思ひ遣りが無い人であつた。朝早く出掛け夜遅く迄働くので近所隣りの人達からの評判はよく、仕事にも興味を感じて居たが一言に云へば報酬が意に満たなかつたのである。爲めに主人に向つて要求する處があつたけれども容れられず遂にひいて電車の運轉手となつた次第である。

其間に父の商賣であつた吳服店の方は失敗のみして加ふるに嫂と姑との折り合ひも悪しく、其中に嫂は病んで亡くなり二回目を貰つたのであつたけれども、居つかず、大正三年夏には父も亡くなつたので兄は店を疊んで天滿紡績の平職工となつたのであつた。斯くの如くにして彼の兄は家其物は自分の名義にしてあるのであるが妻が無ければ廣くも要らず弟を入れて下に住まはせ、自分は二階で『女には全く疑りた』と云つて靜かに居るので彼の家と云つても實は兄の名義になつて居るもので



ある。

母と兄とが二階に居り、彼等夫婦に二人の子供とて、六人の家族で、子供は男が二人五つに二つである。彼の報酬は月九十五六圓である。閑暇利用の方法とて福島に居る姉の家に行つて話をするのが楽しみな丈で、他にこれと云ふ楽しみはない。姉は福島で下宿屋を営んで居る。彼には財産とては無く子供に遺す何物も無いから教育だけは行けるなら大學迄もやりたいと思つて居る。大正三年に父が亡くなつた事其れに年々起る脚氣の事、廿七歳に結婚して二人の男兒を擧げた事、是等が主なる家族的事項である。

彼の性質は商人氣質の良いので、容貌言語は立派であり言葉に千變萬化の妙を見せて頗愛嬌がある。真面目一方で少しと越し苦勞をする癖はあるけれども公私共に正しい生活をして居る。「〇」組のよき〇〇長であり家庭に於けるよき父である。娛樂はないが修養は怠らない方で伊勢大神宮を拜し、土地の神としては天満の天神様に參り、其の他神佛は何にしても疎かにしない事にして居る。朝は四時には起きて四方を拜んでから食事をする、夜は亦同じ様にして寢につく事として居る。近頃友人に大本教に歸依して利益を得た者が居る。彼は年中病氣のみして瘦せ果てた男であつたが、綾部の本山に行つて、其の原因を明かにして見たら全く祖先を祀らなかつたに原因して居る事が明瞭となり、歸つて早速先祖を祀り其教に従つて其日一

日の安全をのみ願ひ、餘念無く働く事にしたら身も心も非常に軽くなつて今は堂々たる偉丈夫となつた。其れに髪を長くして大道を活歩するので全く神の如くに見え言行も一變してしまつたのである。親友が暫時の間に此進歩をなしたので彼も其友から大本教に關する書籍を借り一讀し、大いに得る處があつた。然し新聞紙上で随分悪く云はれて居る宗教でもあり、眞に打込んで信する迄ではゆかなかつた。其他彼は天王寺西門の横にある徳信教と云ふのを信仰して居る。此宗教を信するに至つた動機は彼の父が病重り日夜病苦を訴へて止まない爲め近隣に對しても迷惑であり當人の爲めにも氣の毒でならないので醫者を代えて盡すべき丈は盡したのであつたが、少しも苦痛が治まらない。或者が其様な場合には西門横の徳信教に行くのが宜しいと云つて呉れたので直ちに伺つた處が「病氣は氣を病むと書いてある通り全く身體の故障と云ふより、氣の故障である。身體其者は良くならうと云ふまいと先づ氣の故障を無くさへすれば知らぬ間に身體の故障は無くなつて居るものである。これで免許皆傳である。」と此の様に云はれたのであつた。聞いて見れば馬鹿げても居るが理に合つて居る様にも思はれ若干の賽錢を納めて還り其旨父に話すると奇なる哉見る見る父の病氣は良くなり翌日頃からは起きて座つて居た。其後やはり老病と云ふ様な事で父は七十五歳で亡くなつたが近所隣りを驚かした忍痛の悲鳴が一夜にして止んだのは、此免許皆傳があつた爲めであり、死ぬにしてもさの苦痛を訴へ

なかつたのである。件の宗教は病氣（神様の御示）が無い時は健康に働けばそれでよいので佛教なり基督教なりを信じて業務に忠實にし妻子をいたはるのみで結構な宗教である。其故再び徳信教本部を訪ひはしないが其教理文は信じて居る。其れにしても今度の此脚氣がよくならぬのは免許皆傳も可なりに怪しいと云はねばならぬ彼は將來是非とも商賣を始めたる覚悟である。洋反物屋が如何にポロい商賣であるかを熟知して居る彼であつて見れば當然そうゆかなければならぬ處である。今度福井縣に歸つた時も羽二重を數匹持ち歸つて賣らうとしたし、其れに此茶菓子は胡桃入りの羊羹であるが此羊羹も田舎の産物としては割合に珍しい品であるから是等の産物を取りよせて是非とも商賣を始めたいと思つて居るのである。煙草は好き酒は飲まない。何處の勞働組合にも屬して居らず勞働運動等は考へた事がない。大正八年十月上本町の車庫を中心とする車掌運轉手のストライキの場合には彼は會の幹事であつたが、他の車庫には多少の動搖を免れなかつたに拘はらず梅田のみは少しも動搖する事はなかつた。かくて彼は責任を重んじてよく働き、一家を安泰ならしむる爲めには渾身の努力をなす人である。（九、二四）

## 一、番 市 電 車 掌

四十歳 家族四人

「大大阪の都市計劃は事未だ計劃中の事に屬し西成郡豊崎町の一圓は昔乍らの材木

を惜しまずに建てられた立派な建築物と、土地を惜しみ材木を惜んで建てられた最近の建物とが雜然として集つて居る。此雜然たる市街を更に雜然たらしむ可く道路の幅員、家と家との間隔等には些の考慮をも拂はず如何様な土地でも土地さへあれば其處にマツチの箱よりも軟弱な建築物をドシ／＼建設してゆく。警察の方に建築請願規定とか色々な規則があつて新築については相當の審査の上認可する事になつて居る事ではあらうが其等の規定は何等權威のある規定とは思はれない。道路の如き只管不便を主として迷走せしめて居る。道路迷走獎勵規定と云ふ様な法規に従つて新築してゆくものかと疑はれる程である。是等幾多の新築はやがて都市計劃實施ともなれば早速取り拂はれるであらう。

彼の家は日本機械工作所の塀に沿ふて在る。附近には大阪爲替貯金支局があり、梅花女學校があり、其に二廓に分かれた赤煉瓦の機械工作所があつて仲々盛んではあるが其等の建築物の間に介在して居る家々は其等と良きコントラストをなして貧弱である。彼は三時に梅田の車庫につめなければならぬ。其れ故自分は二時半迄で彼と談話を交換する事が出来るのであるが主人不在なるを以て尙暫く環境の様子を観察すべく餘儀なくせられて居る。

此處に一人の北國訛りの道路商人が短身赭顔汚れたバナマ帽を被り白地棒綯の浴衣を着て肩に大きなブリキ製の器をかけ米の粉の中に飴を盛り子供を集めて一本二

厘の處を一錢宛に賣つて利益を占めようとして居る處である。「諸君が日常喰べて居られる洋食、其洋食は肉を多く使用するが爲め甚宜しくない。此肉食と云ふ事は人類として不適當なものであり特に日本人の體質にとつて極めて不適當なのである。此の事が陸軍々醫總監石塚先生により今度初めて明瞭にせられ……」と短く刈つた赤鬚の下を眞四角に開き美しく並んだ齒を見せつゝも眼を細くし眉をよせて野邊に呼はるヨハネの如くに説き出でたのである。「大体人類は草食獸に屬するものにして其犬齒が著しき退化をなして居るにも其手足特に爪が肉食獸に見るが如き形状をなし居らざるに見るも、社會的生活を好み争鬪を好まざるに見るも……要するに日本人は植物性の不老長壽の飴を食ふにあり」と云ふのであつた。件の飴にはオゾンカルシウムも入れてあり其他貴重なる數種の藥品が配合してあつて決して牛馬の足からとつた膠に、カンテン、芋の屑等からは製せられはしなかつたと云ふのである。其辯論はズー／＼として盡くる事を知らず而して其の間兩の手は前後左右に働き入り代り立ち代る子供の一錢玉を受け取つては一本の飴を與へて雄辯なる。彼の口が働く以上に働いて居るのであつて其の顔を見て其眞實さに魅せらるゝものは其手の無碍なる働きに更に一驚を喫するのである。

妻君はよく肥つた、よく話す人で相手が無言で居たにしても其れで氣を悪くする様な事は無く三十分でも四十分でも話しつゞける人である。先年家計の癡を記入せ

し時の經驗から割り出して來訪の目的を推察し主人についできかねばならぬ事の大部分を一人で語り盡した。時に二階で仕事をして居た彼が下りて來たのである。

彼の故郷は府下北河内郡〇〇村である。父は彼の廿八の時に亡くなつた。母は七十七才で對立の向ふで咳をし乍ら針仕事をして居る。家業は農業であるが小さな雜貨店を出して其方の収入とで生計を立てゝ居る。兄弟は四人彼は末子で彼の前が姉になつて居る。長男は家業をつぎ、次男は養子に行き、姉は嫁し、彼は此通りの有様である。彼の母が彼の家に居るのは末子可愛さで來て居るのであつて兄がつかう當るからと云ふ様な意味は毛頭ない。

彼は高等科を卒業し。其後漢文を教ふる學校に二年通つたのであるけれども之れは正規の學校ではなかつた。彼は廿一才の時に出郷した。最初西九條の鈴木鐵工所と云ふに凡そ三箇月。十四五名の職工を使つて居たが今はどの様になつて居るか分らない。次は玉造の質屋に奉公して十三年。此店は衣類のみをとつてゐた店で使用人は五六名居た。其れから車掌に代つたので既に九年になり。月收は現在九十圓内外になる。斯くて彼には職業上の變化は極めて少ない。結婚したのは彼の廿八歳の時で其後二子を挙げ姉の方は十で弟の方は七つである。姉の方は、尋常三年、弟は未だ學校に行かない。彼は子女を何の程度迄教育するかについては、未だ考へをきめて居ないが出來れば大學迄も其上迄も教育したいのは勿論である。

家は七軒長屋の第三號であり、北向きで南の方から光線が充分入つて来る。二階は三疊二間で、下は四疊半に二疊である。敷金は少しも入れて居ないが此處に住んでから既に十年以上になつて居るのであるからさもある可き事である。最初は五圓で住み込んだのであつた。其頃は前の赤煉瓦の機械工作所も無ければ大阪爲替貯金局も無くて見渡す限りは草原であつたのを十年経つた今日は此の様な有様となつたのである。

彼には趣味とてはない。娛樂としては落語を聞きにゆくのみで、休暇には家の仕事か棋を割るとか庭を掃くとか種々あるので其れを喜んで居る。家の宗教は眞宗(西本願寺)であるが彼は無信心であつて神様等の前を通つても禮拜するのは恥かしいからとて拜んだ事がない。健康状態は近頃急に悪くなつて此二箇月を休んで居たが一週間程前から出勤して居るが醫者の藥と其れにカルシウム注射とを今だにやつて居る。身体が弱いからと云つて今の仕事を止めても以前やつて居た質屋を始めると云ふ事も出来ないから、何處迄も此商賣でゆかなければならぬ。幸來年は十箇年勤績と云ふ事になり百圓の給料を貰つて居るものには八百圓だけの手當を貰つて止める事が出来る。四十と云ふ年で今に電車の車掌をして居る様な者は異例であるが是非十年勤績と云ふ事にして、然る後其手當を貰つて何か外の商賣に代らなければならぬ。それで八百圓は貰はれないにしても月九十圓だとして其九割七百二十圓

程は貰はれると云ふ勘定である。酒も煙草ものもない。會合等の席に出る事は嫌いな性質で出来る限り出ない方針をとつて居るが、彼の屬する「〇組」の平美會には入つて居り、其他梅田車庫従業員の組織する梅花俱樂部なり市電全従業員組織する土筆會なりに平美會を通じて幾分會費も納めては居るが之れは誰でもせねばならぬ事であるから止むを得ない。彼は随分疑心の強い方で宗教家でも何でも信仰すると云ふ様な事は出来ない。其他市電には監督と云ふものがあつて交又點等に立つて電車を指揮し又車庫で事務をとつたりして居り試験があつて要領のよい者は其方にゆく様になつて居るが彼は其方は割合に報酬が少ない結果となるが故其方の試験の時には充分身を入れない様な方針をとつて居る。彼が九年の今日に至つても尙且つ平車掌で居る理由は此れが爲めである。(九、一六)

### 三番市役所守衛

四十九歳 家族三人

玉川町三丁目附近は市内の相當な場所柄にも拘らず道路の走向建築物等極めて亂雑である事は前述の通りであるが彼の家のある處は別して混雑して居る。此邊によくある煉瓦の行き止り道に沿つた四軒長屋の二軒目で南向きである。彼の家を右手に見て少し行けば又行き止りとなつて居るので道はつまり東が入口となつて居る。

此様な道路の作りは盗難は少ない譯である。奥の方の者が盗棒と怒鳴れば入り口の者が表に出るから盗棒は袋の鼠となつて掴まへられる。然し火難に遇ふては皆一方の口から逃げ出さねばならず入り口の家が焼け出すと奥の者は非常に難儀する。

今日は明月である。夕の町を歩いて居れば小供が「月々に月見る月は多けれど月見る月は此月の月」杯と何時の頃誰が作つた句か知らぬが普く日本中の人間が舊曆八月十五日の月を見る。時に思ひ出す月並な駄句を突然大きな聲で怒鳴る。其れを聞いた小供が又同じ事を云ふ。是等の小供が大きくなつて其亦子等に此名句を傳へるのである。あれ十五夜の月が出る。圓く／＼まん圓く。然る時に一團の大道藝術家が流しをひいて一行三人賑やかな三昧に合はせて短詩を唄ひ乍ら進行して來たのである。「十四十五は蕾の花よ」チエ／＼レコ／＼／＼。「咲く日をひたに待つわいな」チエ／＼レコ／＼／＼と遣つて來る「男持つなら……」チエ／＼レコ／＼／＼「廿廿五は青くさい」と唄ふ。此大道藝術家は鉄力の器に何か菓子を入れて居り小供に賣るのである。其手段として誰でも周圍に立つた人間の弱點を見ぬいて無限に記憶して居る詩の中から一つ二つと唄ふのであつて唄ひ手は十六七の女であるらしい。眼を深く花笠で匿し鼻と口とをとして特に其下顎を自由自在に面白く動かして人を釣る仕組みである。つれの者は男二人で三十と四十位之は三昧線が専門で又其器から菓子を出して小供に賣り捌き乍ら進むと「〇〇圓の月給取よりは遙か苦勞は増しかい

な」と云ふのが突然に耳朶を襲つたのであつた。

恰も今日は大阪市長選挙の當日で彼は守衛故選挙が果てる迄は歸られない。市長三選の號外が飛ぶ。池上現市長が第一候補者の最高點である。然る上はもう彼の守衛としての任務もはてたに違ひない。そしてあいたお辨當を下げて歸つて來るであらう。果せる哉七時五十分と云ふに彼は歸つて來た。斯くて彼につき記載する事を得たのである。

十日程前迄は彼は江戸堀下通三丁目に住つて居つたが不當なる家賃の値上げに遇つて居堪まらず妻君の弟の家に同居する事となつた。弟の家に同居と云ふ名義ではあるが事實上彼が家賃の大部分を出して居る。二階が四疊半と三疊。下、四疊半に二疊二間で十一圓五十錢の家賃であるが弟夫婦を二階に住ませて居るけれども其内僅かに二圓を負擔させて居るのみである。彼の家は濕氣が多い。其れで彼は生れてから脚氣等はした事は無かつたのであるのに此家に入つてから脚氣になつてしまつた。尤も之には他にも理由がある。市役所が堂島にあつた時は建物は古く汚なかつたが乾燥しきつて居つた爲め誰も脚氣になるものは無かつたが、今度中之島に移轉して來てからは石造であり未だよく濕氣がとれて居ないので少し空氣の流通が悪い處に居る者は片端から脚氣病になつてしまつた。彼も其爲めに脚氣になつたのかも知れない。兎も角彼の家の床下も非常な濕り方である。家族としては二階に妻君の

弟夫婦其れに彼の夫婦と十八歳になる男の子が一人とである。此子は梅田の口金工場に通つて居る。口金工場と云ふのはビールや其他の壺詰の口を封する時に使用する金の事を云ふ。日給は一圓餘りで積極的に家政を助けると云ふ意味にはなつて居ない。妻君は何も内職をして居ない。主人は休日とて是れを娛樂に費す事が出来ないので。其れは今守衛に昇進したからであるが此春迄は使丁であつたので吏員が休みである場合も出勤して市役所を守らなければならず、休日の中から交代で休日をつて居たのであるから休み日のみは家庭で暮らさうと云ふ氣になるのと、給料が僅に一圓四十二錢であつて之れで家族の生計を立て、居る事を思へば娛樂處の騒ぎではなく、唯一の楽しみは彼が伸んびりと寝るのだと云ふ意味も自ら明白になる。

彼は閑暇があれば寝る事、それから講談本を読み又友人を訪ねる事をする場合もある。子供は尋常を卒業させたのみである。彼が結婚したのは廿九歳の年であつた妻君は三十歳であつた。子は今のが直きに生れたそれのみである。火災や盜難等に遇つた事はない。病氣にもなつた事はないが今度の脚氣と其れに妻君の冷え性な事、其れ等が家庭的事項の主なるものであらう。

彼の故郷は和泉の岸和田町であつて當時は未だ沼野村に屬して居つた。父は彼の廿歳の時母は廿五歳の時に亡くなつた。彼には澤山の兄弟があつたが彼の記憶に残つて居るのは三人で皆男兄弟である。彼は其三番目であつた。兄達は皆一家をなし

たのであつたが子が出来たか出来ぬかに死んでしまつた。兩人の残した子は共に成人せず亦亡くなつた。其れ故今では彼は天にも地にも唯一人である。母の家が大坂であり母の兄妹が澤山ある處から彼にとつて從兄妹は澤山ある。父は貧乏士族で兄弟はあるけれども岸和田故に父の方の從兄弟とはあまり惡意にして居ない。兄が死んだ時に其家督を相続すれば士族であつたのであるが別家したので平民である。大阪には十三四の頃から知り合ひの家に手傳をしたり一時丁稚をしたりして、何日も來ては居たが本當に足を洗つて大阪に出て來たのは大正元年である。初め人力車の車輻を製造して居た。其後方々歩いて車輻の方をして居たのであるが大正五年に淡路町の汎愛小學校に使丁として雇はれ、其處に三年程居た。市役所の使丁となつたのは大正八年一月からで、それから今度守衛となつたのである。色々な仕事をしてみただけでも之によつて成功する見當もつかない、四十九歳の今日何に代ると云ふ事も出来ない。そこで日給壹圓四十錢は安いが市役所に勤めるより仕方がない。

無病息災で醫者の藥を服んだ事はない。職人は元來武張つた事を好むもので商人の様に淨瑠璃芝居の類はあまり好むものではない。彼も其よい例で趣味とか娛樂とかと云つて彼の所謂だらしないものを見聞きする事は嫌ひである。遠足、魚釣り等は過去に於てはした事もある。煙草は喫ふ、酒は呑むが一合位な處である。無信仰であるが伊勢神宮を祭つて居る。葬式は佛式で行ふのであるけれど寺等には一切

無関係である。獨立獨歩主義であつて事情からも來ては居るが社交を嫌ふ性質である。其れから器物を大切にす美徳を持つて居る。(九、一八)

#### 四番 市電倉庫助手

五十六歳 家族三人

彼の家は日本橋三丁目にある。電車通りに沿つた二階建長屋の二階床下を門とした路次にある。此邊は表通りも立派な建物ではないが裏長屋となれば極めて粗悪に出来て居る。古くて粗悪なのであるからお話しにならない。北國辯の妻君が出て丁寧な挨拶をする。主人は九條電鐵に勤めて居る。廿五日の大風で九條發電所に浸水し重要な諸機械を据ゑつけてある地下室は、濁水で一杯になつてしまつたのである。堤防がきれたのではない。發電所に用ひた湯が流出する溝から満潮と共に汚水が流れ込んだもので、見る／＼間に地下室は一杯になつてしまつた。數臺のポンプで動力を使用して水を汲み出し、諸機械に手入れをしたけれども塩水であつたが爲め機械が錆びついてしまつた。モーターの如きは極めて濕氣を嫌ふ機械であるから悉くアルコールを用ひて洗滌したが使用に堪えなくなつたものが多い。是等の機械には豫備の品もあり兎に角間に合はせて置く事とし、いよ／＼足りない部分については其れ／＼購入の手續きもしてあるが應急策が困難である。此様な日には會計倉庫は非常なる混雜で諸機械が藏まはれて居るので、街線の切斷箇所に向け電線を出す

事、モーターの据ゑつけ代へ、其他色々な相談を持ちかけて來るから、其等につき手落ち無く機械並に道具類を渡してやらねばならない。以前には此様な時にはモーターが二つも無くなつた杯と云ふドサタサまざれもあつたが、近頃では其様な事は無くなつた。會計倉庫助手である彼はかゝる次第で大童になつて奮闘を持續して居るのである。さても昨日今日電車の數が半減したのは此地下室の機械が錆びついた分の一となり宇治川電氣から電氣を借りて僅かに運轉を繼續し居る有様である。市爲め電氣の量は四長は廿六日電氣鐵道部に出張して諸器械が赤く錆びて居る處を視察し天災地變とは云へやほり我が徳の足らざる爲めの致す所であると感じたと新聞にある。三十日には電車も電話も復舊する豫定だ。

廿七日の夜はさりげ無く晴れ渡つて大風についての風評等ごりごりである。彼は晩酌二合を終へて裸體となり表格子によつて涼を取つて居る處で、「上つてお話しなさい」と云つて着物をきる。彼の故郷は長野縣南佐久郡〇〇村である。家業は代々農業であつた。名主の家柄で維新の頃迄は堂々と暮して居たが父の代になつてから妙な事になつてしまつた。父の兄弟は男三人で長男は他家に養子となり次男が一時嫁を取つたけれども放蕩故に祖父から勘當を受け其嫁も實家に歸つてしまつた。三男が彼の實父で其後を受けて家督相續をしたのであつた。兄の娘二人が家の子として殘されて居る爲め之れも父の子として俄に五人兄弟となつた。父は奮闘的人で

あつたから漸次家政を盛り返し一家全力を盡して家業に精を出して居たが彼が五才の時に突然心臓麻痺で亡くなつた。其後に當時は近郷の或る家に入聲と云ふ様な形で居た勤當された兄が入つて來たので、再び伯父の家となり妹共は本當の父を迎へて喜んだが彼と二人の兄は随分苦勞した。恰度其時父の長兄が養子に行つた先きで妻が無くなつたので父は五つになる彼をつれて其家に再縁し、彼のみは大伯父の子となつた。彼は其處で教育を受け一人前となつて東京に出た。東京には十年許り居り自分の名義で味噌醬油等を商つて居た。明治三十五年頃商賣に失敗し又妻君との間に喧嘩兩成敗の理由もあつて分れてしまつた。

それ故今の妻君は二度目である。之れも間もなく東京で嫁つたもので山形縣の士族の娘である。東京で苦勞して女の兒一人を抱へて居たのである。皆は娘のある女を貰はないでもよからうと云ふ意見であつたが彼は先妻と分れた原因の一つは子が無かつた爲めであるから女の子位はあつた方が宜いだらうと云ふ考へで彼女と一しよになつた。其娘は今年既に二十歳であつて戸籍はまだ移して居ないが既に其近所の家に嫁に行つて居る。結婚して間もなく男の子が生れた。其れも今日では十八歳になり住友銀行の支店に通ひ關西大學の夜學部に通學して居る。

大阪へは明治四十四年の十月に來た。何の目當てもなく來たのであつたが東京での知人が電鐵に勤めて居たので其人に紹介して貰つて電鐵に入社したのである。其

後大正六年電鐵經理部の〇〇と云ふ人が電業株式會社と云ふのを創めたので當時は景氣のよい頃でもあり電鐵の方の報酬が憐れな程少なかつたので其方に參じたのであつた。然るに其れは二年程して破産となり、再び電鐵收入役某氏に願つて電鐵に入つた。續けて居れば今年に既に十年勤續であるものを途中で迷つたのでつまらぬ事になつてしまつた。報酬は日收二圓十五錢である。賞與は半期で廿三四日分其れに休日等に出勤すれば一日の歩増がある。假りに卅一日の處を休日に一日出勤すれば卅二日分だけ貰ふ事になるのである。

家は南向き八軒長屋の端で家賃八圓。二階六疊、下三疊に二疊である。土地は少々乾燥し過ぎる。敷金は前の借家人のを受けついで八圓丈け入れてある。道路は狭いのみで別段に不潔と云ふ譯ではない。彼の家は非常に清潔である。これは彼が細工好きだから何もかも整頓し又色々細工をして居るからで器の如きも一々研ぎをかけて居る。子が住友銀行支店に勤めて居るので、其方に幾分の收入がある。妻君は何も内職をして居ない。彼の休日利用法は細工をする事である。家主が七八年此方七圓から一文も家賃の値上げをしないが其代り家の手入れは各自勝手にして貰ひ度いと云つて居るので、彼は自分の家に自身で手入れせなければならぬ。其爲め倉庫に勤めて居り乍らも大工のする事を見真似て屋根から勝手元の修繕迄自分でして居る次第で彼は細工には非常に趣味を持つて居る。



最近の主なる家族的事項としては本年五月次兄(相續人)が淺草で死んだことを知らせて来た外、次兄の娘もあつたが二十三で(去年)死んでしまつた。長兄は他に養子に行つて居るので彼の家の祭は彼がせねばならない事になつた。其れに妻が連れて来た娘、之を嫁に遣つた事等も其である。「飯山庵島水居士」と云ひ「萩風妙露大師」と云ふ、之が彼の次兄と姪との戒名である。彼の妻の家は山形縣の相當な家である事は上述の通りで次男は朝鮮で成功して居るし、三男は姫路で鐵道院に勤め居る。共に高等の教育もあり地位もある人達で彼としては自分自身の身内は、兄弟三人とも父の兄弟三人が行つた通りの事を行つて彼自身が先祖の祭をせねばならぬ様な事になつたけれども、妻の兄弟が立派な人達であるし、其れに義理の妹二人も相當な家に嫁いで居るから今では何不足なく職業に精を出し又細工をする事を楽しんで居る。と近所に嫁いて居た娘さんが「今晚は」と云つて愛嬌よく這入つて来たのであつた。争はれぬもので村でも名主をした家筋の彼と山形縣士族の妻君との間に育つた彼の女は此邊の町娘達よりは遙かに上品であり禮儀も正しく屋内で何か用事のある事と見て取つて戸外に出て話の終るのを待つものゝ如くである。

彼は正直一方の人である。大阪に来てから十年役所に勤めても會社に勤めても一度の缺席も遅刻もした事がない。之れ丈勤直な人は珍らしい。此家の人は皆丈夫で病氣をした事が無い。讀書は嫌ひな方である。新聞は毎日新聞を讀んで居る。細工

ものが好きな爲め骨董も好きであるが自分が勝れた品と感じたものも専門家に見せると之れは無銘故駄目だとか、既に流行らなくなつた、とか云はれるとつまらない感じがする。それに財政も許るさないので骨董も恐るゝに賞玩して居る。一時基督教の説教もきいたが家の宗教は禪宗である。煙草が好きで酒は每晚二合と定めて居る。(九、二七)

### 五番 市電事務員

三十九歳 家族七人

鷺洲町大仁の發展は其附近に色々な學校があるので其等の學校に通ふ學生下宿の多い爲めである。市内の官公署商館等に通ふ獨身者達も其附近に下宿屋の多い處から多く集る。東京で云へば早稻田鶴巻町邊に當るであらう。夜の五時頃福島中五丁目の停留場から阪神踏切り邊を往來する人は頗る數も多く種類にも富んで居る。此阪神踏切りは通行人も多いが電車も頻繁だ。其れで一番困るのは交番所の巡查と踏切りの番人であつて東海道線の列車が通過する時等は人が黒山の様に集つて押し合ふ。何處に行くものであらう。何を急ぐものであらう。悉く死にもの狂ひである。彼の家は其頻繁なる死にもの狂ひの通りから左に折れてドブ川のほとりで世を忍ぶ者が居るにしたならと思はれる程複雑した路次の一番奥である。建物の悪い事其邊が清潔でない事等は既に述べし人達の住所と同じである。

主人は上本町車庫の廿四時間交代を交代し(午前九時)歸つてゆつくり休んで居る處である。起されて顔を洗ひ衣類を更め慥しか廿貫と見られる身體を以つて正座し悠然と來意をきゝ上がつて語る様に薦める。身體の何處を見ても行きつまつて居る處のない音聲の朗々たる立派な紳士である。

彼の故郷は奈良縣南葛城郡〇〇村である。六人兄妹の次男で幼ない時に父につれられて大阪に移住して來た。父は其故郷にあつては農業をして居た。大阪では難波で米屋を營んで居たが彼が十六歳の時心臓病で突然亡くなつた。當時彼の兄に當る人が天理教に凝つて父の死と共に傳道に出てしまつた。天理教は自分自身の事並に自分一家の事等は他人様と天の神様とが一切して下されるものであつて「我身思案は宜しくないぞ」と云ふ宗教である。彼の兄も一家の事には頓着せぬ方で全部の爲め、人類の爲め神の爲めと云ふ一念で先づ其家庭を棄てる事が第一着手としてなさねばならぬと考へて居つた。彼も家庭等を圓滿に營む様な考へは無く、自分の一家を犠牲とし身をも亡ぼして一切苦を身に集めて其血によつて世界人類の爲めに真正の場面を廻轉し出さなければならぬと考へてゐた。斯くて思想家である彼の兄と共に大いに契る處があつたのであるけれども兄の爲めに先鞭をつけられてしまひ母と四人の幼い弟妹を見棄て兄の後を追ふと云ふ氣にもなれず。一二回程大方決心し掛けたのであつたけれども恩愛の情にひかされて其事を決行するに至らなかつた。

實際十六歳の彼が爲めには全世界に平和を贏らす事、人類を一の統一體として宇宙の一股體として矛盾なき生活體系に改むると云ふ様な大きな問題に突貫するより前に先づ一家の平和を支持してゆくと云ふ小問題を課する方が適當であつた。

日本を去つた彼の兄の消息については分からない。要するに徹頭徹尾家庭我、國家我等に對する人間の妄就をぶち截る爲めに世界人として奮闘して居るものであらう。或は亦椰子の木蔭で優しい南洋の婦人と共に平和な家庭を楽しみ乍ら若い日の無謀な企てを悔いもし後に残した母や弟妹を夢に見て居るのかも知れない。

米屋は間もなく閉鎖し鷺洲町に飲食店を開いた。其れも失敗して洗ひ張り屋もして見たのであつた。市電に勤める様になつてから十二年になる。最初は運轉手から初めて監督となり、次いで内勤となり、教習所の方に轉任し、而して今の所長附き事務員となつたのである。大正七八年の頃は親戚並に自分の家庭に不幸が續いて随分苦勞をしたが、今では其苦勞も通り越し月収も百二三十圓になり、一番大きい娘は十七歳となり遞信管理局の方に勤めて居る。妻君は仕事の出來る人で裁縫仕事の内職をして居り、其れからも幾分の收入があるから物質的には稍平和を得た。

此間彼は自分の仕事を唯一の神聖なものとしてあらゆる方面から之れを研究し、如何なる人でも一指を挟む事さへ出來ない様に行つて來たのであるが、其れのみならず初志を貫く可く又眞の安心を得る爲めに人々の爲めに如何なる勞苦をも敢てし

た。例へば小庭の東北隅に風呂場を設けて近所の人達を入浴せしめたり、バリカンを買ひ來つて自分の家の兒に近隣の人達の頭髪を刈らせたり、其他色々な事をしたのであつた。風呂場の方は其後彼が病氣をした時に方位等に精通した彼の伯父が來て見て東北隅は此家の鬼門である。鬼門に風呂場を建て、不潔にする事は病の原因となるを以つて取り拂つて賣つてしまつたが散髪の方は今日も行つて居る。今日迄に彼がした唯一つの病氣がある。それは或時通じがないので彼の友人に其事を語るると通じをつけるのによい薬があると云つて七福と云ふ通じ薬を呉れた。此薬は餘程の劇しい薬であるらしく、別に分量を間違へた譯ではなかつたが非常な下痢となり一週間程續けて下した。下痢の方は一週間で止んだが其後腦病となつて少し氣が遠くなつてしまつた。更に一週間程したら氣も慥しかとなり身體も舊に復したけれど七福と云ふ薬を服用したが爲めに十八日間休んだのであつた。

彼の善行は擧ぐるに暇の無い程であるが、雨の降る日には朝暗い間に起きて麻緒を懐にして上本町の車庫迄一里半の道を歩いて行く。之れは女小兒等が下駄の緒をきらして困つて居る處を助けてやる爲めで件の麻緒を遣り自分で緒を立てる事が出來ない子であつたら、彼自身で立てゝやる。尤も遅刻するのは職務に忠實でない事となるから遅刻する様な時には車庫迄全部歩く事は止めて電車に飛乗る。バスの所持者であるから電車に乗るのは何處迄でも無料なのである。往きは電車に乗らない

のは雨の降る日だけであるが歸りは大抵歩いて歸る。これは道で喧嘩でもして居る者が居たなら、彼の逞しい腕で双方の首筋をおさへ、額と額とゴツン／＼と打ちつけてやり、馬鹿者共めと云つて叱つて順々と説いて聞かせてやるし、又電車の線路に石でもあれば除いて遣ると云ふ様な事をする爲めである。「善行狂と云ふ様なものです」と云つて大きな腹を動かして笑ふ。しかし彼から恩を受けて有難いと云つて禮を云つて來たものは晝の星位しか無いと云ふ。嘗つて彼が未だ十五歳の時千日前で泣いて居る十二三になる一人の少年を見つけたのであつた。當時は未だ彼の父が存命中で家計も豊かであり皆からボンボンと云はれて大きくなつて暮らして居た頃であつたから、早速彼の少年を連れ歸つて父に願つて泊めて置いた。處が此子は寢小便たれであつて毎晩寢小便をし行儀も悪く殆ど困りぬいたのである。お前の故郷は何處かと聞いて見たら江州の某町であつた。其處で早速其町の少年の家に照會して貴家に果して此様な少年が居るかと聞いたら慥かに其少年は自分の家の兒であるが其様なものを勝手に泊めて貰つては迷惑千萬である、抛つて置けば獨りで歸つて來るものをと云ふ意味の手紙が來たのであつた。少年にお前の家から此様な手紙が來たが歸るかと聞いたら歸ると云ふ。家に歸るに何日かゝるかと問へば三日かゝると云ふので草鞋三足を遣り其れに小遣五十錢を與へて歸してやつたのであつた。其後彼の少年からも何と云つて來ず少年の家からも禮狀一本來ないのであつた。何で

もよいから社會の爲めに奉仕して心の平和、眞の喜びを得たいものと思つて手當り次第に奮闘して居るが奮闘すればするだけ反つて今の世の人情の淺はかな事が手に取る様に分つて面白いこの事である。其中恩を受けて眞から喜ぶのは病氣して死ぬ許りになつて居る處に行つて金を遣り病中の注意等を云つて聞かす事である。家庭の不和を取り沈める爲めに事理を語り聞かすと云ふ様な事は反つて怨まれる場合が多い。此意味で彼が一番面白く感じて大いに調子づいて働いたのは、此前の流行性感冒の時である。上本町の出張所に屬する車掌運轉手も皆流行にかゝつて誰も彼も競つて一つ二つの葬式を出すのであつたが、其頃は一夜だつて自分の家に歸つて寝た事は無かつた。皆感冒で缺勤して居る者の家庭を訪問して看病して歩いた次第で彼は病氣が傳染して死ぬるなら死んでもよいと云ふ覺悟で働いたが、其爲め身体が疲れる様な事も無く、役所さへ休んだ事が無かつたのである。彼は上述の十八日間缺勤以外には就任以來缺勤した事は無く遅刻早退も一回もした事は無い。斯の如く社會奉仕に熱心な彼であり十六歳から一家の全責任を脊負つて苦勞した彼であるが氣分が明る寡言でよく哄笑する。極めて常識の圓滿な好紳士である。彼の親戚が江州で三等郵便局をして居る。昨年遊び旁ら多少手助けの意味もあつて數日其親戚の家に居た事がある。其時に其家に働いて居た一人の大工があつた。つく／＼彼の相貌を熟視して「自分は先年或お宮の仕事をして居た處が一人の行者が來て、自分に

御幣を作つて呉れろと頼むので早速作つてやると有難う誠に結構である、是で宜しい」と云つて「ついては何かお禮をせねばならぬが修業者は金を持たないものであるから金はないがお前はよい子であるから三つの秘法を教へる」と云つて三つの術を教へてくれた。その術とは小供の夜泣を止める法、脚氣をよくする法、其他もう一つであつて、卽座に効能がある云ふ特色を持つて居た。此法は遠く神代からの法であつて自分の死ぬ時には屹度誰か適當な人物に傳へる事となつて居る。今君を見るのに全く其人であるから來年の何月何日に之を傳へる。強いて來年傳へる必要はないが自分を信する者が來て病氣をよくして呉れと云つて澤山集つて來るので其等の人達に自分の法力は來年の何月何日以後は大阪北浦江の某氏に傳へる事となり自分はせぬ事となる法力を傳へれば自分にはなくなるものが多い、其後は大阪に行つて施術を受けよと云はねばならぬからだ。來年の何月何日には石が降らうと火が降らうと來て貰ひたい。と其様に頼れて居たのであつた。然るに其後彼の親戚が持つ江州の三等郵便局の權利は他に轉賣せられて今は親戚が其地に居らぬので彼は何だか氣味の悪い大工から秘術を教へて貰ふ爲めに催眠術にかゝつた様にして其日に江州迄行くのも大人げない話と思つて行かなかつた。彼が如何に頼もしい人間かは此話をきいたのみでも分る。彼が一の望みは自由に人の病氣をよくして遣る術を學んで人を助けて遣る事で、其中でも市電の従業員には立つて居る爲めか脚氣患

者が多いから一つ脚氣をよくして遣る工夫を知つて遣らうと苦心して居る。脚氣には瓢箪山裏の地蔵の水もよいにはよいが歩いて汗を流して置いてよい水を呑むから大概の病氣はよくなり脚氣も亦なほるものであらうとの觀察である。彼は早く店を持つて其方の収入でやつてゆく様にし、もう少し社會奉仕の爲めに苦勞して見たいと思つて居る。然し未だ之れと云ふ商賣も見當らない、大体金が充分でないのである。彼は慥かに一宗一派を開く人と見られる、さも無くは頭山満とか云ふ様な大きな親方となる人である。

彼の人物について餘り多くを語つた感がある。彼の妻君は世話女房型に屬し仕事も人の三倍程もやつてのけ。會議では其議長となり總てを勇んで遂行する人である家は親戚の人の家で平家である。四疊半に三疊二間で家賃は六圓五十錢敷金は無い部屋の中が整然として居るので實際よりもズツト廣く見える。主人も妻君も其通りであるから近所の人達は本家にも來る様な考へで誰も彼もやつて來る。そして種々な難問題を持ちかけるのである。彼は愛嬌肥りに肥つた身體の身すまひを直ほして如何にもトボケタ様に見せ掛け乍ら一々の人に接しそれ〴〵適當な判斷を下し皆の満足ゆける様に話をして居る。

遠足が好きで最近では三月前に叡山に登り其後奈良寶塚にも遊んだといふ。結婚したのは彼の二十三歳の時であつた。其後取り立て、云ふ可き程の家族的事項も無い。十七の娘を頭に五人の子供を養つて奮闘して居る事叙上の如くである。(九二八)

## 六番 衛生課掃除小頭

五十七歳 家族七人

彼は〇〇〇派出所の市役所衛生課の人夫小頭である。市役所に勤める様になつてから既に二十年になる。彼は大阪で生れた。父は上福島で大工をして居た。彼が未で男三人の兄弟であつたが彼が九つの時に父は亡くなつてしまつた。其後母が二度目の夫を迎へて更に三人の義兄妹を持つに至つた。其等の兄弟は皆死んで今残つて居るのは彼と義妹一人とである。

十六歳の時に便があつたので土佐にゆき、町に出るのに七里もあらうと云ふ或る寒村で佐伯と云ふ人に使はれて百姓仕事をして居た。土佐の百姓は大きな百姓でも多勢の作男を置く様な事は無い。作男は彼一人のみであつた。農繁期になれば日雇人を雇つて仕事をさせる。其様な時は雇人を指揮して働かせる。平日は屋敷の手入れ等の雑務である。其處の厄介になつて妻を娶り十年程其家に居た。其後事情あつて其女と分れ近村で郵便配達をして居た。現在の妻君は伊豫の生れであるが其時に一しよになつたものである。卅六の年に大阪に出て來た。大阪に出ては土佐で貯蓄した僅かの資本で炭屋をして居た。炭は土佐からひいて居たのであつたが思ふ様に送つて呉れなかつたので失敗し、市役所の衛生課に人夫として勤める様になつた。其れから今日迄二十年になるのである。子供は六人。男三人の女三人である。

長女は十七歳で神戸に嫁入らせてあり。長男は十九。或鐵工所で働いて居る。日給は一圓五十錢で四十五六圓の收入がある。彼の收入は月六十圓程で兩方合はせて百圓餘になる。其れで七人の家族をやつてゆかねばならぬのであるから家計は豊かでない。

斯くの如く今は兎も角暮らして居るが一時は可なり困難をした。同じ市役所でも市電に入れば車掌なり運轉手なりして今迄勤めれば百圓内外の收入にはなつて居たであらうが衛生課の人夫となつたばかりに仕事は樂であるが斯くも少しの報酬に満足せなければならぬ事となつた。然し今となつては後悔しても先に立たない。勤めぬいて長男の生長するのを待つより道がない。彼には何の楽しみもない。

彼にとつて土佐の十年は楽しいものであつた。人間には魚が孵化した場所に歸らうとする習性があると同じ様に故郷に歸りたがる不思議な先天的の欲望がある。大阪に歸りましたが間違つた處に歸つて來たのである。そして其處で餘計な苦勞をして居る。都會の文化的施設によつては慰めらるべき何物もない。憐れな程少ない收入で一家七人が糸よりも細い煙りを立てる爲めか、見よ苦勞の結果彼の顔は拳の如くに萎びて手足は枯木の様に瘦せてしまつた。しかも六人目は今年二歳の少女である。信心は天照皇大神を拜んで居る。一時親交會と云ふ此附近でやつて居る社交の會に入つて居たが幹事が氣に食はないので止めた。(九三〇)

### 七番市電監督

三十七歳 家族三人

御藏跡町邊は下層の人が多く住んで居る。彼の家も其一角で随分分りにくい處である。折から彼は自分で壁を塗る處だと云つて赤土に石灰を混じて水を注ぎ棒切れでこね初めて居た處でお尋ねの家は自分の家であるが何用かと云ふ。「いや大家は造つて呉れません來年は取り壊すと云つて雨の漏り等平氣で居ます」と云ふ。

彼は〇〇〇詰めの市電監督である。廿四時間交代であるから午前八時に行つて同時刻に歸つて來る。それで一日休むで又出てゆく。今戻つた處であるが仕事をする事が好き故此の様に働いて居る。市電の方は給料は悪くない。悪くはないが其中にも色々な矛盾した點がある。

一、長く勤續して居た者と新しく入つて來た者との賃銀が殆んど差が無い事。  
二、能率のみを重く見て賃銀を定むる爲め十八九の獨身者も四十歳五十歳の澤山の家族を持つた者も收入が同じ様になつて居る事。

一、の様な事が何故起つて來たかと云ふと古い者は物價の安い勞働賃銀の安い時に雇はれて居るので八十錢位から昇つて來た人が多い。處が昨今物價が騰貴し勞働賃銀も暴騰した爲め昔日の様な賃銀では誰も來る者が無くなつた。爲めに八年前から働いて居た者も去年から働き出した者も日給僅か五錢位の差である様な場合が澤山

ある。妙な事になつたものだ。

二、は賃銀の決定は何處でも能率を標準として居る。其れ故市電にした處が其れで結構な様なものゝ人事係等も居る事故其他の條件をも参考して貰つて何とか出来な  
いものであらうか。其れともう一つは運轉手なり車掌なりが監督に昇進した場合に  
は超過時間に對する歩が無くなる爲め五圓なり十圓なりの昇給が無ければ減給と同  
じ結果となる。『監督となる事は名譽であるけれど減給されて名譽を得ねばならぬの  
はつらい事ではないか。是非以前通り昇給する事として貰ひ度い。でも電車従事員四  
千が團結出来ないからにはどんなにしても是等の要求は容れられる様な事はあるま  
い』其様な事を考へながら彼は隔日〇〇二丁目の交叉點に立つ。そして新たに出来  
たビルディングを見あげたり。不釣合ひに長い、真中から推し込む仕掛のボキ―車  
の爲め恐ろしく磨り減つたレールの曲り目に油を塗らせたりして居るのである。『し  
かし勿體無い事である。課長の〇〇さんは以前我々の爲めに賃銀を値上げをして下  
さをつた。今各工場が衰微して賃銀が一圓から一圓五十錢程な時に其様な面倒な事  
持ち出すなんて罰が當るよ。全く。然し課長が我々の共濟會の會長を兼ねた時の手腕  
は凄かつたな。あれが強いても前の共濟會長であつたら言ひ度い事か云へたのであ  
つたが前會長は事務員として買収せられ……いや何不足あつて此様な事を考へるも  
のであらうか』杯考へつゝ頻繁な往來の電車に世話を焼いて居る。其様な事を多く

考へた日に限つて仕事の上に錯誤を來たす様な事が多い。『〇助役が市電の方に指圖  
をする様になつてからは市電の事務員にも監督から任用し書記迄でも昇れるのであ  
る。學校出も並用して居るけれども忍耐強い異常に勤直な監督上りの事務員の爲め  
に推し負けて學校出は漸時敗退する傾向がある。』

彼の故郷は徳島市である。兄弟は兄と彼の二人で母は彼が七才の時に亡くなつ  
た。其後父は大阪に出てメリヤス機械の附屬品工場に通つて居たが子等の爲めにと  
云つて後妻を迎へる事はしなかつた。其後徳島市の伯父の家に預けられて居たが尋  
常科を卒業して十二の年に父を頼つて來阪し扇子商店に奉公する事となつたが其處  
に九年して明治卅八年六月海軍に志願し吳海兵團に入團した。太正元年に至る迄七  
箇年の海上生活をしたのであるが、船は春日、隅田、初春の三艦に乗つた。其中で  
隅田に乗つて南濱に居た頃は可なり面白かつた。之は楊子江沿岸の邦人を保護する  
警備艦で楊子江の流域が年々代る爲め船足は至つて浅く吃水線以下三尺あるのみで  
ある。然かも大抵の船には龍骨が一線をなして居るものであるが此船の船腹は平面  
をなして居た。其れで速力も十二哩と云ふ遅い艦で流れが七哩とすれば五哩しか上  
れない。船首に六尺程の滑稽極まる艦であつた。彼は此艦で料理の方はバックすると云  
ふ仕掛で百二十噸程の滑稽極まる艦であつた。彼は此艦で料理の方に關係して居り  
材料の買ひ入れ等の事で上陸し支那人と接觸する場合が多かつた。支那語は少し分

る。初春は驅逐艦であつて朝鮮に航行する事が多かつた。

大正元年に現在の妻と結婚して其後二人の男の兒を擧げた。共に亡くなり三人目の女の兒（昨年十月生れ）丈け生きて居る。最初二人の死んだのは彼も妻君も共に氣性の激しい性質であつた爲めに折合悪しく精神的に子の存在する餘地のない家庭であつたが爲めであらう。今では漸く落ちついて幸に女兒（二歳）が丈夫で大きくなつて居る次第である。

二階四疊半。階下四疊半に三疊二間。敷金は二十圓、家賃は十圓である。家賃は比較的安いが本年は壊すからと云つて少しも手入れをして呉れない。子女の教育については未だ何も考へて居ない。暇のある時には肩の凝らない講談物等を讀んで居るのであるが近く市の教育部で建てた御藏跡町の圖書館が開館するのであるから餘暇があつたなら其處で本を讀まうと考へて居る。

長く海軍に籍を置いた關係から嗜好は一般に新しい事を好む方である。思想は古い方で勞働運動と云ふ様な事は理想であり、之れが實現には尙數百年を要するであらうと思つて居る。但し自己の利益と云ふ立場からして市電監督の勞働條件が何んかの手によつてより立派になり報酬がよりよくなる事を痛切に希望して居る人である。

新聞は朝日新聞を讀んで居る。本としては料理の本其れに貯金法の研究をして居

る。音楽は軍樂隊を聴きに行く事があるのみである。家の宗教は眞言宗と云ふ事になつて居るけれども佛様を拜む事は數へる程で寺に參る様な事は全然ない。將來は食料品店を遣り度いと思つて居る。先づおでん屋位から初めて料理屋を開き然る後に目的を遂げる考へである。煙草は嗜き酒も隔日二合宛飲む。金露をやつて居る。菊王と（？）云ふ一升一圓四十五錢の悪い酒だが之も用ひる事がある。共に灘の酒ある。（10.11）

## 八番 市役所衛生課人夫

五十二歳 家族四人

下寺町の寺々は徳川時代の大阪を忍ぶによい。天王寺茶白山から續いた高堂に正しく並んで大阪人の爲めに現在、未來を見守つて呉れて居るかの様である。寺に因んだ商賣が多く小鳥屋、古物屋、彫刻店等が並んで寺町の片側をなして居る。其裏は下層社會の人達の住宅で道は狭く家々は汚い。南鳩會等と看板を書いて鳩を澤山に飼つて居る家がある。其上を一群の鳩が飛んで廻る。鳩屋の中では好鳩家が數名、土佐から歸つた圖南號だの、横濱から歸つた福羽號だのを批評して居る。「今度は如何ですか先達の白と土鳩とをかけて見ては」等と云ふ様な問答をし乍ら趣味の爲めに現をぬかして居る處である。近所に愛染學校と云ふのがある。彼の家の周圍はこの様な次第でとある板圍ひに面した平家長屋の狭い家で入口には南無阿彌陀佛と妙な



焚字魔よけの符等數片並べて張りつけてある。

主人は今日月に二日の公休を取つて築港に魚釣りに行つた處である。主人は公休日には必ず築港に魚釣りに出掛ける。大抵の人は砂魚を釣らうとして居るが彼はチヌを釣らうとして居る。玄人ではないが普通の人よりは一枚丈上である。此日三枚のチヌが掛つた。其中二枚は水面に上らぬ間に逃げてしまつて六寸五分のが一匹釣れた。其れを携へて歸つて来て待たせて濟まなかつた旨の挨拶をした。

彼の生れたのは東成郡〇〇村である。父は彼の七つの時、母は二十歳の時に亡くなつた。兄弟は三人。兄のみであつたが一人は無くなり一人は住吉で鶏肉を商つて居る。七歳に父と分れ母の手に養はれて大きくなつた。十四の時に村役場の給仕となり廿迄居た。廿の年に大阪に来て平田石鹼工場と云ふに職工をして三年。次に化粧品工場の職工として一年。市役所に勤める様になつたのは明治四十年の五月からである。今年で十四年目になる。日給一圓九十二錢である。十四年勤続市役所衛生課〇〇〇出張所人夫小頭の名に見れば少し安い。

彼の家は六疊に三疊の二間である。東向きで西に小庭があり部屋の内は極めて氣持ちよく整頓せられて居る。奥の六疊で午睡して居るのは長男でやはり衛生課の人夫をして居る。玄關の土間に立つて話の模様を熱心に聞いて居るのは娘の養子で此人も衛生課の人夫である。娘は臺所で働いて居るが腹が大きい。其處に彼の妻君が

歸つて来て彼と並んで色々語る。彼も彼の妻君も既に餘程老いて居る。病氣と云つた事はありませんが、一度大きな腫れものが出来ました。それは梅毒から來たらしいのです。最初右脇に大きな腫れものが出来ましたから醫者の處に行つて突きましたら僅か茶汲みに一杯程の膿が出たのみで其出来ものは無くなりました。暫くすると左脇に之れは又非常に大きい腫物が出来ました。性質は右脇に出来たのと同じで其れが下の方の淋巴腺に通じて居るらしく毎日唸り乍ら寝て居ました。醫者の處に行くと醫者は其腫物が餘りに大きいのに驚いて當方では到底突く事は出来ない病院に入院して切開しなければならぬ、入院するとなれば私の方から精しく紹介もしてやるし、特別に便宜も與へて貰ふ様に話しをつけても遣ると云ふのです。然し私は金がありませんから其様な事は出来ぬ。此處迄連れて來て貰つたについても僅かな費用ではあるが苦心して金策して出たのであると云ひます。君は其様な事を云ふが、肋骨が二枚腐れて居るが此儘に置いたなら一命を失ふに定つて居るぞと云ふのです。命に懸はる様な事があつてもよいから一つ突いて貰ひ度いと云ひました。別な醫者に行つて見て貰ひましたら前の醫者の診察と同じ事でした。肋骨が二枚腐れて居るから自分が突く事はならぬが入院するなら紹介して遣るとの事でした。私は是非に突いて呉れと云ひますと其醫者は思ひきつて突いて呉れました。五合程膿がとれました。何うせ腫れ出してから六箇

月になつて居たもので寝る時には妻に抱かされて置いて寝て居た様な都合でしたので其様に多量の膿が入つて居たのです。處が不思議な事には其だけの膿がされたのに拘らず口は直き閉ぢて腫れは少しもひきませんで數日して又以前の通りの重苦しさになりました。左脇から下腹に掛けてスツカリ腐れて居るらしいのです。私は死ぬものと斷念して死ぬなら微毒の禁物と云はれてゐる天麩羅を食ひ樂しみをして死んで遣るつもりで或晩澤山の天麩羅を買つて來させ其を皆食つて遣りました處が非常に病めまして一夜の間に腫れ物の容積が倍程になり遂に其れが左下腹の淋巴腺に破裂して乳の下の大腫物の膿汁は悉く流れ出しました。出るわ出るわ一升五合程の膿が流れ出しました。其處で下腹の皮をめぐつて辨の様にし別に竹の節で膿吸器を作り置き毎日二三回宛其膿吸器を内股に當て、安全辨をめぐり指先きで患部を推しつけますと膿がとつと下り其器に一杯になりました。斯くして一月程したら其腫物は癒りました。其の痕が指で推した處と安全辨の處とが穴になつて残つて居ります。醫者の話しては肋骨が二枚腐れて居ると云ふ話でありましたが肋骨が腐れて居れば仲々此様に生きて居れる筈はありません。原因と云つてありませんが毒は親から貰つたものらしいございます。珍らしい微毒の話を聞き今更の様に彼の容貌を熟視するの何處に一點の病氣もありさうにない。顔色は健康に輝いて居る。只少し眼が明かでない。眼にも少し毒がまはつて居るのかも知れない。

一時彼が腫物で寝て居た時は何もかも妻君の厄介になつて生計の道を講じて居たのであつたが彼女は身體も弱し今では何も内職をして居ない。子供は五人。女三人の男二人である。家に居るのは長女の聲と二男とで後は皆嫁つてしまつた。談適々市衛生課人夫の賃銀が安い事に及ぶと家中異口同音に相和して不平を云ふのである。然し下水に關係はなく便所も共同便所のみであるし、其方も係が定つて居たのだから單に塵埃の方許りで勤務時間も短いのであるから餘り云ひ度い事を云ふのはよくない事である。彼が結婚したのは廿歳の時であつた。其れから二三年宛置いて五人の子をあげた。僅かの報酬に甘んじて大阪市の爲めに犠牲となつて奮闘する人である。新聞は時事新報、講談物は貸し本屋から借りて見る。娛樂としては上述の魚釣り丈けである。眞宗であるが他に天照皇大神を祀つて居る。酒を飲む煙草は喫はない。將來とも衛生人夫で通す考へである。(二〇四)

### 九番 市役所衛生課掃除夫

四十八歳 家族一人

彼の妻は先月の十一日に亡くなつた。彼が妻と結婚したのは彼の三十一歳の時妻君が二十一の時であつた。其後一年過ぎ位に赤坊が生れたが其等の赤坊は二つか三つになると皆死んでしまつた。生れる時には發育のよい大きな赤坊で誰からも賞められるのであつたが少し大きくなると皆ひきつけて死んでしまつた。醫者の言によ

れば哺乳が多いと乳を吐く。其結果頭蓋内に作用し脳神経の中樞に故障を生じる。頭蓋内が故障を生ずると之が回復は頗る困難である。身體の他の部分に故障を生じた様に簡單に回復するものではない。爲めに故障を生じた箇所神経系統の掌る例へば心臓が活動を止めるのであると云ふ。彼の小供は悉く此ひきつけによつて死んでゐる。ひきつけは遺傳するものと見へる。其れとも小兒の環境に引きつけを起すべき何等かの原因が存在して居り之れに氣がつかずに六人の小兒を亡くしたものであらうか。今度のは七人目であつた。至つて難産で母は其爲めに死に、小兒も三日して死んだのである。妻君が亡くなつてから一月目である。彼は微笑して居る。そして彼の左の眼から涙を垂れて居る。

彼の家は天王寺村の中道にあつた。父は理髪師であつた。當時の理髪師は鬘を結ぶので今日とは全然變つて居た。彼の父も終りの頃は鬘を結ぶ事を止めて今日と同じ理髪師を始めたのであつたが上手にゆかない様であつた。三人兄妹で彼は次男三番目は妹である。皆達者では東成郡〇〇町で相當暮して居る。妹は神戸で近頃音信不通故消息は分らない。彼が十一の時に父が亡くなつた。母も數年して後を追つたので彼は十二の時から或鹿皮細工をする店で働いて居た。製造の方に關係して居たのであるが其後鹿が捕れなくなつたので同業者の中で馬の皮を之に代用する者が出来て來た。馬の皮は價は半分で仕上りは鹿皮よりも立派に出来る。爲めに鹿皮

は斯界から驅逐せられて今では下駄の緒でも財布でも大抵馬皮を用ひて居る。鹿皮は極めて珍らしくなつた。大體鹿皮は水が掛ると固くなつて駄目なものである。彼は其結果失職してしまつた。鹿皮細工を始めてからはもう廿五年、卅七の年であつた。職人故一時土方をして見たが疲れて得堪えず、其内少ない貯蓄を食ひ盡して借金にする。其借金が嵩まる。途方に暮れて居ると友人が「どうだ掃除夫は汚い仕事であるが、一つ行つて見ないか」と云ふ。仕事は毎日あるかと尋ねたらあるとのこと。で市役所衛生課の人夫となつた。役所に勤めた當時の給料は四十五錢であつた。其れから七年して今日は一圓七十八錢である。之で一家を維持し次ぎ次ぎと生れる赤坊の養育費を仕拂つて來たものと見える。尤も妻君は極めて丈夫な人で内職に状袋張りをしては居た。衛生課人夫の仕事はつらい。其れは澤山な塵芥を集めて運搬するので骨が折れる事も折れるが、其外に極端に汚れたものを集むべく餘儀なくさせらるる場合が多い。出す方は一向頓着はないので思ひ切つた品物を出す。それに「皆出して下さいよ残つて居ては監督様から私共の落ち度になつて叱られますから」と云つて廻るけれども仲々皆出して呉れず。掃除した後塵が澤山あつたと云つては痛くない腹を探ぐられる事が多かつた。最初の二年程は實際人知れず何度泣いたか知れない。之れは彼が泣き虫の勢でもある。其後監督になつて一組六人の組長となつたけれども身體は弱はる一方であるし仕事は監督になつて益々困難になつた。

萬事模範として働かなければならないからである。それから皆から穢多扱ひにされる事が一番悔しい。

彼も善行主義者である。立派な人達から教へられる通りに懐には糸屑を入れて居て下駄の緒を切つて困つて居る人に遣る事等を樂しみとして居るのであるが、女達は「私たてられないからすまないがたてゝ頂戴」と云ふ。たてゝやれば黙つて行つてしまふ様な事もある。穢多が自分に媚びて居るわいと云ふ位の考なのであらう。其れは未だよい方で「もう結構」ところと云つて糸も貰はないのが澤山ある。大概の女達は其通りである。こうして廻つて歩くのに「御苦勞様」と云ふ人は十人に一人位の割合である。物質主義事大主義の大阪人から見れば掃除夫は穢多に見えるらしい。是等の心勞と其れに報酬が少ないので今日迄の彼の生活は實に涙の歴史であつた。今又愛妻を失つては嫣然として話して居ながら而かも其の左の眼から涙が流れ出て止め度ないのも無理ならぬ事である。其れから投書と云ふのがある。掃除が行き届かないと衛生課の監督長等宛に何月何日何處に掃除に來た年恰好何歳と覺しく風采如何様な者が何でも内のオシメを盗んだらしいことか塵が一杯だと云つて持つてゆく事を拒んだと云ふ様な無責任極まる投書がいくらかも舞ひ込むので其都度呼びつけられて叱られもし罰も喰ふ。實際罰を喰つた實例を澤山に見て居るので其都度彼は身震ひして恐れをなす。是等の制度は横着な掃除夫にとつては必要な制度である。

けれども些かも謀叛氣のない彼に對しては徒らに恐怖心を起さしめるに過ぎない。

東平野町の複雑した路次の一番奥にあつて東向き二階六疊。下四疊半に三疊。二階は〇〇〇〇と云ふ人に貸してある。彼の女は體格のよい男勝りの人で夫に當る人の世話は勿論、彼の妻君が亡くなつてからは彼の身の廻りの事も大抵遣つて呉れる。其れでヤモヲの彼も幾分慰められるのである。彼が履歷書は何處だつたらうかと相談すれば此箱だらうと云つて履歷書の入つて居る箱を持ち出す。彼が別段に頼まないでも亡くなつた妻君の佛壇に蠟燭をともす。「役所に勤め出したのは何日からだつたらうか」と云へば「さあね」と云つた様な具合である。彼の女が此家に泊る様になつてから既に七年餘になる。彼女の夫たしか其れであらうと思はれる人（陰鬱に見える人）が湯から歸つたものだらう。手拭を提げて二階の六疊に急な段梯子を登つて行つた。其後に漬物の重しを取つたと思はれる一種の臭氣がして、やがて彼の女は夕飯の仕度を整へお膳にお櫃を抱えて自分の部屋に通ずる梯子段を登る。

彼には何も楽しみはない。年に數へる位活動寫眞を見にゆくし、一回位喜劇を見る。生計が豊かでないから止むを得ない。身體は丈夫で未だ醫者に見て貰つた事はない。家の宗教は日蓮宗である。妻子の命日には和尚様から特に拜んで貰ふ様に約束がしてあるけれども、自分が行つて拜む様な事はない。酒も煙草も用ひない。只々働く人である。「別に妻を痛めた様な事はありませんでした。年も違ひますので娘